

Osaka Medical and Pharmaceutical University Faculty of Nursing

大阪医科薬科大学看護学部

Osaka Medical and Pharmaceutical University Graduate School of Nursing

大阪医科薬科大学大学院看護学研究科

年 報
2025年度

Annual Report 2025

大阪医科薬科大学看護学部・大阪医科薬科大学大学院看護学研究科 2025年度年報 目次

はじめに

I. 沿革	2
-------	---

II. 看護学部

1. 教員組織

1) 教員構成および教員数	4
2) 教員の補充について	4

2. 年間事業

1) 活動内容	6
2) 2025 年度看護学部予算執行額	8
3) 学生在籍数	8
4) 学事一覧	9

3. 運営と教育活動

1) 運営組織	11
2) センター	
(1) 看護学実践研究センター	12
(2) 看護学教育センター	17
(3) 看護学学生生活支援センター	26

3) 委員会

(1) カリキュラム委員会	35
(2) カリキュラム評価委員会	41
(3) 実習委員会	43
(4) ウェブサイト委員会	48
(5) 看護研究雑誌編集委員会	50
(6) 予算委員会	51
(7) 物品管理委員会	52
(8) 就職支援委員会	55
(9) 国家試験対策委員会	58
(10) 看護学部年報編集委員会	63
(11) 国際交流委員会	63
(12) 障がい学生支援委員会	69
(13) 本学部看護学生を対象とする研究審査会	70
(14) 将来構想ワーキンググループ	72
(15) カリキュラムワーキンググループ	74

4) 教育活動

(1) 授業科目一覧	78
(2) 各分野の教育活動	84

Ⅲ. 看護学研究科

1. 教員組織

1) 教員構成および教員数	100
---------------	-----

2. 年間事業

1) 年間事業活動内容	100
2) 2025 年度看護学研究科予算執行額	101
3) 学生在籍数	102
4) 学事一覧	103

3. 運営と教育活動

1) 運営組織	105
2) 委員会	

看護学研究科大学院委員会	106
--------------	-----

3) 教育活動

(1) 博士前期課程

①授業科目一覧	114
②修了者学位論文タイトル一覧	119

(2) 博士後期課程

①授業科目一覧	120
②修了者学位論文タイトル一覧	121

Ⅳ. 研究活動

1. 研究実績

1) 外部資金・競争的研究資金等の申請採択状況	124
2) 各自の業績（外部資金獲得除く）	128

Ⅴ. 社会活動

	134
--	-----

はじめに

看護学部および看護学研究科では、建学の精神「至誠仁術」の理念のもと、専門的知識と実践力に加え、他者を思いやる姿勢を備えた看護職の育成を基本方針として、教育・研究活動を展開してきました。医療・看護を取り巻く環境が大きく変化する中においても、本学部・研究科は社会的要請を的確に捉え、教育内容の充実と学修環境の改善に継続して取り組んでまいりました。

2025年度は、学部および大学院教育の内容と体制を点検・評価し、さらなる発展につなげる一年となりました。学部教育においては、2022年度改訂カリキュラムの検証を進めるとともに、看護学教育モデル・コア・カリキュラムへの円滑な移行を見据え、カリキュラム委員会を中心に体系的な検討を行いました。また、本学の特色である多職種連携教育については、医学部・薬学部との協働のもと、学生が専門職としての役割を理解し、チーム医療に主体的に参画できる力を養うことを目標に取り組みました。

大学院教育においては、臨床現場や地域における高度で複雑な課題に対応できる専門職および研究者の養成を目的として、教育内容の見直しと将来構想に関する議論を進めました。博士後期課程における新たな教育の在り方や、学士・修士課程を一体的に捉えた教育体系について検討を開始し、大学院教育の質的向上と発展に向けた基盤整備を行いました。

学生支援の面では、安全で安定した学修環境の確保を重視し、北キャンパスにおける災害対策体制の整備を進めました。併せて、情報処理室の再活用、講義・演習・実習環境の改善、シミュレータ教育の充実などを通じて、教育方法の多様化と学修効果の向上を図りました。

国際交流については、これまでに築いてきた海外協定校との関係を基盤として、学生および教職員の交流を継続的に実施しました。海外研修生の受け入れや学生派遣の取り組みを通じて、異なる文化的背景を理解し、広い視野をもって看護を捉える機会を提供しました。

また、2025年度は、看護学部開設15周年、大学院看護学研究科開設10周年という節目の年を迎え、記念式典を開催しました。教育・研究・社会貢献の歩みを振り返るとともに、本学部・研究科の発展を支えてくださった多くの関係者の皆様への感謝の意を共有する貴重な機会となりました。

これらの取り組みを通じて、本学部・研究科は、変化する社会や医療ニーズに柔軟に対応できる看護人材の育成に努めてきました。今後も、これまで培ってきた基盤を生かしながら、教育・研究のさらなる充実を図ってまいります。引き続き、皆様のご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

看護学部長
看護学研究科長
鈴木 久美

I . 沿 革

沿革

1927	(昭和 02)	年	2 月	財団法人大阪高等医学専門学校設置認可
1927	(昭和 02)	年	4 月	大阪高等医学専門学校開校認可（修業年限 5 年）
1929	(昭和 04)	年	3 月	大阪高等医学専門学校附属看護婦学校設立認可
1946	(昭和 21)	年	3 月	大阪医科大学設置認可（旧制大学）
1946	(昭和 21)	年	4 月	大阪医科大学予科設置
1948	(昭和 23)	年	2 月	大阪医科大学医学部開学認可
1951	(昭和 26)	年	3 月	学校法人大阪医科大学認可（組織変更による）
1952	(昭和 27)	年	2 月	大阪医科大学設置認可（新制大学）
1952	(昭和 27)	年	3 月	大阪高等医学専門学校廃校
1959	(昭和 34)	年	3 月	大阪医科大学大学院医学研究科設置認可
1965	(昭和 40)	年	1 月	大阪医科大学進学課程設置認可
1978	(昭和 53)	年	4 月	大阪医科大学附属看護専門学校設置認可
1982	(昭和 57)	年	12 月	大阪医科大学附属看護専門学校 3 年課程（全日制）設置認可
2005	(平成 17)	年	2 月	大阪医科大学附属看護専門学校新校舎竣工（現 看護学部棟）
2009	(平成 21)	年	10 月	大阪医科大学看護学部設置認可
2010	(平成 22)	年	3 月	看護学部研究棟竣工
2010	(平成 22)	年	4 月	大阪医科大学看護学部開設
2012	(平成 24)	年	3 月	大阪医科大学附属看護専門学校閉校
2013	(平成 25)	年	10 月	大阪医科大学大学院看護学研究科設置認可
2014	(平成 26)	年	4 月	大阪医科大学大学院看護学研究科開設
2014	(平成 26)	年	4 月	学校法人大阪医科大学と学校法人高槻高等学校の法人合併
2016	(平成 28)	年	4 月	大阪医科大学と大阪薬科大学の法人合併，新法人「学校法人大阪医科薬科大学」設立
2021	(令和 03)	年	4 月	大阪医科大学と大阪薬科大学の統合により大阪医科薬科大学に名称変更

Ⅱ．看護学部

1. 教員組織

1) 教員構成および教員数

教員定員は 42 名である。

令和 8 年 3 月 31 日現在

領域	分野	教員構成（カッコ内は定員数）					合計
		教授	准教授	講師	助教	助手※1	
実践支援看護学	基礎看護学	1（休職中）					
	基盤看護学	0（1）	2（2）	0（0）	2（2）	1	5
	看護教育学	1（1）	0（0）	0（0）	0（0）	0	1
	人文社会学	1（1）	0（0）	0（0）	0（0）	0	1
療養生活支援看護学	急性期成人看護学	1（1）	1（1）	0（0）	1（1）	0	3
	慢性期成人看護学	1（1）	0（1）	1（0）	1（1）	0	3
	精神看護学	1（1）	0（1）	1（0）	0（1）	1	3
	老年看護学	1（1）	0（1）	1（0）	1（1）	0	3
	がん看護学	1（1）	1（1）	0（0）	1（1）	1	4
	臨床医学	2（2）	0（0）	0（0）	0（0）	0	2
地域家族支援看護学	小児看護学	1（1）	1（1）	0（0）	1（1）	0	3
	母性看護学・助産学	0（1）	1（3）	2（0）	1（1）	1	5
	在宅看護学	1（1）	2（2）	0（0）	0（1）	1	4
	公衆衛生看護学	1（1）	0（2）	2（0）	0（1）	1 ※2	4
	社会医学	1（1）	0（0）	0（0）	0（0）	0	1
計		14（15）	8（15）	7（0）	8（11）	6 ※3	42（42）

※1. 助手の定員は看護学部全体として 5 名

※2. 特別職務担当教員（助手）

※3. 特別職務担当教員（助手）1 名を含む

2) 教員の補充について

【採用】

令和 7 年 4 月 1 日付で、准教授 1 名（急性期成人看護学）を採用した。

令和 7 年 4 月 1 日付で、准教授 1 名（小児看護学）を採用した。

令和 7 年 4 月 1 日付で、准教授 1 名（在宅看護学）を採用した。

令和 7 年 4 月 1 日付で、助教 1 名（老年看護学）を採用した。

令和 7 年 4 月 1 日付で、助手 1 名（がん看護学）を採用した。

令和 7 年 4 月 1 日付で、助手 1 名（精神看護学）を採用した。

【退職】

令和 8 年 3 月 31 日付で、教授 1 名（社会医学）が退職した。

令和 8 年 3 月 31 日付で、准教授 1 名（在宅看護学）が退職した。

令和 8 年 3 月 31 日付で、助教 1 名（がん看護学）が退職した.

令和 8 年 3 月 31 日付で、助手 1 名（基盤看護学）が退職した.

令和 8 年 3 月 31 日付で、助手 1 名（精神看護学）が退職した

令和 8 年 3 月 31 日付で、特別職務担当教員（助手）1 名（公衆衛生看護学）が退職した

【実習補助員の採用】

母性看護学・助産学（2 名）、公衆衛生看護学（2 名）を各実習期間内で不定期雇用した.

2. 年間事業

1) 活動内容

看護学部では各センターおよび各委員会、看護学研究科では大学院委員会を中心として、2025年度の年間事業計画を策定し、教育および研究の質向上を目標に、組織的かつ計画的に教育活動および研究活動に取り組んだ。本年度は、学部カリキュラムの評価および看護学教育モデル・コア・カリキュラムへの対応、大学院教育の見直し、国際交流の充実、災害対策体制の整備、教育環境の整備を重点課題として位置づけ、教育・研究活動を推進した。さらに、看護学部開設15周年および大学院看護学研究科開設10周年という節目の年として、記念事業の準備および実施にも取り組んだ。以下に、2025年度に実施した主な事業について報告する。

(1) 教育活動について

①教育の充実と教育環境の整備

令和7年（2025年）度は、対面授業を基本としつつ、一部にオンデマンド型授業を効果的に取り入れ、学生の主体的学修を促進する教育体制の構築を図った。あわせて、学生の健康状態に配慮し、感染症対策を含めた安全管理を徹底し、講義・演習・実習を安心して実施できる学習環境の維持に努めた。

本学の特色である多職種連携教育については、教育センターを中心に医学部・薬学部と連携し、多職種連携科目「医療人マインド」（1年）、「医療と専門職」（2年）、「医療倫理」（3年）、「医療安全」（4年）を全学年で実施した。講義および3学部合同のグループワークを通じて、学生の多職種理解と協働能力の育成を図った。また、「多職種連携－臨床カンファレンス」については、母性・精神・急性・慢性の4分野での実施を継続した。

文部科学省による看護学教育モデル・コア・カリキュラム改訂への対応として、引き続きカリキュラム委員会およびカリキュラムワーキンググループを中心に、カリキュラム内容の検討・整理を進め、必要な申請準備を行った。

教育環境の整備としては、情報処理室の活用方法を検討し、2026年度からの教室利用に向けた整備を進めるとともに、「看護学部教育環境整備のための募金」を活用し、学修環境の改善を行った。

②安心で安全な学生生活の支援

学生が安心して学生生活を送ることができるよう、学生生活支援センターを中心に、防災・災害対策体制の強化を図った。看護学部災害対策マニュアルについては、既存の学内部署のマニュアルを反映した内容として整備し、教職員への周知と活用促進を行った。

学生が安心で安全な学生生活を送れるように、学生生活支援センターを中心に、災害対策マニュアルの充実を図った。2018年に作成された看護学部の災害時（地震）対応簡易マニュアルや大学病院のマニュアルを組み入れて、看護学部災害対策マニュアル完成版を作成し、学科会議で教員に周知を図った。

③入試制度の改革

アドミッションポリシーに基づいた学生選抜を実現するため、導入した面接を含む一般選抜入試や外部試験利用等の新たな入試制度について、その運用状況を点検・評価した。受験者動

向や入学後の学修状況を踏まえ、より適切な学生選抜方法の検討と改善に継続的に取り組んだ。

④看護職国家試験対策および試験状況

看護師・保健師・助産師国家試験に向けて、国家試験対策委員会を中心に、対策講座や模擬試験を計画的に実施し、学生が継続的に学習できる支援体制を整えた。特に、チューター教員との連携を強化し、学生一人ひとりの学習状況に応じたきめ細かな指導を行うことで、高い合格率の維持を目指した。

⑤国際交流の推進

海外大学との交流を推進し、国際的視野を備えた看護専門職の育成を図った。海外からの研修生受け入れやサマープログラムの実施、International Dayなどの交流行事を通じて、学内外の交流活性化に努めた。また、海外派遣およびオンライン国際交流プログラムへの学生参加を促進し、加えて、新たな海外大学との大学間国際協定締結に向けた準備を進めた。

⑥教育の質の向上への取り組み

看護学部および看護学研究科の教育・研究活動について、外部委員を含む教育研究内部質保証会議分科会において継続的な評価を行い、教育の質保証に取り組んだ。また、教員による自己点検・自己評価を促し、年報による業績報告を通じて教育・研究活動の改善につなげている。

(2) 研究活動について

①競争的資金の獲得

科学研究費補助金をはじめとした競争的資金の獲得を推進するため、申請支援や研究環境の整備を行った。他大学との共同研究や外部資金（AMED、民間助成金等）への応募を奨励し、研究活動のさらなる活性化を図った。

②研究支援

看護学実践研究センターを中心に、教員および大学院生を対象とした研究支援体制を強化した。看護研究継続セミナーや看護研究会を開催し、研究方法の習得や研究成果の共有を通じて、研究能力の向上と研究成果の発信を推進した。

(3) 社会貢献について

看護学実践研究センターを中心に、看護職を対象とした人材育成教育セミナーや、地域住民を対象とした健康づくり事業を継続的に実施した。また、看護キャリアサポートセンター等と連携し、リカレント教育への参画を進めた。

2) 2025 年度看護学部予算執行額

予算執行額	57,064,093	円
【内訳】看護学部教育経費	45,064,093	円
看護学部奨学金経費	12,000,000	円
看護学部研究活動経費	0	円

3) 学生在籍数

2025 年 5 月 1 日現在

学年 (入学定員)	1 年 (85)	2 年 (85)	3 年 (85)	4 年 (85)	合計 (340)
男	6	3	7	0	16
女	91	80	91	92	344
計	97	83	88	92	360

2024 年 5 月以降退学者 2 名あり

2025 年 3 月現在 1 年生 : 女 : 80 名

2025（令和7）年度 学事予定表 教職員用

4) 学事一覧

2025年 4 月			5 月			6 月			7 月			8 月			9 月		
日 曜	日 曜	内 容	日 曜	日 曜	内 容	日 曜	日 曜	内 容	日 曜	日 曜	内 容	日 曜	日 曜	内 容	日 曜	日 曜	内 容
1 火	木⑤	新入生オリエンテーション	1 木⑤	火④	創立記念日	1 火④	1 金①	1,2,4年 通期試験 15:00	1 金①	1,2,4年 通期試験 15:00	1,2,4年 通期試験 15:00	1 金①	1,2,4年 通期試験 15:00	1 金①	1,2,4年 通期試験 15:00	1 金①	1,2,4年 通期試験 15:00
2 水	金⑤	臨時 学部・研究科教授会 14～ 新入生オリエンテーション	2 金⑤	水③	月⑧	2 水③	2 土	希望者対象 発展授業	2 土	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	2 土	希望者対象 発展授業	2 土	希望者対象 発展授業	2 土	希望者対象 発展授業
3 木	土	憲法記念日	3 土	木⑦	水⑦	3 木⑦	3 木⑦	希望者対象 発展授業	3 木⑦	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	3 木⑦	希望者対象 発展授業	3 木⑦	希望者対象 発展授業	3 木⑦	希望者対象 発展授業
4 金①	日	みどりの日	4 日	水⑨	東海連携協議会(予定) 健康診断:2年 13:00～	4 水⑨	4 金①	1,2,4年 通期試験 15:00	4 金①	1,2,4年 通期試験 15:00	1,2,4年 通期試験 15:00	4 金①	1,2,4年 通期試験 15:00	4 金①	1,2,4年 通期試験 15:00	4 金①	1,2,4年 通期試験 15:00
5 土	月	健康診断:4年 13:00～	5 月	木⑩	健康診断:2年 13:00～	5 木⑩	5 土	希望者対象 発展授業	5 土	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	5 土	希望者対象 発展授業	5 土	希望者対象 発展授業	5 土	希望者対象 発展授業
6 日	火	振替休日	6 火	金⑩	健康診断:2年 13:00～	6 金⑩	6 日	希望者対象 発展授業	6 日	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	6 日	希望者対象 発展授業	6 日	希望者対象 発展授業	6 日	希望者対象 発展授業
7 月①	水⑤		7 土	水⑤		7 土	7 月①	希望者対象 発展授業	7 月①	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	7 月①	希望者対象 発展授業	7 月①	希望者対象 発展授業	7 月①	希望者対象 発展授業
8 火①	木⑥		8 日	木⑥		8 日	8 火①	希望者対象 発展授業	8 火①	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	8 火①	希望者対象 発展授業	8 火①	希望者対象 発展授業	8 火①	希望者対象 発展授業
9 水	金⑥	水① 学部・研究科教授会 15～ 希望者対象 発展授業	9 金⑥	月⑨	水⑨	9 水⑨	9 土	希望者対象 発展授業	9 土	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	9 土	希望者対象 発展授業	9 土	希望者対象 発展授業	9 土	希望者対象 発展授業
10 木	土		10 土	火⑧		10 火⑧	10 木	希望者対象 発展授業	10 木	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	10 木	希望者対象 発展授業	10 木	希望者対象 発展授業	10 木	希望者対象 発展授業
11 金②	日	新入生合同研修	11 日	水⑩	学部・研究科教授会 15～ 3年 採点登録開始 3:30	11 水⑩	11 金②	希望者対象 発展授業	11 金②	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	11 金②	希望者対象 発展授業	11 金②	希望者対象 発展授業	11 金②	希望者対象 発展授業
12 土	月⑤		12 月⑤	木⑪		12 木⑪	12 土	希望者対象 発展授業	12 土	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	12 土	希望者対象 発展授業	12 土	希望者対象 発展授業	12 土	希望者対象 発展授業
13 日	火④		13 火④	金⑪		13 金⑪	13 日	希望者対象 発展授業	13 日	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	13 日	希望者対象 発展授業	13 日	希望者対象 発展授業	13 日	希望者対象 発展授業
14 月②	水⑥	学部・研究科教授会 15～	14 水⑥	土		14 土	14 月②	希望者対象 発展授業	14 月②	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	14 月②	希望者対象 発展授業	14 月②	希望者対象 発展授業	14 月②	希望者対象 発展授業
15 火②	木⑦		15 木⑦	火⑨		15 火⑨	15 金	希望者対象 発展授業	15 金	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	15 金	希望者対象 発展授業	15 金	希望者対象 発展授業	15 金	希望者対象 発展授業
16 水	金⑦	学年交流会:1年2年	16 金⑦	水⑩	学科学会議 15～	16 水⑩	16 土	希望者対象 発展授業	16 土	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	16 土	希望者対象 発展授業	16 土	希望者対象 発展授業	16 土	希望者対象 発展授業
17 木③	土	健康診断:1年 13:00～	17 土	木⑩		17 木⑩	17 日	希望者対象 発展授業	17 日	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	17 日	希望者対象 発展授業	17 日	希望者対象 発展授業	17 日	希望者対象 発展授業
18 金③	日		18 日	水⑪		18 水⑪	18 金	希望者対象 発展授業	18 金	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	18 金	希望者対象 発展授業	18 金	希望者対象 発展授業	18 金	希望者対象 発展授業
19 土	月⑥		19 月⑥	木⑪		19 木⑪	19 土	希望者対象 発展授業	19 土	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	19 土	希望者対象 発展授業	19 土	希望者対象 発展授業	19 土	希望者対象 発展授業
20 日	火⑤		20 火⑤	金⑪		20 金⑪	20 日	希望者対象 発展授業	20 日	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	20 日	希望者対象 発展授業	20 日	希望者対象 発展授業	20 日	希望者対象 発展授業
21 月③	水⑦	学科学会議 15～	21 水⑦	土	PA会総会	21 土	21 月③	希望者対象 発展授業	21 月③	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	21 月③	希望者対象 発展授業	21 月③	希望者対象 発展授業	21 月③	希望者対象 発展授業
22 火③	木⑧	学年交流会:3年	22 木⑧	火⑩	健康診断:3年 13:00～・炎祭り	22 火⑩	22 火③	希望者対象 発展授業	22 火③	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	22 火③	希望者対象 発展授業	22 火③	希望者対象 発展授業	22 火③	希望者対象 発展授業
23 水③	金⑧	臨時 研究科教授会 15～ 学年交流会:4年	23 金⑧	水⑩		23 水⑩	23 金	希望者対象 発展授業	23 金	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	23 金	希望者対象 発展授業	23 金	希望者対象 発展授業	23 金	希望者対象 発展授業
24 木④	土		24 土	木⑩		24 木⑩	24 土	希望者対象 発展授業	24 土	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	24 土	希望者対象 発展授業	24 土	希望者対象 発展授業	24 土	希望者対象 発展授業
25 金④	日		25 日	水⑪		25 水⑪	25 金	希望者対象 発展授業	25 金	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	25 金	希望者対象 発展授業	25 金	希望者対象 発展授業	25 金	希望者対象 発展授業
26 土	月⑦	多職種連携講3ー医療倫理	26 月⑦	火⑩		26 火⑩	26 土	希望者対象 発展授業	26 土	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	26 土	希望者対象 発展授業	26 土	希望者対象 発展授業	26 土	希望者対象 発展授業
27 日	火⑥		27 火⑥	金⑩		27 金⑩	27 日	希望者対象 発展授業	27 日	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	27 日	希望者対象 発展授業	27 日	希望者対象 発展授業	27 日	希望者対象 発展授業
28 月④	水⑧	臨時 研究科教授会 15～ 希望者対象 発展授業	28 水⑧	土		28 土	28 月④	希望者対象 発展授業	28 月④	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	28 月④	希望者対象 発展授業	28 月④	希望者対象 発展授業	28 月④	希望者対象 発展授業
29 火④	木⑨		29 木⑨	火⑩		29 火⑩	29 日	希望者対象 発展授業	29 日	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	29 日	希望者対象 発展授業	29 日	希望者対象 発展授業	29 日	希望者対象 発展授業
30 水④	金⑨		30 金⑨	水⑩	多職種連携講4ー医療安全 メモ:授業評価	30 水⑩	30 月	希望者対象 発展授業	30 月	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	30 月	希望者対象 発展授業	30 月	希望者対象 発展授業	30 月	希望者対象 発展授業
31 土	土		31 土	木⑪		31 木⑪	31 日	希望者対象 発展授業	31 日	希望者対象 発展授業	希望者対象 発展授業	31 日	希望者対象 発展授業	31 日	希望者対象 発展授業	31 日	希望者対象 発展授業

備考:統合看護学実習は各分野で6月～11月までに実施予定
備考:看護看護学実習Ⅰについては10月2日～12月4日の期間、毎週木曜日に行う

2025（令和7）年度 学事予定表 教職員用

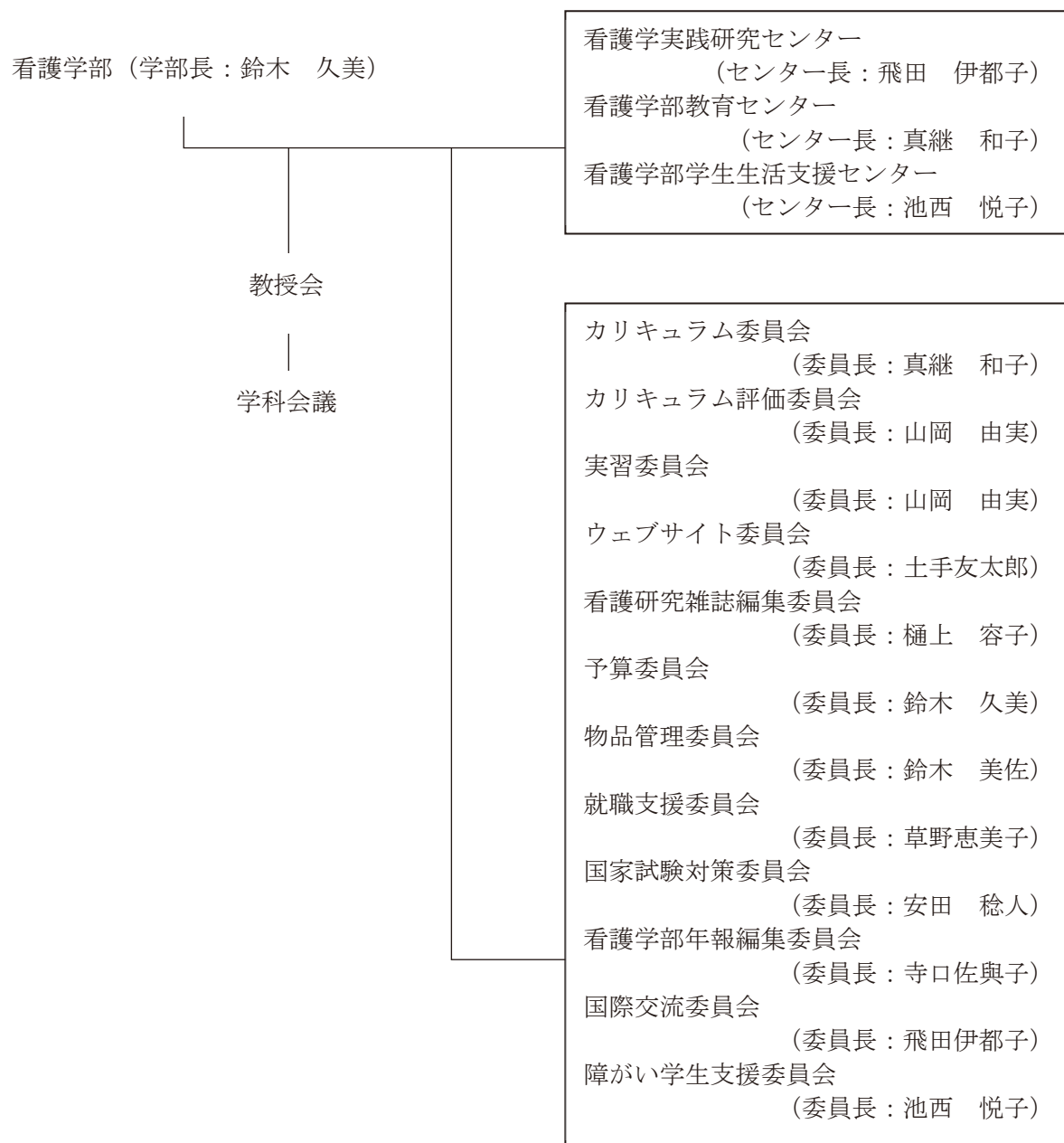
10 月			11 月			12 月			2026年 1 月			2 月			3 月		
日	曜	内 容	日	曜	内 容	日	曜	内 容	日	曜	内 容	日	曜	内 容	日	曜	内 容
1	水	水②	1	土	看護学部15周年・看護学研究科10周年および同窓会結成記念式典・祝賀会	1	月	月⑦ 臨時 学部教授会 15～	1	木	元 日	1	日		1	日	
2	木	水②	2	日	公衆衛生看護学実習Ⅱ 基礎と応用実習Ⅱ 助産学実習Ⅱ 看護の総合実習Ⅱ	2	火	火⑩	2	金		2	月		2	月	次年度研修ガイダンス(新4年)10:40～ 飯
3	金	金②	3	月	文化の日	3	水	水⑪	3	土		3	火	12年 採点締切 15:00 12年 通試科目日程調査	3	火	通試再試採点締切 15:00
4	土		4	火	火⑥	4	木	木⑪	4	日		4	水	12年 通試科目採点発表と手続 14:00 12年 通試科目採点発表と手続 14:00	4	水	1,2,3年 通試再試合格者発表 14:00
5	日		5	水	水⑦ 多職種連携論2－医療と専門職GW	5	金	金⑪ 4年 講義科目採点登録開始 8:30	5	月	月⑫⑬(仮) メモ:シラバス入力開始	5	木	12年 通試再試受験手続へ切 16:50	5	木	卒業式(予定)
6	月	月②	6	木	木⑦	6	土		6	火	火⑭	6	金		6	金	
7	火	火②	7	金	金⑦ 4年 卒業演習採点依頼	7	日		7	水	水⑮	7	土	分 野 別 実 習	7	土	
8	水	水③ 学部・研究科教授会 15～	8	土		8	月	月⑧	8	木	木⑯	8	日		8	日	
9	木	木③	9	日		9	火	火⑪	9	金	金⑯	9	月	通試再試採点登録開始 13:00	9	月	看護と理論の総合 基礎看護学実習Ⅱ 通試再試科目日程調査
10	金	金③	10	月	月⑤	10	水	水⑫ 学部・研究科教授会 15～	10	土		10	火	建国記念の日	10	火	
11	土		11	火	火⑦ メモ:授業評価	11	木	木⑫ 4年 採点締切 15:00	11	日		11	水	学部・研究科教授会 15～ 助産師国家試験(予定)	11	水	学部・研究科教授会 15～ 1～3年 単位認定・進級判定
12	日		12	水	水⑧ 学部・研究科教授会 15～	12	金	金⑫	12	月	成人の日	12	木		12	木	進級発表
13	月	スポーツの日	13	木	木⑧	13	土		13	火	火⑮ メモ:授業評価 12年 採点登録開始 8:30	13	金	保健師国家試験(予定)	13	金	
14	火	火③	14	金	金⑧	14	日		14	水	水⑮ 学部・研究科教授会 15～ 4年 単位認定・卒業判定	14	土		14	土	
15	水	水④ 学科学会議 16:30～	15	土		15	月	月⑨ 4年 講義科目 4年 通試科目採点発表と手続 14:00	15	木	木⑯ 卒業発表 14:00～ 4年 成績開示	15	日	看護師国家試験(予定)	15	日	
16	木	木④	16	日		16	火	火⑫ 4年 講義科目 4年 通試科目採点発表と手続 14:00	16	金	金⑮	16	月		16	月	
17	金	金④	17	月	月⑥	17	水	水⑬ 学科学会議 16:30～ (臨時)4年 成績開示	17	土		17	火	卒業演習説明(新4年) 13:00～ 飯	17	火	
18	土	解剖監祭	18	火	火⑧	18	木	木⑬	18	日		18	水	学科学会議 16:30～	18	水	学科学会議 15～
19	日		19	水	水⑨ 学科学会議 16:30～ 多職種連携論2－医療と専門職GW	19	金	金⑬ 4年 講義科目 4年 通試科目採点締切 15:00	19	月	月⑭⑮(仮)	19	木		19	木	成績開示
20	月	月③	20	木	木⑨	20	土		20	火		20	金	春分の日	20	金	
21	火	火④	21	金	金⑨	21	日		21	水	水⑮ 学科学会議 16:30～	21	土		21	土	
22	水	水⑤ 臨時 研究科教授会 15～	22	土		22	月	月⑩ 4年 講義科目 4年 通試科目採点締切 15:00	22	木		22	日		22	日	
23	木	木⑤	23	日	勤労感謝の日	23	火	火⑬ 4年 講義科目 4年 通試科目採点締切 15:00	23	金	次年度研修ガイダンス (新2年)14:40～ 飯	23	月	天皇誕生日	23	月	
24	金	金⑤	24	月	振替休日	24	水	水⑭ 臨時 研究科教授会 15～	24	土		24	火		24	火	
25	土	学園祭	25	火	火⑨	25	木		25	日		25	水	臨時 研究科教授会 15～	25	水	臨時 学部・研究科教授会 15～
26	日		26	水	水⑩ 臨時研究科教授会 15～	26	金		26	月		26	木	次年度研修ガイダンス (新3年)13:00～ 飯	26	木	
27	月	月④	27	木	木⑩	27	土		27	火		27	金		27	金	
28	火	火⑤	28	金	金⑩	28	日		28	水	水⑮ 臨時 学部・研究科教授会 15～	28	土		28	土	
29	水	水⑥多職種連携論2－医療と専門職GW	29	土		29	月		29	木		29	日		29	日	
30	木	木⑥	30	日		30	火		30	金	メモ:シラバス入力締切	30	月		30	月	
31	金	金⑥	31	水		31	木		31	土		31	火		31	火	

備考:総合看護学実習は各分野で6月～11月までに実施予定
備考:進級看護学実習Ⅰについては10月2日～12月4日の期間、毎週木曜日に行う

3. 運営と教育活動

1) 運営組織

(1) 運営組織（センター及び委員会組織図）



その他、審査会・ワーキンググループ等あり

2) センター

センター名	看護学実践研究センター	SDGs との 関連	4 質の高い教育を みんなに 	17 パートナリシップで 目標を達成しよう 
目 的	看護学実践研究センターは、本学部内、大学内をはじめ、外部機関及び地域社会における看護実践の課題に関する研究を推進するとともに、その成果を発信することを使命とする。			
構成員	飛田伊都子（センター長） 安田稔人（副センター長） 土手友太郎 二宮早苗 伊藤真理 松枝加奈子 赤崎美美 勝山あづさ 山元紀子（事務）			
活動計画	1. 学部間連携共同研究の強化・推進 2. 研究支援 1) 看護研究セミナー 2) 研究成果の発信・共有 3) 研究体制の整備 4) 研究助成に関する情報発信 3. 生涯学習支援 1) 人材育成教育セミナー 2) 看護キャリアサポートセンター事業に対する教育支援 4. 地域貢献 1) 高槻フェスタへの出展協力 2) 市民看護講座 3) カムカムサロン 4) 地域活動への参加 5. ホームページの充実			
活動概要	看護学実践研究センター会議は全 12 回、開催した。 1. 学部間連携共同研究の強化・推進 2025 年度の医学部・看護学部学術研究推進プロジェクト助成金や医薬看融合研究プロジェクト助成金等の募集および研究カフェ開催を教員へ周知した。併せて、教授・准教授を対象とした学部横断型交流企画「研究ラウンジ」を新規に企画し、第 1 回が開催された。 2. 研究支援 1) 看護研究セミナー（継続セミナー） 2025 年 9 月 25 日（木）、「はじめてのスコーピングレビュー：問いの立て方から結果のまとめ方までをステップで学ぶ」をテーマに、聖路加国際大学大学院看護学研究科国際看護学教授の大田えりか先生をお迎えし、第 4 回目の継続セミナーを開催した。講義はレビューの 7 種類という全体像から、具体的なスコーピングレビューの事例まで、非常にわかりやすい内容であった。PCC（Population, Concept, Context）という問いの立て方を学んだ後、実際のレビュー結果に触れることで、研究開始前の文献レビューの重要性を改めて実感する機会となった。参			

活動概要	加者は 43 名であった。アンケート結果より、大学院生からは「明日から活用したい」という声が寄せられ、また教員からは「自分の研究活動に役立つ」と感じる大変有意義な内容との評価が得られ、満足度が高いセミナーであった。 2) 研究成果の発信・共有 (1) 看護研究会の開催 2026 年 3 月 7 日 (土)、教員や高度実践コースの学生、臨床側の皆が、根拠のあるケアを臨床現場の状況に合わせて普及させるための方策と課題を知り、実践・研究双方の能力を向上させることを目的として第 9 回大阪医科薬科大学看護研究会を開催した。本学部教員、大学院生、学部生、近隣の看護職員や大学院入学希望者など計 62 名が参加した。基調講演では、東京大学大学院医学系研究科社会連携講座・ナースングデータサイエンス講座の友滝愛先生に「効果的なケアとは何か？エビデンスに基づくケアの採用と普及のために私たちができること」をテーマにご講演いただき、参加者アンケート結果からは、全員から「非常にわかりやすかった」「わかりやすかった」との回答が得られた。また、研究交流会では地域の医療施設から 3 演題、学内から 11 演題 (学部生 1, 大学院生 1, 教員 9)、合計 14 演題のポスター発表があり、研究活動や看護実践について活発な意見交換の場となった。 (2) 研究ポスターの掲示 看護学部教員や大学院生が学会発表したポスターを看護学部棟 1 階の大学院生室近くの廊下に掲示した。年に数回にわたり提供依頼のメールを教員宛に送信し、複数の教員からの提供があり、それらを 3~4 か月毎に張り替えした。11 月以降は掲示方法をポスター掲示よりデジタルサイネージに変更した。複数の教員からデータの提供があった。 また、看護学教育センターとの合同ワーキングを立ち上げて検討した結果、学部学生が卒業演習の分野を決める際の参考になるように 2026 年 2 月 9 日~2 月 27 日の期間に 4 年生の卒業演習の成果物 21 名分をデジタルサイネージで掲示することにした。学生アンケートの結果は、1 年生 1 名、2 年生 1 名、3 年生 78 名の回答があり、約半数が成果物を閲覧していた。閲覧した 42 件の回答では、97.6%が「看護研究・卒業演習のイメージができた」、78.6%が「看護研究に興味をもった」と回答しており、本取り組みは概ね目的を達成できたと考える。一方で、閲覧期間や閲覧方法については、約 4 割が「短すぎる」「閲覧しにくかった」と回答した。自由記述において、スライドの表示速度やデジタルでの公表方法に関する意見がみられた。成果物を公表することは、卒業演習における分野決定の参考となるとともに、研究に触れる機会の提供として効果があった。 3) 研究体制の整備 2025 年度の公的研究費による間接経費を活用し、本センターの備品としてデジタルサイネージ 3 台を設置した。現在、教員や学生の研究成果などを掲示するために活用している。 4) 研究助成に関する情報発信
------	---

活動概要	各種企業・団体等の研究助成に関する情報について、適宜メール発信した。 3. 生涯学習支援 1) 人材育成教育セミナー 地域の看護職者や大学院生を対象に、アメリカでのメンタルヘルス支援制度、臨床現場での工夫から日本の支援体制の見直しや新たな支援方策への示唆を得ることを目的として、ミネソタ州立大学マンケート校 Dr. Sabrina Ehmke, Dr Nicole Selle を講師にお招きし、「新人看護師・看護学生へのメンタルヘルス支援をアメリカの取り組みから学ぶ」と題したセミナーを 2026 年 3 月 12 日（木）に開催した。参加者は学内外で計 40 名（全面オンライン開催）であった。参加者アンケート結果から、講演に対する満足度について回答者全員が「大変よかった」「良かった」と回答していた。 2) 看護キャリアサポートセンター事業に対する教育支援 看護キャリアサポートセンターの企画・運営に、本センターから 2 名の教員（伊藤・赤崎）、1 名の事務職員（藤井/山元）をセンター員として協力派遣した。指導者のための教育セミナーやエキスパート HOME ナース人材育成など、教員の経験を活かした教育活動を中心に支援した。 4. 地域貢献 1) 高槻フェスタへの出展協力 2025 年 9 月 14 日（日）に高槻市生涯学習支援センターで開催された「第 21 回 たかつき NPO 協働フェスタ」に参加した。テーマは、昨年に引き続き「運動機能は大丈夫？ロコモ度を知ろう！」であった。「ロコモ度」のロコモ（ロコモティブシンドローム）は、背骨や関節の障害などにより「立つ」「歩く」といった移動機能が低下した状態を指し、ブースでは「立ち上がりテスト」と「2 ステップテスト」およびロコモ 25（ロコモ度のアンケート）について、飛田伊都子センター長を含み 5 名が担当し、47 名の市民の皆様を測定した。結果の説明は、ロコモアドバイザー（ロコモの正しい知識と予防意識の啓発のための活動を行う）の日本整形外科学会専門医安田稔人教授が担当し、ご参加いただいた方々の健康づくりをサポートした。 2) 市民看護講座 2025 年 10 月 25 日（土）に大阪医科薬科大学看護学部講堂で、看護学実践研究センターおよび大阪医科薬科大学病院看護部の共催、および高槻市の後援により第 12 回市民看護講座を開催した。「地域のつながりで健康寿命を延ばそう」をテーマに、講演 1 として『集いの場が作る「つながりと健康」』を高槻市役所健康福祉部長寿介護課の三浦茜先生が行い、講演 2 として『医師が語る健康長寿のためのロコモ対策』を本学看護学部教授で整形外科専門医でもある安田稔人先生がロコモ度測定のデモを交えて行った。講演後は質問紙を回収し、パネルディスカッションを両演者、看護学実践センター長および座長らで質疑応答した。参加者は、オンラインも含め計 92 名であった。 3) カムカムサロン
------	---

活動概要	今年度より高槻市と共同開催となり、毎月第2火曜日、11時～12時（1時間）、計12回開催した。場所は看護学部棟2階講義室であった。申し込みは、高槻市ホームページのサイトからか電話での申し込みとした。奇数月の内容は高槻市主催で介護予防マイスターがインストラクターとなり「高槻もてもて筋力アップ体操」（愛称：もてきん体操）の後、お茶と菓子を提供しながら健康クイズを行った。偶数月はもてきん体操を同様にを行い、本学部職員によるミニ講座を行った。ミニ講座の月日、テーマおよび担当分野は、4月8日「飲み込む力を鍛えよう」慢性期成人看護学、6月10日「脳もイキイキ！楽しく認知症予防」在宅看護学分野、8月19日「筋力維持のための栄養と運動」急性期成人看護学分野、10月14日「血圧と生活習慣：健康な毎日のために」がん看護学分野、12月9日「転倒予防のために大切なこと」臨床医学分野、2026年2月10日「ぐっすり眠るコツ！知っておきたい睡眠の基礎知識」母性看護学・助産学分野であった。年間参加総数は、199名であった。さらに大学と高槻市でカムカムサロンに参加する住民を対象に共同研究を開始した。研究課題は、「地域健康教室カムカムサロンにおける高槻もてもて筋力アップ体操の実施による運動機能及び Well-Being の経時的評価」である。調査期間は、2026年2月～10月で、偶数月に調査し、5回実施する。調査内容は、ロコモ度テスト、血圧、握力に加え、質問紙である。第1回は、2月10日に行われ、研究参加者は21人であった。 4) 地域活動への参加 学生主体の地域社会貢献活動として、高槻市（高槻市長寿介護課 三浦茜氏）とも協議を重ね、本大学の学生によって作成された「もてきん体操動画」がYouTubeにて公開された（2025年2月末時点で714回再生）。高槻市および本学の公式ウェブサイトにも掲載された。また、2025年11月22日に高槻市で開催された「もてきんフェスティバル」には「OMPU 筋」という愛称で、19名の学生が参加した。学生主体で企画およびもてきん体操の練習に取り組み、地域の健康増進活動に貢献した。参加した学生の満足度は非常に高く、次年度以降の継続的な活動に向けた高い意欲が示された。 5. ホームページの充実 本センターの活動を学内外へ発信すべく、年間を通してタイムリーな更新を行った。
評価	1. 効果が上がっている事項 1) 研究に関する継続セミナーでは、研究開始前のスコーピングレビューに関する実践的な知識の習得につながり、研究活動の質向上に寄与している。オンライン・対面等の形式で実施したことにより、学内外の教員、大学院生、臨床看護職者が参加しやすい環境が整い、高い満足度が得られている。 2) 米国大学教員を招聘した人材育成教育セミナーや、学部横断型交流企画（研究ラウンジ）の新規実施により、国際的・学際的視点からの研究交流の機会が創出され、研究活性化の基盤づくりが進んでいる。 3) 看護研究会を全面对面で開催したことにより、学外施設からの演題発表を含

評 価	む多様な参加が得られ、研究および看護実践に関する活発な意見交換の場となった。また、学部生の卒業演習成果の掲示など、学生が研究に触れる機会の拡充が図られている。 4) 高槻フェスタ 47 名、市民看護講座 92 名（オンライン含む）、カムカムサロン年間参加総数 199 名と、いずれも多数の市民の参加を得た。学生主体の地域活動（もてきんフェスティバル参加・動画公開）についても学生の満足度・意欲が高く、次年度への継続が期待される。 5) 研究成果のポスター掲示やデジタルサイネージの導入、ホームページの継続的な更新により、学内外への情報発信が強化され、研究成果の可視化と共有が促進されている。 2. 改善すべき事項 1) 研究会や各種セミナーへの卒業生・修了生の参加は依然として限定的であり、本センターの活動内容や参加意義をより明確に伝える工夫が必要である。あわせて、教員による研究発表や演題登録を一層促進していくことが課題である。 2) 学部間・学内横断型の研究交流の機会は増加しているものの、看護学部から主体的に発信する共同研究応募は十分とはいえない。看護学分野の特性を踏まえた研究支援や助成制度の活用促進が求められる。 3) 地域貢献活動については、参加者数や満足度は高いものの、住民ニーズの体系的な把握や活動成果の評価方法について、さらなる検討が必要である。 4) 卒業演習成果のデジタルサイネージ掲示では、閲覧期間・方法に改善の余地がある。
将来に向けた発展方策・課題	1. 学部間連携共同研究のさらなる強化・推進に取り組む。本年度新設した「研究ラウンジ」等の学部横断型交流企画を継続・発展させ、医学部・薬学部との共同研究応募の増加につなげる。 2. 研究活動を活性化していくために、研究者が抱える課題やニーズを把握し、研究環境整備とともに、長中期的視点にたった研究支援策の検討を進める。 3. 高槻市との連携により社会貢献活動（カムカムサロン）を強化推進する。さらに、地域住民のニーズを把握する調査等の企画を検討する。本年度開始したカムカムサロン参加住民を対象とした共同研究（運動機能・Well-Being の経時的評価、2026 年 2 月～10 月）を継続・遂行し、成果の発信につなげる。また、学生主体の地域活動（もてきん体操動画・フェスティバル参加）の継続的な展開を支援する。

センター名	看護学教育センター	SDGs との 関連		
目 的	看護学部教育課程の円滑な遂行のために教育計画、教育環境整備、多職種連携教育、授業評価、FD（Faculty Development）等に関する事項の企画・調整・実施・評価を行うことを活動の目的とする。			
構成員	真継和子（センター長） 山岡由実（副センター長） 寺口佐與子 近澤幸 南口陽子 森瞳子 中原洋子 山内彩香 倉田啓輔 皆本敦（6月～） 村上佐智子 北川祐美（9月まで）			
活動計画	1. 教育課程全般の運営 2. 教育センター担当科目の運営 3. FD 企画と実施 4. 多職種連携教育の調整と実施 5. 授業評価と改善 6. 実習ポートフォリオの実施 7. ティーチング・ポートフォリオの実施 8. 看護技術到達度の確認 9. 実習に関する事項 10. 教育環境整備の充実 11. 感染症に関する対応 12. その他			
活動概要	教育センター会議は全 13 回開催した。 1. 教育課程全般の運営 1) 学事日程及び時間割の調整 学事予定、時間割の調整、作成をした。 2) 履修のてびきの作成・確認 学校感染症（学校保健安全法）による出席停止の取り扱いとして、「学校感染症疑い、あるいは学校感染症ではないが発熱症状がある場合」の対応について学生生活支援センターとともに協議し、変更内容を反映させた。 3) シラバス作成要項の作成・確認、シラバス点検 シラバス作成要領に基づいて 2026 年度シラバス作成を教員に依頼し、作成されたシラバスについて、記載内容が適正という観点からセンター教員によるシラバス点検を実施した。軽微な修正点については次年度の作成要領に反映させる。 4) 各学年のオリエンテーションの日程調整と実施 各学年で 2026 年度に向けた履修ガイダンスを企画し、教育目標や 3 ポリシー、学事日程、各学年の履修科目や単位取得に関すること、学年別目標、変更点などを説明した。また、成績の異議申立てや懲戒規程について周知した。 5) 試験（本試験・追再試験等）日程調整・不正行為への対応等 交通途絶など交通事情による影響を避けるため、試験開始時刻を 2 時間目から設定した。また、不正行為を防止するため、各学年の履修ガイダンスの時に懲戒			

活動概要	規定及び不正行為に対する事項を周知するとともに、定期試験においては試験前に学生に不正行為に関する注意喚起を行った。試験時は各教室 2 名以上の試験監督を配置した。 6) 成績、進級、卒業判定に関すること 学生の成績、進級、卒業判定は各要件に基づき教授会で審議し適正に行った。また、GPA が 2.0（望ましい水準）未満の学生に対し、チューター教員等による学修指導を依頼・実施し、取り組みによって学生の改善がみられたか評価した。 欠席が多い学生については、チューター教員と情報共有し面談依頼を実施した。 7) GPA の平準化・分析等 2025 年度成績については、科目成績の平準化を図るため、カリキュラム委員会および IR 室と連携し対応を進めた。各学年の GPA および科目成績の特徴については教授会で共有し、授業改善に活用した。一部科目で昨年度より中央値が大きく低下していることが確認されたため、当該分野の詳細分析を依頼したが、特段の問題は認められなかった。 8) 英語教育の充実（TOEIC を用いたクラス分け） 1 年生は 4 月 2 日に TOEIC L&R オンライン受験を行い、その結果に従って英語 I・II のクラス分けを行った。2026 年度新 3 年生（現 2 年生）の TOEIC は任意受験とし、2 月から 3 月に自宅受験で実施した。 9) ベストティーチャー賞に関する事項 ベストティーチャーの規定に沿い、各学年 1 名の計 4 名の教員選抜を行った。ベストティーチャー賞の選出において、2024 年度に見直しを行った授業評価アンケート項目にて運用開始したが、滞りなく選出できた。 10) 令和 7（2025）年度私立大学等改革総合支援事業に係る調査への対応 タイプ I 関連事項を確認し、評価項目に沿って回答・提出したが、本年度はタイプ I に採択されなかった。 11) 非常勤・兼任教員対応 非常勤・兼任教員に対して次年度の授業担当を依頼および調整を行った。また、次年度担当の辞退希望があった非常勤教員ならびに退職予定の兼任教員については、後任教員の補充を行なった。 12) 教育年報の作成 2024 年度の成績解析結果および学勢調査の結果を基に、アセスメントポリシーに沿って 3 ポリシーの検証を行い、教育年報として取りまとめた。解析結果は教育センターと共有し、科目間の成績の成績平準化をめざして授業改善に活用した。また、教育年報については、教育機構会議および学部間協議会に起案して協議したのち、教授会や学科会議を通じて教員に周知・共有し、PDCA サイクルの推進につなげた。 2. 教育センター担当科目の運営と実施 1) 卒業演習に関すること (1)卒業演習の発表会の運営・実施
------	---

活動概要	2025 年度は 1～3 分野で報告会を運営し、他分野の研究に触れる機会にもなった。学内の発表者および聴講者は対面、学外聴講者は対面とオンラインでの開催とした。学生全員の研究発表が滞りなく実施できた。 (2)卒業演習評価基準の作成 各分野に一任されていた評価基準を作成し、全分野で統一した基準とした。 (3)卒業演習要項の作成と分野決定 2026 年度卒業演習要項を 2025 年度の課題をもとに修正を行った。また、学生・教員への卒業演習要項の配布はデータでの提示とした。分野配置人数は例年通りの算出を行い教授会で調整後決定した。ウェブアンケートツールと抽選を用いて滞りなく分野決定を行うことができた。学生の希望する研究内容等の集約を学習管理システムへの入力で行い教員へ配信した。 (4)卒業演習成果物の公表 看護学実践研究センターと共同で、1～3 年生への卒業演習成果物の公表を行った。卒業演習発表会で発表されたものの中から 1 分野につき 1～2 名の成果物を公表した。公表期間は 2026 年 2 月 9 日～2 月 27 日とした。学生へのアンケートの結果、回答が得られた 80 件のうち、約半数が成果物を閲覧していた。閲覧した 42 件の回答では、97.6%が「看護研究・卒業演習のイメージができた」、78.6%が「看護研究に興味をもった」と回答した。 2) 兼任教員科目の見学実習への対応 解剖実習見学について、事前オリエンテーションの実施、当日は体調不良者に対応できるように兼任教員、看護学部事務担当者とともに連携し予定通り実施できた。 3) 保健師科目・助産師科目への対応 保健師国家試験受験資格希望者の選抜に関しては、学事予定表を踏まえたスケジュールを立て、スケジュールに沿って実施し、40 名を選抜した。また、助産師国家試験受験資格希望者の選抜に関しては、学事予定表を踏まえたスケジュールを立て実施し、6 名を選抜した。 4) 2025 年度 JANPU-CBT 実証事業 JANPU-CBT の実施 2026年2月26日に2年生を対象に実施し、欠席者4名を除く77名の参加があり、正答率の学年平均は72.7%であった。 3. FD 企画と実施 1) 大阪医科薬科大学教員、大学院生を対象とした FD 企画と実施 2025 年度は、看護学部での OSCE の開始に向けて、具体的な実践方法について学ぶ機会とするため、「挑戦！学生と教員がともに成長する OSCE の実践」をテーマとした FD を企画した。2025 年 12 月 9 日(火)に大阪医科薬科大学看護学部教職員、看護部（教育・実習担当者）、大学院生対象に開催した。参加者は看護学部 36 名、看護部 5 名、大学院生 1 名の計 42 名であった。実施後のアンケートでは、全員が「今後の教育に役立つ機会となった」と回答し、OSCE 導入に向けた準備、実際に具体的に学ぶことで実践に活かすことができるとの肯定的な意見が
------	--

活動概要	挙げられた。 2) 新任教員対象の FD 企画と実施 2019 年度より開始した新任教員 FD は、2024 年度より助手も対象とし、実施要領にそって開催した。入職 1 年目の 3 名には 5 月 16 日と 3 月 18 日の計 2 回行い、入職 2 年目の助教 1 名、助手 4 名に対しては、8 月 20 日に最終 FD を行った。 2 年目は、非常勤教員から常勤助手となった教員が多く、数年の教育経験をふまえた学生像の捉え方の変化を共有した。また、科目担当に加えてチューター役割を担うことで大学教員の意識化ができていた。年度末 FD は、ティーチング・ポートフォリオや「臨地実習における学習支援力」チェックリストにそって各自の振り返り、課題とその対処についてはタイムマネジメントなどを提案した。また、FD や学内の授業見学等で他の学年や科目に視野を広げ、教育方法のアップデートなど自己研鑽の行動がとれていた。 4. 多職種連携教育の運営と充実 1) 多職種連携教育科目への対応 医学部・薬学部の担当教員、看護学部事務担当者と綿密に情報を共有しながら、「医療人マインド」「医療倫理」「医療安全」のグループワーク (GW) のファシリテーター・レポート評価、「医療と専門職」の運営企画・コーディネート・全面対面 GW のファシリテーター・レポート評価を担当した。「医療と専門職」では、レポートの配点および評価基準であるルーブリックの改訂がなされた。学生アンケート調査により、講義や 3 学部間の GW を通し、多職種連携の重要性やその中での看護師の役割を理解した学生がほとんどであった。一方、他学部学生間でのディスカッションの促進や学びを深めるレポート課題の検討、各科目における事例の難易度や時間配分については更なる検討が必要である。 「多職種連携—臨床カンファレンス」は、2025 年度も、母性・精神・急性・慢性の 4 分野で実施した。各分野でまとめと評価を行った結果、学生からの回答では、「視点の違いに気付いた」「専門的な知識の違いが分かった」等のカンファレンス内容に関する 6 項目全てにおいて、「そう思う」「とてもそう思う」が 8 割以上を占めていた。また、自由記載においても「多職種の視点や専門性の違いを理解できた」「多職種連携の重要性を学ぶことができた」等の肯定的な意見が多く、本カンファレンスは多職種協働への理解を深める機会となっていた。一方で、資料共有や時間配分、カンファレンスの目的や進行方法の共有など、運営面に関する課題も挙げられた。 「地域医療実習」は、看護学部・医学部・薬学部から各 3 名の学生が参加し、高知県本山町（高齢化率 47%）の地で人々の QOL 維持・向上を目指したチームアプローチを学んだ。学生は、利便性よりも「そこでの暮らし」そのものを大切にしている住民に出会い、対話し、学生同士の検討を重ねた。結果、医学的な正しさだけを追求するではなく、その人が慣れ親しんだ生活を続けられることを目指すという目標に辿り着いていた。
------	--

活動概要	2) 多職種連携カリキュラム委員会への参加 2 回開催された委員会に参加した。学生らの授業参加状況やアンケートを踏まえ、委員会では授業形式、評価方法、GW 方法などについて検討した。大きな変更点はなかったが、「医療と専門職」については時間配分等の運営方法について見直しされた。「医療と倫理」と「医療安全」については引き続き事例の難易度を考慮し、検討することとなった。 5. 授業評価・改善 1) 学生の授業評価 各科目の終了時に、学生に学習管理システムを用いた授業評価の実施を依頼した。事前に定めた各科目の評価時期に合わせて、看護学事務課から全教員に授業評価依頼のメール配信を行った。評価時期は年度開始時に確認し、各科目の開講期間や試験実施期間に合わせて広く設けた。学生の平均回答率は、前期 / 後期の授業評価が 51.5% / 50.6% (昨年 66.4% / 56.0%, 看護研究方法のみ 72.5%), 実習評価は 40.2~79.2% (昨年 48.2~87.1%) であった。 2) 教員の授業改善 年度開始時に、学生の授業評価時期に合わせて授業（実習）改善報告書の記入・公開時期を確認し、「2025 年度（授業（実習）改善報告書）実施要領を作成した。実施評価の公開期間に合わせて全教員に授業（実習）改善報告書の作成依頼を行い、その後学生に公開した。今年度は授業・実習評価を長期間確認できるよう、前期授業科目については回答期間終了後 1 ヶ月、後期授業科目および実習科目については 3 月末までとした。すべての科目について、学生の授業評価内容をふまえた授業改善報告書の提出がなされ、学生に公開した。 3) 授業見学の推進 今年度の授業見学として計 6 件の報告が上がった。報告者は准教授、講師、助教、助手であった。授業を見学し、実務経験に基づく事例を取り入れた授業や ICT を活用した学習の工夫があり、自身の担当科目に参考となったことや、科目間の関連性が明確になったとの報告がなされた。 6. 実習ポートフォリオの実施 学科会議にて実習担当教員の協力を仰ぎ、教育センターからのリマインドに加えて、実習教員からも実習前後に inputs を促すよう依頼した。学生と教員を対象に全ての実習終了後にアンケートを行った結果、概ね肯定的な評価であったが、入力率が経年的に低下しており、単なる入力作業にとどまらず、実習の学びを深めるためのツールとして実質的に活用できる仕組みを引き続き検討していく。また看護基本技術経験チェックリストについて項目ごとの集計し評価した。その結果学年が進行するにつれて「教員や指導者の指導のもと実施」および「ひとりで実施」の割合が増加しており、実習を通して看護技術の実践経験が段階的に積み重ねられていることが示唆された。 7. ティーチング・ポートフォリオの実施 「教育の責任」、「教育の理念」、「教育の方法」、「教育の成果」、「自己省察・今後
------	--

活動概要	の目標」の5項目とし、「教育の責任」、「教育の理念」は8月末まで、その他3項目は2月末に学習管理システム上で入力した。本年度における、「教育の責任」、「教育の理念」までの入力率は83.0%、「自己省察・今後の目標」といった振り返りまでの項目全体の入力率は81.0%であった。今後の教育活動へ活かすために、各教員が入力した「教育の方法」を匿名化したうえで、とりまとめを行った。 8. 実習に関する事項 実習委員会と連携し、実習記録のクラウド化の検討を進めると共に、実習要綱の見直しを行った。またその他各学生の実習状況、履修状況など情報の共有や連携を図った。 9. 教育環境整備の充実 1) 教育環境（講義室・実習室等）の充実・整備 入学生が定員を超過したため、講義室3の学習環境を整備した。講義室3・4・5のスクリーンについては、老朽化に伴う設備更新を行い、新規スクリーンに交換した。また、旧情報処理室を教室として再整備し、「講義室6」として位置付けた。あわせて印刷機器等の備品を整備し、学生の利活用を促進した。 2) ICT教育の整備（ウェブ会議システムや遠隔授業システムの検討） 大学全体においてICTの充実と活用の促進を図る等教育研究活動の方針が示される中、今年度は実習記録のクラウド化に向けて情報システム課と意見交換した。具体的には、看護学部の演習・実習支援におけるMicrosoft 365®の運用状況と機能開放方針、院内ネットワーク環境、個人情報保護規程の整備、スケジュール・コスト・対象学年の優先度について現状確認と今後の進め方を整理した。 3) セルフトレーニングの企画・実施 学生の看護技術の向上を目的として、統合実習前の6月、分野別実習前の8月、基礎実習前の1月の計3回、セルフトレーニング企画を開催した。6月には4年生15名が参加し、吸引や輸液管理、フィジカルアセスメントなどのトレーニングを行った。8月には3年生80名が参加し、日常生活援助技術やフィジカルアセスメントの復習を行った。1月には2年生81名が参加し、模擬患者として協力いただいたNPO法人ナルク高槻の高齢者8名に対し、バイタルサイン測定や問診などのトレーニングを行った。参加した学生へのアンケート結果では、全学年の全員が「実習に役立つ機会となった」と回答し、定期的な開催を望む声が多かった。2024年度より全分野の教員がセルトレ企画に参画し、より充実した技術指導ができた。また、3年生のアンケート結果では「もっと時間が欲しかった」「何をすれば良いか迷った」など時間配分や運営面に関しての意見もあったため、次年度は各分野で必要な看護技術リストを提示し、学生が優先順位を立てて取り組めるように運営方法を検討する。セルフトレーニング企画の様子は企画・広報課にて写真撮影および看護学部教育センターHP(https://www.ompu.ac.jp/education/f_nursing/center/education_center/of2vmg000000d53w.html)に掲載、随時更新した。 4) シミュレーション教育の促進 今年度も、全学年のセルフトレーニングにシミュレータを導入し、多くの学生
------	--

活動概要	や全分野の教員が触れる機会となった。今後は、台数と学生数のミスマッチという物理的制約や未活用の課題解決および更なる利活用を促進するため活用事例の共有など活用方法の周知を進めていく。 5) 実習記録のクラウド化の検討 今年度は、実習記録のクラウド化導入に向けて既存の Microsoft 365®のアプリケーション (Teams®) を活用するための検討 WG を立ち上げ、関連部署と以下の検討を行った。 (1) 電子化に向けての準備 記録の電子化および学生との双方向ツール活用のため、各分野で学生版のメールアドレス (s.ompu.ac.jp) を取得し、情報システム課と以下の点について検討した。①看護学部の実習・実習支援における Microsoft 365®の運用状況と機能開放方針、②院内ネットワーク環境、③個人情報保護規程の整備、④スケジュール・コスト、⑤対象学年の優先度についての現状確認と今後の進め方 (2) 電子化に伴う課題の検討 記録の電子化に向けては、現行の規定と齟齬がある内容を洗い出し、演習と実習で扱う匿名化情報を整理する必要があること、電子化に向けて学生への教育が最重要であること、学年ごとの実習形態に応じたメリット・デメリットを整理する必要があることなど、次年度以降に具体的に検討する必要がある。 10. 感染症に対する授業対応 学生や実習病院等における新型コロナウイルス感染症やインフルエンザの感染状況を確認し、学生生活支援センターと連携しながら、適宜、感染予防対策の強化を図るとともに、学生と教員に周知した。 学校感染症が疑われる場合の出席停止の対応について（欠席届について）、学校感染症疑いで保健管理室より出席停止となり病欠した学生の場合、教員の負担を軽減するため、事務課にて欠席届と診断書の管理を行うこととした。学生より欠席届と診断書を提出させ、保健管理室のリストを確認し、教育センター長、看護学部長の承認をもって科目責任者へ連絡するといった運用とした。8月上旬に学生にポータルシステムにて配信、教員にメール配信し周知を図り、混乱なく運営できている。 11. その他 1) 2022 年改訂カリキュラムの評価 カリキュラム委員会と連携し、2022年度改訂カリキュラムの評価を行った。 2) 看護学教育モデル・コア・カリキュラム（令和 6 年度改訂版）への対応 カリキュラム委員会、カリキュラムワーキンググループとの調整を図り、看護学教育モデル・コア・カリキュラム（令和6年度改定版）への対応および2027年度新カリキュラム変更申請に向けた進捗状況の確認を行った。 3) 合理的配慮を必要とする学生への対応 科目責任者にオンライン授業の可否の確認、オンライン授業設定、別室受験及び試験監督など合理的配慮を要する学生への対応を行った。また、2025年度受講
------	--

活動概要	に向けてオンライン授業の可否確認，時間割調整を行った。 4) 転学部制度の運用開始の周知 2025年5月12日に，転学部制度運用開始に関する学長メッセージを，5月12日にポータルシステムにて配信し，5月14日に教育センター長より学生を対象とした説明会を実施し周知を図った。当面は薬学部から医学部への転学部運用を想定しているが，看護学部から医学部への転学を希望する学生もみられた。 5) 公共交通機関の遅延の取り扱いに関する対応 阪急，JR等の主要交通機関以外を利用する学生に対しても，交通遅延が生じた際に不利益がないよう，科目責任者の判断で配慮（例：小テスト代替措置、実施回数から減じる、実施時間の変更等）を講じることを全教員に周知した。
評 価	1. 効果が上がっている事項 1) 教育課程全般に関すること ・科目成績の平準化への取り組みにより，教員間で評価基準の共有が進んでいる。また，科目間の成績のばらつきが縮減し，授業内容の見直しとともに授業改善への反映も迅速になされるなどの効果がみられている。 ・GPA の結果を活用して 2.0（望ましい水準）未満の学生を早期に抽出・報告することで，チューター教員による学修指導が速やかに着手できる体制は整った。 ・1～3 年生への卒業演習成果物の公表は，学生へのアンケートの結果，卒業演習における分野決定の参考とするとともに学生が研究に触れる機会を提供するという目的を達成できている。 2) 授業評価に関すること ・授業改善報告書は全科目から提出され，学生の評価やコメントに基づく改善が適切に行われていた。今後は，これらの報告内容を経年的に確認していくことで，改善の定着や質向上がなされているかを把握し，教育改善につなげていく。 3) FD について ・ティーチング・ポートフォリオの入力率は高く，教員間で多様な教育方法が共有され，多様な授業形態とその効果を知ることにより教員間の相互研鑽につながっている。 ・授業見学の実施数は多くはないが，若手教員にとって貴重な FD の機会となっている。見学を通じて自身の担当科目に活かせる点が得られたほか，科目間の関連性がより明確になっている。 4) 教育環境整備に関すること ・セルフトレーニング企画については，全分野の教員と連携し，昨年度の課題であった看護技術のバリエーションを再検討したこと，また，シミュレータの活用を促進したことにより，多くの学生が参加し，高い満足度につながっている。 2. 改善すべき事項 1) 教育課程全般に関すること ・例年，高学年ほど GPA2.0 未満は減少傾向にあり，チューター教員による学修指導の一定の成果が示される一方で，一定数は依然低迷しており，日々の学習

評 価	状況を見守りつつ継続的に関わる必要がある。また、学生生活支援センターと連携し、生活面でのフォローを強化する。 2) 授業評価に関すること ・授業評価の入力率が課題であり、特に実習評価の入力率が低い。講義内での入力依頼、入力時間の確保、授業評価の活用と改善例を示すなど工夫する。 3) 実習ポートフォリオに関すること ・入力率は低迷が続いており、学生および教員による活用実績が担保されていない。また、e ポートフォリオについては、記録が即座に臨地で確認できないなどの限界がある。今後は、実習の学びを深めるためのツールとして実質的に活用できる仕組みを引き続き検討していく必要がある。 4) 多職種連携教育の運営に関すること ・他学部学生間でのディスカッションを促進するため、学びを深めるレポート課題を検討するとともに、各科目における事例の難易度やディスカッションの時間配分についても再検討が必要である。 5) 教育環境整備に関すること ・看護学教育モデル・コア・カリキュラム（令和6年度改訂版）においては、DXを活用した教育方法および学習環境の整備が不可欠である。実習記録のデジタル化を含む教材のデジタル化、データ活用、シミュレーション教育、生成AIの導入、および導入にあたり教員の研修強化や環境整備を図り、教育効果の検証を行うことが必要である。
将来に向けた発展方策・課題	1. GPA2.0 未満の学生への学修指導の強化及び GPA の分析と活用促進 2. 授業評価および実習ポートフォリオの入力率の向上と活用促進 3. 多職種連携科目における教育内容の充実 4. 2027年度入学生への看護学教育モデル・コア・カリキュラム（令和6年度改訂版）に対応した新カリキュラムの2027年度入学生への適用に向けた準備 5. DX 活用に向けての教育環境整備と FD 研修の充実

センター名	看護学学生生活支援センター	SDGs との 関連	 
目的	本センターは、看護学部における円滑な学生生活の提供をめざし、学生生活の中で学生が抱える諸問題（修学、大学生活への悩み、経済的事由に起因する悩み等）に組織的に対応し、学生の主体的な大学教育への適応を図り修学効果を高められるよう厚生補導の一役を担う。		
構成員	池西悦子（センター長） 津田泰宏（副センター長） 川北敬美 間中麻衣子 杣木佐知子 笹野奈菜 日高朋美 野瀬珠美 堀江雅彦 南陽子		
活動計画	1. 学生自治 1) 総代・副総代との連絡会 2) 学生からの要望に対する対応（懇談会・意見箱） 3) 学友会・学生交流会・謝恩会 2. チューター制度：チューター活動がしやすく、学生が相談しやすい環境作り 3. 学生調査：医学部・看護学部合同の調査内容の見直し、実施 4. 奨学金：各種奨学金支援 5. ホームページの内容の充実 6. 学習環境の整備 7. 正課外活動ポートフォリオの作成 8. 学生生活支援機構（医・薬学部との連絡会議） 9. 健康管理：感染予防対策、保健管理室との連携 10. 障がい学生関連 11. 懲戒規程関連 12. 大阪医科薬科大学学生支援の方針に基づく点検評価 13. 災害対策マニュアル作成・体制整備 14. 自殺防止対策 15. FD講演会 16. 新入生合同研修の取り組み 17. その他（学外研修会、学籍異動、学生生活の手引き修正）		
活動概要	1. 学生自治 1) 総代・副総代との連絡会 各学年の総代・副総代の決定支援を行い、総代連絡会を実施した。学生生活に関する意見や要望を総代・副総代を通じて集約し、学生生活支援センターと学生との情報共有および課題把握を行った。また、学生からの要望により開催されることとなった学生交流会について、企画支援を行った。 2) 学生からの要望に対する対応（懇談会・意見箱） 学生からの要望を把握するため、意見箱の運用および学生懇談会を実施した。意見箱は月 1 回の開箱とし、学生からの意見を確認した。学生懇談会では各学年の総代・副総代を通じて意見を集約し、学生生活に関する課題や改善要望につい		

活動概要

て意見交換を行った。

3) 学友会・学生交流会・謝恩会

1年生の総代・副総代および学友会役員の選考において、2年生から役割説明を行うことで学生主体での役員選考を支援した。4～5月には学生からの要望を受けて初めて学生交流会を実施し、1・2年生は運動会、3年生は実習に向けた交流会、4年生は食事会および謝恩会の検討を行った。さらに、学友会学生の希望により七夕の飾りつけが実施され、学年間の引継ぎも行われた。謝恩会の運営および寄贈品の準備についてはゼミごとに担当係を決め、スケジュールを提示することで学生間の協力体制の形成を支援した。

2. チューターが活動しやすい、学生が相談しやすい環境作り

1) 教員を対象としたチューターアンケート結果を踏まえ、2024年度のグループ編成を基盤として、1～3年生のチューターグループ編成を行った。グループ数、グループ当たりの教員数および担当学生数については、2024年度と同様とし、変更は行っていない。4年生については、卒業演習を担当する分野教員がチューターを務め、学生生活支援センターが関連フォルダの管理を行った。

2) 1～3年生のチューター教員の組み合わせは下記の通りとした。

表 1. 2025 年度チューターグループ（1～3 年生担当）

No	担当教員	No	担当教員
1	寺口，近澤，濱浦	7	小林，中原，赤崎
2	飛田，大橋，倉橋	8	草野，山内，笹野
3	津田，松枝，寺田，野口	9	樋上，森，間中
4	土手，二宮，南口，有吉	10	真継，有田，土井，安富
5	安田，川北，柚木	11	池西，山埜，勝山，酒向
6	鈴木 ^美 ，谷水，日高，城山	12	山岡，伊藤，野瀬

3) チューター面談シート

4月に教員に対して、チューター制度に関する指針を周知し、チューター面談シートの活用を呼びかけた。

4) チューター活動の評価

今年度も教員および学生を対象とした調査を実施した。調査結果において、グループ編成は、教員・学生ともに現状のままで良いとする意見が8割を超えた。特に、学生を継続支援できる点や信頼関係が構築できている点などが、現行の体制で高く評価されていた。学生の面談の満足度は、「満足できた」「まあ満足できた」が77%を占め、概ね肯定的に評価されていた。

3. 学生調査

スマートフォンおよびPCでの操作方法を明示するよう説明文を修正し、全数調査であることを強調したうえで、11月から12月にかけて対面で実施した。あわせて昨年度と同様に、文部科学省の学生調査についても、2年生および4年生を対象に同一時間内で実施した。その結果、3年生の回答率は60.7%と低値であったため、

活動概要	対面で再度アナウンスを行ったところ、回答率は87.6%まで上昇した。全体の回答率は92.3%で昨年度と同様であった。学生調査の結果は、各学年の新学年ガイダンスで、課題と対策を説明した。 4. 奨学金:募集説明会、選考、手続きを行った。内容は以下の通りであった。 1) 2025年度各種奨学金 国の高等教育修学支援制度における多子世帯への支援 2) 日本学生支援機構 学生等緊急給付金 3) 文部科学省 学びの継続のための緊急給付金 4) 看護学部給付奨学金 5. ホームページの内容の充実 学生生活の看護学学生生活支援センターのホームページにおいて、学友会行事等の開催について、随時写真や記事を更新した。 6. 学習環境の整備 演習室 7～9 を自習室としてユニパで予約し自由に使用できる体制に戻した。また、講義等で使用していない場合は講義室も自習室として使えるようにした。 7. 正課外活動ポートフォリオの作成 正課外活動を通した振り返りを促すために、正課外活動での学びと自身にとっての意味、自身の進路や考え方への影響を記載できるようフォーマットを修正した。正課外ポートフォリオの記載は、例年と同様に 7 月にポータルシステムでの連絡と 12～1 月に対面で説明・入力の日数を設けた。その結果、各学年の回収率は 21.7～80.7%（平均 54.4%）であり、昨年度に比べて低く、4 年生が最も低かった。 8. 学生生活支援機構（医・薬学部との連絡会議） 学生生活支援機構会議に毎月センター長が参加し、3 学部での情報共有と連携を行った。課外活動における課題の明確化と解決にむけた調査等を実施した。今年度より、合理的配慮に関する現状と課題を 3 学部で共有した。 9. 健康管理：感染予防対策、保健管理室との連携 学校感染症が疑われ出席停止となった学生の配慮について、保健管理室、教育センターと共に検討を行った。 保健管理室および実習委員会と連携して年間スケジュールを共有し、4 種感染症・B 型肝炎ウイルス・インフルエンザワクチンの期限内接種を促した。未接種者の共有が 1 月となり接種推奨は行えなかったが、感染症流行時にはポータルシステムを通じて注意喚起を実施した。実習期間中は健康観察票の記録とマスク着用を必須とした。 10. 障がい学生関連 センター長が障がい学生支援委員長を務め、支援計画の検討、評価に参画した。 11. 懲戒規定関連 各学年ガイダンスにおいて注意喚起を行った。今年度の懲戒事例はなかった。 12. 大阪医科薬科大学学生支援の方針に基づく点検評価 学生生活支援センター各種行事等のPDCAシートを作成し、点検評価を行った。
------	--

活動概要	大学として学生の厚生補導の強化が求められており，センター会議において対策を検討した．また，1年次基礎科目「キャリアマネジメント」では，生涯学習を通じた社会人基礎力の育成やポートフォリオに関する内容を学習に組み入れた． 13. 災害対策 昨年度の暫定版を基に内容を精査・再編し，大規模地震発生時および火災発生時の初動対応を整理・分類した災害対策マニュアルを作成した．発生時に実働しやすいように対応フローを図示化し，関係機関等の連絡先一覧を資料として掲載した．また，被害軽減対応の一環として防災訓練・防災教育を位置づけ，11月に1年生を対象に避難訓練を実施した．災害対策の整備の一環として拡声器およびポータブル電源を購入した． 14. 自殺防止対策 2024年度に作成した「学生の希死念慮が見られた場合の事後対応フローチャート」については，使用時や他学部での作成状況を踏まえ，必要に応じて改訂する予定としていた．しかしながら，今年度はフローチャートに関する意見や要望は認められなかった． 15. FD 企画と実施 2023年度から学生生活支援センター主催のFDを開催し，3回目の開催となった．「学生が遭遇しやすいトラブル・犯罪の現状と対策，教職員の普段からの心構え」をテーマとして，高槻警察署生活安全課防犯保安係の寒川光希先生を講師として招聘した．2026年3月9日，対面とウェブ会議ツールのハイブリッドにて3学部の教職員を対象に開催し，参加者43名（看護学部31名，医学部3名，事務課9名）の参加があった． 16. 新入生合同研修 対面で3学部新入生合同研修を実施し評価した．次年度も対面実施を決定し，会場や内容，チューターについて検討を行った． 17. その他 1) 学外研修会：今年度，セミナーへの参加者はいなかった． 2) 学籍移動について：学籍移動学生の対応を行った． 3) 学生生活の手引きを修正した．
評価	1. 効果が上がっている事項 1) 学生自治 (1)総代・副総代との連絡会 総代連絡会を通じて学生の意見を把握することができ，学生生活に関する課題の共有および改善につながった． (2)学生からの要望に対する対応（懇談会・意見箱） 学生懇談会では複数の要望が提出され，学生の意見を踏まえた環境改善の検討につながった．学生の声を直接把握できる機会として有効であった． (3)学友会・学生交流会・謝恩会 学友会役員の選考を学生主体で行うことで，学生が主体的に行事に参加する体

評 価	制が形成された。学生交流会は各学年で交流を深める機会となり、学生間のつながりの形成に寄与した。また、謝恩会の準備においてはゼミごとに役割を分担することで、学年全体で協力する体制づくりにつながった。 2) チューターが活動しやすい、学生が相談しやすい環境作り チューター活動に関する調査結果から、教員はいずれの学年とも1年間を通じて関わりを持っていた。学年が上がるにつれ面談回数が増え、就職・進路や国家試験対策などの指導が実施されていた。チューター制度により、細やかな支援活動が行われていた。 3) 学生調査 全体の回答率は92.3%で昨年度と同様であった。新学年オリエンテーションでは、調査結果を踏まえたアドバイス等を学生に提示できた。 4) 奨学金 令和7年度から修学支援新制度の拡充による多子世帯も含め、希望学生はほぼ全員受給できた。対象学生の面談を行い全員適格であった。 経済情勢から、経済的事由を第一とする奨学金の設定や給付奨学金の規程変更の検討等、柔軟に対応できた。更に利用可能な奨学金について情報を収集し、適宜学生に案内を行う。 5) ホームページの内容の充実 学生生活支援センターが企画を報告するページを作成し、4月：新入生合同研修、6月下旬：看護学部七夕祭り、7月：学生と教員の懇談会・懇親会、11月：学園祭、3月：卒業生の寄贈品をタイムリーに掲載することができた。 6) 学習環境の整備 講義室も授業以外は自習室として使用できるようにし、学生が自由に使用できる場の拡大につながった。使用方法に問題がある場合には適宜指導を行う。 7) 正課外活動ポートフォリオの作成 これまでの正課外活動の内容の評価に加え、振り返りを促したことにより、経験の意味づけにつながった。正課外活動ポートフォリオについて授業で学習した1年生、記載の時間を十分に確保できた2年生の回答率が高かったことから、活用意義を理解し、振り返るための機会を十分に確保できた場合に、記載しやすいと考えられた。 8) 学生生活支援機構会議 定例会議によって、課外活動や合理的配慮など課題となっている事項を含め、3学部の学生生活支援に関する情報共有と検討を行い、連携することが出来た。 9) 健康管理（感染予防対策、保健管理室との連携） 保健管理室と連携をとり学生の健康管理が行えた。インフルエンザ等の学内における感染拡大はみられなかった。ワクチン接種状況の共有を接種期間中に行い、接種、もしくは接種できない旨の報告を促していく。 10) 障がい学生関連 合理的配慮を受けた学生からの意見から、法律および合理的配慮の方針に基づ
------------	---

評 価	いた学生支援は適切に実施できた。 11) 懲戒関連 懲戒事例が確認されなかったことから、ガイダンスにおける注意喚起を継続して実施する。 12) 大阪医科薬科大学学生支援の方針に基づく点検評価 今年度は、災害対策に関するマニュアルの見直しや防火訓練の検討などについて実施・評価を行った。次年度は、厚生補導に関する取り組みについて計画を進める。 13) 災害対策 発災時の初動対応や対策本部の設置・運営体制や活動内容を明確にした災害対策マニュアルを整備し、緊急時の組織的な対応体制の構築が可能となった。また、災害被害軽減対応の一環として防災訓練・防災教育を体系的に位置づけ、教職員が連携して取り組む体制を組織化できた。 14) 自殺防止対策 次年度以降も必要に応じて「希死念慮を抱く学生に対するチャートや事後対応のチャート」の見直し・改訂を継続する。 15) FD 研修会 FD 参加者からのアンケート結果では、全員が「今後の教育や学生生活支援に役立つ機会になった」と回答しており、今回のテーマや内容は参加者のニーズに沿ったものであったと評価できる。 16) 新入生合同研修 対面にて開催し、学生の 98%が対面開催でよかったとし、教職員全員が、各プログラムは学生にとり有意義であったと回答しており、目的が達成できていた。 2. 改善すべき事項 1) 学生自治 (1)総代・副総代との連絡会 総代・副総代の決定および連絡会の開催を早期に実施し、学生の意見集約や役割分担、引継ぎ状況の確認を円滑に行う必要がある。 (2)学生からの要望に対する対応（懇談会・意見箱） 懇談会の実施方法を工夫し、学生が意見を出しやすい雰囲気づくりを行うとともに、これまでの改善結果を伝えることで、より多くの意見提出を促していく。 (3)学友会・学生交流会・謝恩会 学生交流会においては、怪我や熱中症などの安全対策を徹底するとともに、行事運営について学生主体で進められる体制をさらに整える必要がある。また、謝恩会の開催・準備は学生主体で進められるよう、各係で質問があった場合にもそれぞれの教員が対応せず、総代副総代を経由した情報のやり取りを徹底する。担当教員は総代副総代とのコミュニケーションを適宜行い、進捗状況の把握および適宜促しを行う。 2) チューターが活動しやすい、学生が相談しやすい環境作り
------------	---

評 価	今年度のチューターグループ編成を、学生・教員共に8割以上が肯定的に評価し、「もっと少人数で動きやすさを確保したい」という意見と、「このまま複数名で継続的に学生を支援したい」という意見が併存していた。次年度は今年度の編成を基盤として1G増やした13G編成とし、教員の異動に伴う変更を加え負担が偏らないよう検討する。 3) 学生調査 3年生は、分野別実習前後の実践と理論の統合のタイミングを調査実施の場を選択した。この時期の負担感が回答率に影響した可能性がある。今後は、卒業演習説明会など、学生が比較的回答しやすい機会を活用するなど、調査実施の場や時期を検討する必要がある。 4) 奨学金 募集周知と希望学生が受給できるよう奨学金一覧表を作成し、学内掲示板やポータルサイトで公開し情報提供を行い募集説明会、選考、手続きを行う。経済情勢を見て、適宜奨学金の紹介などを実施する。 5) ホームページの内容の充実 学友会の行事に関する情報も共有し、学生生活について適宜HPに掲載する。 6) 正課外活動ポートフォリオの作成 従来のポータルシステムや対面での一斉案内に加え、チューターが担当学生に個別に作成を促す。具体的には、ボランティアなどの正課外活動に参加した際に記載を促すことや、就職活動で活用し教員がフィードバックを行うなどを促していく。 7) 学生生活支援機構会議 課外活動については、学生自治を尊重しつつ、課題解決に向けた関与について検討する。 8) 障がい学生関連 科目履修だけでなく、就業を視野に入れた指導を必要とする学生への対応と、それを支える組織体制の整備が今後の課題である。 9) 大阪医科薬科大学学生支援の方針に基づく点検評価 厚生補導について、UNIVASへの加盟が決定したことを受け、UNIVASのコンテツ活用を含めたコンプライアンス意識の醸成に向けた方策を検討する。 10) 災害対策 災害対策備品は年度ごとの災害対策予算の範囲で順次整備するとともに、災害対策マニュアルの継続的な見直し・改訂を行っていく。 11) その他 学外研修会は、積極的に参加できるよう情報提供を行う。学籍移動については、チューターと連携をはかり、規程に沿って速やかに対応する。学生生活の手引き修正は、学部間の統一をはかり、洗練する。
------------	--

将来に向けた発展方策・課題	1. 学生自治 1) 総代・副総代との連絡会 総代・副総代との連携を継続し、学生の意見を学部運営や学生生活支援の改善に反映できる体制を維持する。 2) 学生からの要望に対する対応（懇談会・意見箱） 意見箱や懇談会などを通じて学生の意見を継続的に把握し、学生生活環境の改善につなげる仕組みを強化する。意見箱への投書が少ないことから、Web上で意見を提出できる仕組みへと変更し、学生が利用しやすい意見収集体制を整備する。 3) 学友会・学生交流会・謝恩会 学生交流会は学生からの要望により開始された取り組みであるが、運営費を負担している PA 会の意向も取り入れながら内容や運営方法について検討する必要がある。今後は学生主体の活動を尊重しつつ、活動の意義を踏まえた行事内容となるよう、関係機関と連携しながら学生交流会の在り方について検討していく。謝恩会の開催場所については、出席者の移動に係る時間を考慮し、大学より近い会場も含めて検討を行う。 2. チューター制度 教員の負担にも配慮しつつ、各種委員会や保健管理室との連携、チューターグループ間での情報共有を図り、よりよい運用ができるよう引き続き検討していく必要がある。 3. 学生調査 学生が回答しやすい機会や場を設けるとともに、各種調査と重複しにくい実施時期を検討する必要がある。 4. 正課外ポートフォリオ チューター等による学生への個別支援において、正課外活動の振り返りを促す。 5. 健康管理 病院を含む感染対策方針の見直しが予定されているため、保健管理室と情報共有を行い、学生への適切な感染対策を講じる。また、学生の健康管理（精神的健康を含む）についても、保健管理室と連携をはかり対応する。 6. 障がい学生関連 科目履修だけでなく、就業を視野に入れた指導を必要とする学生への対応と、それを支える組織体制の整備が今後の課題である。 7. 災害対策 次年度は、複数学年を対象とした避難訓練の実施を予定しており、避難経路および避難場所の妥当性や実施可能性について事前検証を含めた検討が必要である。災害対策備品は年度ごとの災害対策予算の範囲で順次整備するとともに、災害対策マニュアルの継続的な見直し・改訂を行っていく。 8. 自殺防止対策 「希死念慮を抱く学生に対するチャートや事後対応のチャート」について、次年度も引き続き周知を行い、必要時に活用できる体制を整える必要がある。
----------------------	---

将来に向けた発展方策・課題	9. FD 講演会 次年度も FD の企画と開催を年に一回行う。今年度の FD 内容について、学生の受講を望む意見が多く、次年度以降の FD に向けた課題とする。 10. 学外研修会への参加を促し、学生生活支援に活かす。
----------------------	---

3) 委員会

委員会名	カリキュラム委員会	SDGs との 関連		
目 的	本学部の教育目標の下、カリキュラムの改善のために科目の設定や統合、教育内容、教育評価などの事項について PDCA を実施する。			
構成員	真継和子（委員長） 草野恵美子 寺口佐與子 森瞳子 有田弥棋子 中原洋子 間中麻衣子 倉田啓輔（看護学事務課） 北川祐美（9 月まで・看護学事務課）			
活動計画	1. アセスメントポリシーに基づいた学修成果の把握 1) ジェネリックスキルテストの実施 2) ディプロマポリシーに基づく看護実践能力到達度調査の実施 3) ディプロマサブリメントの運用と学生への説明 4) アセスメントポリシーに基づいた分析 2. 現行カリキュラムの運営評価の実施 1) 常勤教員を対象とした調査 2) 学生を対象とした調査 3) 卒業生を対象とした調査 4) e ポートフォリオの導入の検討 5) 学生用アセスメントマップの周知 3. 非常勤教員・兼任教員対象の調査の実施 4. 数理・データサイエンス・AI プログラム委員会との連携 5. IR 室との連携と成績分析 6. 看護学教育モデル・コア・カリキュラム改定への対応			
活動概要	会議は合計 7 回開催した。 1. アセスメントポリシーに基づいた学修成果の把握 1) ジェネリックスキルテスト（GPS-A）の実施 2025 年 3 月に 1 年生の受検申し込みを実施した（受検申し込み者名はカリキュラム委員長名で登録した）。2025 年度入学生（1 年生 97 名）は 4～5 月に全員が受検した（受検率 100%）。1 年生には、個人結果レポートの活用方法について教員から説明した。また、自己成長を確認するために 3 年生時にも実施することを説明し、3 年生に向けて自己の強みや特性を理解できるよう支援した。 教員には、2025 年 7 月の学科会議前に、入学生の特性や在学生との比較結果などについて、資料をもとにベネッセ株式会社の担当者よりウェブ会議ツールで説明を実施した。 2025 年 10 月に 3 年生の受検申し込みを実施した。2023 年度入学生（3 年生 88 名）は 12～1 月に全員が受検した（受検率 100%）。受検者には、入学時からの成長の自己分析や、就職活動における自分の強み・アピールポイントの言語化に個人結果レポートを活用できるよう、2026 年 2 月にベネッセ株式会社の担当者よりウェブ会議ツールで活用方法を説明する機会を設けた。教員には、就職支			

活動概要	援で活用していただけるよう、次年度 4 月に活用方法に関する資料を提示する予定である。 3 年生には、GPS-A の結果を就職活動と関連づけ、エントリーシート作成時の具体的な活用方法について説明を受けたうえで、学習管理システムを用いて自己分析用シートを配付し、就職活動時に活用できるようにした。 2) DP に基づいた看護実践能力到達度調査の実施 回答者数（回収率）は、1 年生 95 名（98.9%）、2 年生 76 名（95.1%）、3 年生 87 名（97.8%）、4 年生 84 名（92.3%）であった。2024 年度に比べて、全体的に達成度が高く、70%未満の項目は減少した。 1 年生は全 13 項目中、80%未満の項目が 1 項目みられたが、2024 年度と同様に 70%未満の項目は認められなかった。2024 年度の 1 年生と比較すると、DP1 の 1 項目および DP3 の 1 項目で 2025 年度の達成者の割合が低かったものの、その他の項目ではいずれも 2025 年度の方が高い結果であった。特に、DP3 の「15. 人間の成長と発達段階の特徴、発達段階に応じた生活の特徴を説明できる」および「17. 個人が家族・集団・地域・社会（文化や政治など）を含む環境から受ける影響と、それらに対する個人の適応的な働きかけについて説明できる」では、2024 年度と比較して 10 ポイント以上高かった。 2 年生は 42 項目中、80%に満たない項目が 14 項目であり、2024 年度の 19 項目と比べて少なかった。70%未満は 2 項目あり、DP2 の「7. 疾病構造の変遷、疾病対策、保健医療福祉対策の動向と看護の役割について説明できる」が 69.7%、DP3 の「39. 地域精神保健活動について説明できる」が 65.8%であった。2024 年度の 2 年生と比較すると全体的に到達者の割合が高く、DP3 についても 80%に満たない項目は 9 項目で 2024 年度の 11 項目より少なかった。 3 年生は 62 項目中、80%に満たない項目が 3 項目（2024 年度 5 項目）であった。70%に満たない項目は 1 項目あり、DP3 の「50. 看取りをする家族の援助について説明できる」が 64.4%（2024 年度 76.4%）と特に低かった。2024 年度の 3 年生と比較して達成者の割合が高い項目は、DP3 「26. 学校や職場などの健康課題を把握する方法について説明できる」が 12.4 ポイント高かった。 4 年生は、65 項目中 80%未満の項目は認められず、36 項目が 100%の達成率であった。2024 年度の旧カリキュラムの 4 年生と比較すると、全体的に達成率は高く、特に DP2 「疾病構造の変遷、疾病対策、保健医療福祉対策の動向と看護の役割について説明できる」は 17.6 ポイント高かった。一方、「グローバリゼーション・国際化の動向における看護のあり方」に関する項目は 6.1 ポイント低かった。新カリキュラム開始年度（2022 年度）に 1 年生であった本学年（現 4 年生）の達成度を 1 年生から 4 年生まで経年的にみると、学年進行に伴い全体として達成度は上昇する傾向が認められた。特に、2 年生から 3 年生にかけては、DP3 「心理的危機状態にある患者・家族のアセスメントに基づく看護援助方法」、DP4 「在宅療養者と家族の健康状態のアセスメント」「チーム医療における連携と協働」に関する項目で達成率の向上がみられた。さらに、4 年生では DP3 「健
------	--

活動概要	康課題に関する政策と保健活動」「看取りをする家族の援助」、DP4「自主グループの育成・地域組織活動の促進」に関する項目で達成率の上昇が認められた。 今後も各学年の特徴を踏まえた対策を行うとともに、継続的な検証を行うことが課題である。 3) ディプロマサプリメントの運用 例年に引き続きディプロマサプリメントをマイステップに添付して、学生が自身で自分の DP 達成度と課題を確認できるようにし、教員にも活用方法の周知を図った。就職活動やチューター面談などに活用されており、今後さらに、学修指導への活用を定着させていくとともに、その評価をしていく。 4) アセスメントポリシーに基づいた分析 2024 年度成績について IR 室に分析を依頼し、得られた解析結果をアセスメントポリシーに基づき 3 ポリシーの観点から検証し、教育年報として取りまとめた。解析結果は教育センターと共有し、科目間の成績の平準化を図るための授業改善に活用した。また、教育年報は教育機構会議および学部間協議会で審議したのち、教授会や学科会議において教員へ周知・共有し、PDCA サイクルの推進につなげた。 2. 現行カリキュラムの運営評価の実施 1) 常勤教員を対象とした調査 常勤教員および新任教員に、新カリキュラムに関して良かった点や改善を要する点についての意見を求めた（2026 年 3 月）。新カリキュラムについては、地域・在宅看護の早期導入や実習期間の延長により、学生が患者を生活者として捉える視点や実践力の向上につながっているとの意見がみられた。また、看護研究法の配置や公衆衛生看護学演習の単位増加などにより、学習の深化につながっているとの評価があった。一方で、科目履修者数の増減や授業運営の負担、科目配置変更の成果の共有や、実習時期を含めた講義・演習・実習の連続性について検討の必要性が指摘された。また、基礎的な学習スキルの育成や理論と実践を結びつける教育の充実、ポートフォリオやアンケート結果の効果的な活用についても課題が示された。 2) 学生を対象とした調査 新カリキュラム 4 年目となり、カリキュラム改正評価に活用するために全学年の学生を対象にアンケート調査を実施した。回答数および回答率は、1 年：回答数 95, 回答率 97.9%, 2 年生：回答数 71, 回答率 86.6%, 3 年生：回答数 87, 回答率 99.0%, 4 年生：回答数 84, 回答率 92.3%であった。 1 年生への調査では、多くの科目で「1 年生科目として設定されていてよかった」との肯定的回答が 7 割を超え、概ね適切に配置されている。一方、倫理学、医工薬連環科学遠隔講座、国際交流演習の 3 科目は 7 割に満たず、内容や位置づけの周知に課題が示唆された。オンデマンド授業については約 7 割が増加を希望しており、対面授業とのバランスを踏まえた活用方法の検討が必要である。また、科目については「多い」と感じる学生が前期で約 5 割、後期で約 6 割であ
------	--

活動概要	り、特に後期の負担感への対応が課題である。自由記載では、1限の負担軽減や空きコマ削減を求める意見が見られた。 2年生への調査では、開講時期等が変更となった科目や新設科目に関して、「適切である」「どちらかという適切」と7～8割の学生は回答し、高い評価を得た。一方で、「インタラクティブ・イングリッシュ I・II」「医工薬連環科学遠隔講座」「国際交流演習」の科目については、3～5割の学生が、2年生で履修できたことに「どちらかというと思わない」「思わない」と回答していた。2年生全体の科目数（授業時間数）については、前・後期ともに6～7割の学生が、「多い」「どちらかという多い」と回答していた。 3年生への調査では、開講時期等が変更となった科目や新設科目に関して、「適切である」「どちらかという適切」と7～9割の学生が回答し、高い評価を得た。看護研究法については、一部の学生からは就職活動や追実習と時期が重なることで計画的な勉強が困難であったという意見が聞かれた。また、「医工薬連環科学遠隔講座」「国際交流演習」の科目については、6～7割の学生が、3年生で履修できたことに「どちらかというと思わない」「思わない」と回答していた。3年生全体科目数（授業時間数）については、前期は前期に関して7割の学生が、「多い」「どちらかという多い」と回答し、後期は6割が「適当」と回答していた。また、2月中旬まで実習があることで、実習と就職活動を両立に困難を感じている意見も聞かれた。 4年生への調査では、多くの科目で「4年生科目として設定されていてよかった」との肯定的回答が7割を超え、概ね適切に配置されている。一方、インタラクティブ・イングリッシュ I・II、医工薬連環科学遠隔講座の2科目は7割に満たず、内容や位置づけの周知について検討の余地がある。4年生全体の科目数は、「適当」と回答した学生が前期で約7割、後期で約8割であり、オンデマンド形式の授業についても約6割の学生が「ちょうどよい」と回答し、全体としては概ね適切と評価された。 3) 卒業生を対象とした調査 就職支援委員会と共同し、2024年度卒業生および2024年度卒業生の就職先に対して、卒業生には在学中の教育内容やキャリアサポートへの満足度、就職先には重要とする看護実践能力や卒業生が入職時に修得できていた能力、本学の教育内容に関する意見等についてのアンケート調査を行った。2024年度卒業生22名（25.0%）から回答が得られた。自己評価が高かった項目は「看護実践や自己の成長のために、他者の支援を求めること」「チームの一員としての自分の役割を認識した行動をとること」などであった。また、自己評価が低かった項目は「後輩や学生の指導をすること」「緊急時の対応をすること」であった。ほぼ前年度と同様の結果であったが、「後輩や学生の指導をすること」「緊急時の対応をすること」は昨年度より自己評価が低くなっていた。これは、昨年度は過去3年間の卒業生を対象としていたが、今年度は過去1年間の調査であるためと考えられる。本学の看護学部教育への期待としては、「臨床・臨地との協力」「教育カリ
------	---

活動概要	キュラムの充実」「図書館の充実」「研究機関としての発展」「地域貢献」「大学からの情報発信」を期待する意見が多く、昨年度と比較して「教育カリキュラムの充実」や「大学からの情報発信」の期待が高くなっていた。 卒業生の就職先では、8 施設（27.6%）から回答が得られ、本学のディプロマポリシーおよび社会人基礎力について重要度が高かった項目は、「生命の尊厳及び人権の尊重」「多様な価値観の尊重」「幅広い教養と基礎学力」「向上心と自己研鑽」「組織で働くための規律性」「コミュニケーション能力」「ストレス対処能力」であった。一方で低かった項目は「国際的な視点」であった。昨年度と比較して「幅広い教養と基礎学力」と「情報通信技術(ICT)の活用力」の重要度が高くなっていた。 4) カリキュラムマップの検証 本学部の履修系統図であるカリキュラムマップをもとに、体系的な教育課程の編成に関して改善の必要性について検討を行い、現段階では問題ないと評価した。 3. 非常勤教員・兼任教員対象の調査の実施 非常勤、兼任教員を対象に「看護学部学生の学習に対する姿勢や態度、日頃の学習行動」に関する意見調査を行った。今年度は回答率を上げるために前期・後期に分けて調査を実施したが、10 名からの回答、回収率 58.8%であり、昨年度（63.1%）よりやや下がった。学生の受講態度は概ね良好で、真面目に講義に集中しているという評価が多かったが、集中を妨げているとの指摘や、6・7 月の講義では固定席を導入したが座席指定の不徹底も報告された。また、遅刻や欠席が例年に比べて多く、出席していても授業に集中していないことや、試験に向けた学習不足に課題がみられた。工夫として、毎回の講義の最後に確認問題を実施し提出させる、双方向のやり取りを意識した授業等を展開していることがうかがえた。 4. 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム委員会との連携 看護学部の数理・データサイエンス・AI 教育プログラム委員との情報共有を行ったが、特段の問題はなかった。 5. IR 室との連携による成績分析 IR 室に 2024 年度成績分析を依頼した。各学年の単年度 GPA は昨年度と大差はなく、全体として適正に評価されている。ジェネリックテストと 1 年次 GPA の相関は昨年度同様見られない。必修科目の成績分布について、2 年生の一部科目で中央値の低下が確認されたが、特段の問題は見られなかった。さらに、GPA の活用促進（進級及び卒業判定）に向けて GPA と DP 到達度の関連をみていく。 6. 看護学教育モデル・コア・カリキュラム（令和 6 年度改定版）の対応 2024 年度に引き続き、カリキュラムワーキンググループと連携し、看護学教育モデル・コア・カリキュラム（令和 6 年度改訂版）への対応について検討し、2027 年度入学生より新カリキュラム開設に向けたカリキュラム変更申請の準備を進めた。DP と教育目標を見直し、本学部の課題をふまえての新設科目の設置、
------	---

活動概要	一部選択科目の必修化，学修内容と時間数とのバランスの適正化を図った。 協議・決定事項を学部全体に説明，周知を図り，現行カリキュラムの課題とともに，新カリキュラムへの理解を促進した。課題として，科目間や学年間の体系を強化し，学びの積み上げが確実にできるよう分野間での連携を図ることが必要である。
評 価	1. 効果が上がっている事項 ・ IR 室との連携により学修成果の可視化ができ，成績データをもとに学年・科目ごとの状況を適切に把握できている。特に，極端に成績が低下した科目を早期に特定し，教員との共有や内容・評価方法の見直しなど，迅速な改善対応につなげることができた。こうしたデータに基づいた継続的な改善サイクルが定着している。その結果，学生の学修成果が向上しており，例年，DP 達成率は上昇傾向にある。今後も継続的な検証をしていくことが必要である。 ・ 学習支援システムのマイステップを活用し，学生の学修成果を可視化したことにより DP 到達度と課題が明確となり，就職活動やチューター面談に活用され，低 GPA 層の学生へのフォローアップにつながっている。 ・ 2024 年度より検討してきた看護学教育モデル・コア・カリキュラム（令和 6 年度改訂版）をふまえての新カリキュラムに向けた準備では，他分野科目に対する教員間の共通理解が図られ，学修内容の過不足や分野同士の連携体制の基盤づくりにも繋がった。 2. 改善すべき事項 ・ 2027 年度新カリキュラムスタートに向けて，科目間や学年間の体系化を図ることが必要である。また，教員の看護学教育モデル・コア・カリキュラム（令和 6 年度改訂版）への理解をさらに深め，準備を進めていく。 ・ 特定学期に授業が集中していないか再点検するとともに，科目の課題による負担量を平準化する。また，教育センターと連携し，時間割作成におけるルール化図り，学生への学修負荷の適正化と学修成果の向上を図る。
将来に向けた発展方策・課題	1. 現行カリキュラムにおける時間割の是正と学修負荷の平準化に向けた整備 2. 2027 年度新カリキュラムに関する教員の共通理解の促進と FD の充実 3. 看護学教育モデル・コア・カリキュラム（令和 6 年度改訂版）への対応

センター名	カリキュラム評価委員会	SDGs との 関連	
目 的	本学看護学教育カリキュラムについて継続的に評価することであり、委員に複数の学生を含め多角的に評価を行うことで、自己点検および評価活動に反映させ看護学部教育水準のさらなる向上を目指す		
構成員	山岡由実（委員長）、土手友太郎、樋上容子、川北敬美、谷水名美、北川祐美、長田紗季（6月まで）、森川健太、皆本敦（7月まで） 学外委員：岸恵美（高槻赤十字病院看護部長／大阪府看護協会府北支部理事） 学生委員：田村秀子、岡本真優（大学院）、植村怜、山口結（学部）		
活動計画	1. 学部、研究科における昨年度カリキュラム評価の振り返り 2. カリキュラムの評価方法、評価リストの検討と決定 3. 2024年度を対象としたカリキュラム評価の実施と意見交換 4. 報告書の作成と公開		
活動概要	1. 委員会は計4回開催した。昨年度報告書はHPで公開した。 2. 2025年度は、学部、および研究科のカリキュラムを評価対象とした。また学外の有識者1名を委員に加え、その意見を反映させて、看護学部教育水準の更なる向上を図った。また学生委員は学部2、4年生と大学院前期、後期の院生各1名とした。「看護学部アセスメントプラン、看護学研究科アセスメントポリシー」に基づき作成された本学独自の評価リストを用いた。評価リストは、学部、研究科（修士・博士課程）毎に、課程レベル、科目レベルに分け、AP、CP、DPの評価項目についてPDCAが行われているかを3段階で評価する構成とし、カリキュラムが機能しているかを検証した。 3. 2025年5月から11月にかけて、委員が評価項目に基づき評価を行い、11月開催の第4回委員会において、学外委員及び学生委員を含めた結果共有と、主に課題についての意見交換を実施した。 4. 今年度実施したカリキュラム評価リスト作成と評価結果、総括および今後の課題を報告書にまとめた。報告書の内容は、学部長に報告後、看護学部及び研究科教授会において報告を行い、本学部教職員と評価結果の共有を行った。		
評 価	1. 効果が上がっている事項 1) 評価リスト作成を用いて評価したことで客観的に行うことができた。 2) 評価結果：学部、大学院共に概ねPDCAがなされているという評価であった。また大学院では、課題となっていた研究助成金の獲得に改善が見られた。しかしディプロマポリシーについて、実施していない評価項目（就職先情報調査）があり、妥当性と効果的な評価項目について学外委員と意見交換した。 3) 学外委員、学部生との課題についての意見交換の内容と改善の要望を関連センターと共有した。		

評 価	2. 改善すべき事項 1) 学部：入学時調査を継続実施し AP に適った学生獲得に努める，正課外活動ポートフォリオ・ティーチングポートフォリオの入力率の向上及び活用と評価 2) 研究科：安定的な定員確保（前期課程），在学生の期間内修了への支援の充実（後期課程），大学院生の研究助成金申請への継続した支援要望と情報提供．
将来に向けた発展方策・課題	1. 学部・研究科共に退学者を出さない入試・学修支援への評価，改善を継続する． 2. 新たな学部・修士一貫コースの導入の検討に伴い，評価項目のさらなる検討が必要である． 3. 学部のアセスメントプラン，研究科のアセスメントポリシーの点検・評価と，それに伴う評価シート，効果的な評価項目への評価・修正を恒常的に実施する． 4. 3 学部合同開催の教育研究内部質保証評価会の評価視点と看護学部カリキュラム評価リストの整合性について検討を行う．

委員会名	実習委員会	SDGs との 関連	 
目 的	看護学実習に関わる事項（年間計画の立案，実習要綱の作成，実習連絡協議会の企画・運営，予算案作成，インシデント等に関する検討など）の調整をする．		
構成員	山岡由実（委員長）鈴木美佐 大橋尚弘 近澤幸 南口陽子 山埜ふみ恵 山内彩香 勝山あづさ 杉木佐知子 野瀬珠美 日高朋美 酒向なつみ 北川祐美（4～10月まで）皆本敦（6～3月）（看護学事務課）		
活動計画	1. 実習連絡協議会の企画，運営 2. 実習オリエンテーションの企画，運営 3. 看護学実習要綱（共通事項），各実習要項の修正と取り纏め 4. 臨地実習における合理的配慮が必要な学生への支援 5. 領域別実習のグループ編成，看護学実習に関する調整，年間計画の立案 6. 実習状況に関する学生の情報共有 7. 委員会 FD の実施（委員会内，臨地実習指導者・教員対象） 8. 実習中のヒヤリハット/インシデント/アクシデント分析と今後の対策の検討 9. 実習前の倫理学習に関する学生及び教員へのアンケート調査の実施，まとめ 10. 感染症対策（ワクチン接種状況，感染予防等，COVID-19）に関わる調整 11. 実習調整・対応 12. 看護実践の理論と統合の評価及び出席管理 13. 実習記録のクラウド化検討 14. その他		
活動概要	委員会の開催：11回の委員会を開催した． 1. 実習連絡協議会の企画，運営：今年度は，第Ⅰ部の全体会議は対面開催とウェブ会議システムで，第Ⅱ部の分科会は分野ごとに対面開催またはハイブリッド開催で実施した．全体会議は85名が参加した．全体会議では2024年度の看護学実習関連の報告と2025年度の看護学実習の概要を報告した． 2. 実習オリエンテーションの企画，運営：1～3年生の実習オリエンテーションを開催した．いずれの学年においても，実習の意義と位置づけ，実習における共通事項の説明，実習計画・実習概要，デジタル機器の取り扱い，実習における倫理，個人情報保護，健康管理・感染症対策，実習におけるハラスメントの相談窓口などについての内容とした．オリエンテーションにおける2～3年生の倫理のグループワークは，これまでの学生のヒヤリハットやインシデント報告を反映させた内容になるように調整した．また，学生が意欲的にオリエンテーションに参加できるように，事前課題を学生に提示したうえでグループワークを実施した．学生が主体的にグループワークに参加できるような取り組みについて継続して検討する． 3. 実習要綱等の作成：各分野での要綱・要項配布・在庫状況を確認し，2026年度看護学実習要綱（共通事項），各分野別実習要項，統合看護学実習要項を作		

活動概要	成した。看護学実習要綱（共通事項）について、実習上の留意点等現状を踏まえて内容を検討し、修正した。統合看護学実習要項については、デジタル化に合わせて、学生への冊子配布を廃止し、学習管理システムへの掲示に変更した。 4. 臨地実習における合理的配慮が必要な学生への支援：2025 年度申請のあった学生 3 名に対し、看護学部障がい学生支援委員会の基本方針に則り、各分野で具体的支援計画を作成し対応し、教育センター、教授会で検討・審議した。当該学生は支援に関して適切であると評価した。 5. 実習グループの編成等 1) 2025 年度実習運営に関する調整 2025 年度大学病院実習計画表について新棟建設に伴う実習病棟変更後の計画案を作成し、看護部と確認・調整を行った。病棟再編や診療科変更を踏まえ、使用予定病棟および学生配置の妥当性を検討した。2025 年度分野別実習学生配置は卒業予定者、助産科目選択者、過年度生、GPA、性別等をもとに総合的に判断して決定した。特に配慮を要する学生については事前に情報共有の上、グループ編成に反映させた。4 年生実習に伴う教室利用については、学生生活支援センターの方針を踏まえて学内食事スペースの運用を見直し、講義室周辺スペースを実習学生優先席として活用する体制を整えた。 2) 2026 年度実習計画の立案 9 月の大型連休により実習日数や施設の実習受入れに影響が生じる可能性があるため、複数案を作成して検討した。結果、従来スケジュールを基本としつつ一部分野については 9 月 28 日の週まで実習を行う方針で決定した。実践発展実習および統合看護学実習については、6 月第 1 週開始を基本とし、2 週間単位 3 クールで実施する計画案を作成した。各分野の統合看護学実習との重複回避を図るため学生配置時期を調整した。 3) 2027 年度実習計画の立案 2027 年の年間カレンダーに基づき、実習計画案を作成した。例年通りの設定ではお盆明け直後に実習オリエンテーションを実施することとなるが、現時点では例年に準じた日程案で検討し、次年度 8 月中に最終決定することとした。 6. 実習状況に関する学生の情報共有：実習における気になる学生の情報を共有し継続的な支援につなげることを狙いとして 2023 年度より導入している。全教員がファイルにアクセスし、必要時確認すると共に、口頭でも共有することで、指導方法や対応方法について教員間での引継ぎや連携、相談が柔軟にできる。 7. 委員会 FD 実施：今年度の FD は「安心して指導に臨むためのハラスメント予防の視点と実践的アプローチ」をテーマとし、6 月 4 日実習連絡協議会後に臨床指導者と看護学部教員を対象にハイブリット形式で開催した。参加者は 85 名であった。回収した事後アンケート 40 件（回収率 47.1%）で全員が
------	--

活動概要	講演に満足したと答えていた。自由記載では「目の当たりにしている問題でとても興味深く聴講した」「指導上の工夫など大変学びになった。現場の指導の参考にする」など満足度の高い意見がみられた。今後希望する講演テーマとして、「学生とのコミュニケーションの取り方」「ハラスメントの定期的な講演」「実際に起こったインシデント・アクシデント・ハラスメントの分析と対策」などの希望があった。 8. 実習中のヒヤリハット/インシデント/アクシデント分析と対策：実習中は随時看護部と情報交換しつつ対応し、委員会で共有した。実習終了後の3月に分析し、共有した。今年度は、アクシデント1件、インシデント13件、ヒヤリハット1件（昨年度はアクシデント1件、インシデント9件、ヒヤリハット0件）で合計15件であった。内容別には、記録物管理の不備が5件で最多であった。2年生は1件のみで、記録物管理や個人情報保護に関するインシデントはなく、オリエンテーションや倫理GWの効果ができていると考えるが、全体的には昨年度より5件増加しており、引き続きインシデント・アクシデント防止に向けて教育の強化が必要である。次年度も全体・各分野によるオリエンテーションや倫理GWにおいて、実際のインシデントの事例をもとに状況と対策を共有し、学生が起り得る事象と適切な対応を具体的にイメージできる教育を充実させる必要がある。特に記録物管理や感染対策については、オリエンテーションにおいて具体的事例を用いて説明しているものの、今年度もインシデントが多く発生しているため、知識としての理解と実際の行動に乖離が見られる。そのため、知識の伝達にとどまらず、倫理的視点を踏まえ、自分ごととして行動できる力を養う教育が重要である。 9. 倫理グループワークアンケート調査 1) 学生対象調査（3年生）：倫理グループワーク実施直後の調査結果では全員が「参考になった」と回答し、実習前に具体的な倫理問題や解決策を知ることと配慮しながら行動できたや、グループワークで得た知識や意識が実際の場面で役立ったとの意見があった。分野別実習後に実施した調査の結果では、90.1%の学生が実習で役立ったと回答し、倫理的視点の向上や実習への姿勢の向上につながった。 2) 教員対象調査は、分野実習終了後の2月に実施した。倫理的な課題があると感じた場面として、実習中の学生の患者への配慮不足や個人情報の取り扱いなどの実習態度やマナーに関する課題、医療者の発言や患者対応、実習指導方法、ハラスメントに関する課題が挙げられた。今後のグループワークでは、学生の実習態度やAIの活用をはじめとした電子データの取り扱い、医療現場で生じやすい倫理的課題に関する事例を取り上げることが求められていた。また、グループワークを行う意義や開催時期について肯定的な意見が多く、運営についての課題は見出されなかった。次年度も倫理的課題を身近なものとして捉え、学びが深まるグループワークの実施を検討していく。
------	---

活動概要	10. 感染症対策（ワクチン接種状況、感染予防等、COVID-19）に関わる調整 「大学病院における学生実習について」を周知した。また感染症流行時には、学生生活支援センター及び看護教育センターと共に、主に実習中の学生に予防行動を促した。実習期間中は学生の体調に関する校医・保健管理室への相談・連絡、感染症による実習受入れ中止時の病棟変更等の調整を行い、追実習の対応を行った。 11. 実習依頼・調整：B棟開設に伴う大学病院実習計画の修正について、看護部と随時連絡調整を行った。また2026年度実習計画策定・実習依頼を行った。 12. 看護実践の理論と統合の評価及び出席管理：看護実践の理論と統合の出席管理及び評価について作成した申し合わせ事項を実習開始前に確認、共有し、実習後に運用について見直しをおこなった。 13. 実習記録のクラウド化検討：2025年12月より教育センターと実習委員会拡大WGが形成され、実習記録のクラウド化検討を進めるにあたっての課題の洗い出しをふまえ、法人内での内部規約の確認、今後の規定等の整備に関する検討を開始した。 14. その他：3年生の実習でデジタル教科書を使用するにあたり、大学病院及び他施設でのデジタル端末使用について申し合わせ事項を作成して共有した。
評価	1. 効果が上がっている事項 1) 実習連絡協議会の配布資料について、昨年度より配布病棟の一覧表を作成し看護部に必要部数の入力を依頼したうえで、該当部署に必要部数を配布しており、欠席した部署の資料を今年度は看護部に持参した。それにより、残部が生じず印刷費用の削減につながった。 2) 大学病院看護部と随時連携をとり、カリキュラム変更及び感染症等の実習に関連する事項、ヒヤリハット対応、配慮が必要な学生の実習支援について必要時相談し対応できた。それにより学生への不利益が生じることなく臨地実習を実施できた。 3) 各分野の実習と関連している科目「看護実践の理論と統合」の出席管理カードを作成することで他分野にわたる出席状況の把握が容易になり、学生の実習指導につなげると共に、学生の自覚を促すことができた。 4) 大学病院のB棟開設に伴う実習計画の変更は看護部と密に連絡を取り合い、情報を共有することで実習中の対応について問題なく移行できた。 2. 改善すべき事項 1) 電子カルテの閲覧、記録、報告に関するインシデントが生じ、なかでも低学年に増加がみられる。看護部との情報共有及び対応の検討と共に、学生の意識付けをさらに強化し、指導継続する。 2) 実習中のデジタル端末用について、2025年度はデジタル教科書としての使用のみに限定して申し合わせ事項の作成で対応した。実習記録のクラウド化検討とともに2025年度のデジタル端末使用の実情を踏まえた注意点等再検討が必要である。

評 価	3) 感染症対策について、本学学生は医療従事者に準ずるため、感染症予防・り患時の対応の重大性についての指導を継続する。一方で、COVID-19 に対する感染症法上の分類が 5 類に変更となり約 2 年経過することから、今後病院・施設での学生実習への対応に変更が予想され、本学部としての検討が必要となる。
将来に向けた発展方策・課題	1. 2022 年度改正カリキュラムの評価を踏まえ、看護学教育モデル・コア・カリキュラムの検討に活用する。 2. 実習記録のクラウド化の検討を引き続き行い、活用に伴う課題を抽出する。同時にデジタル端末の使用についての注意点等、学生の意識付けを強化する。 3. 病院・施設の実習指導者、臨床教授等と学部との協働体制の強化に努め、実習指導体制の充実、教育能力向上をはかり、継続的に成果を評価する。

委員会名	ウェブサイト委員会	SDGs との 関連	 
目 的	大阪医科薬科大学看護学部のウェブサイトを目滑りに管理運用する。		
構成員	土手友太郎（委員長） 安田稔人 大橋尚弘 日高朋美 寺田沙耶 野口美穂 上久保純（看護学事務課） オブザーバー 岩井誠 田中俊貴（アドミッションセンター） 松田久美 田中庸介（総務部企画・広課）		
活動計画	1. 看護学部教員・各領域・分野に関する情報更新 2. 学部長あいさつ、トップページ写真等の更新 3. 各センター・委員会関連ページの更新・充実 4. 看護学部年報、看護研究雑誌の最新号掲載 5. その他必要な更新および情報公開（随時） 6. アドミッションセンター（AC）が企画、運営するオープンキャンパス（OC）への協力、OC の日時や企画内容の看護学部教員への周知 7. 看護学部案内の企画 8. Web サイトの評価		
活動概要	1. 委員会（10 回）の開催：対面で 7 回とウェブ会議ツールで 3 回開催した。 2. OC 業務の教員への協力依頼（模擬講義、個別相談など）を行った。 2 名の教員が模擬講義を担当、第 1 回 9 名、第 2 回 7 名の教員が個別相談を担当した。 3. OC 参加学生のアンケート結果を分析し、次年度への検討項目を抽出した。 4. 日本看護系大学協議会（JANPU）に登録して本学の OC の案内を HP に掲載した。 5. 本委員会の代表メールアドレスを作成した（website-n@ompu.ac.jp）。 6. JANPU の特別企画「専門看護師をめざす」を本学看護学部、看護学研究科の HP に掲載した。 7. 一般社団法人 日本私立看護系大学協会からの依頼によりベネッセ株式会社の Web ページに大学の魅力と教育の特色、ロゴマークを掲載した。 8. サイト更新 1) 教員一覧、教員情報、教員からのメッセージ、領域・分野ページ、実習の写真の更新 2) 部長あいさつの更新 3) 3 センターのサイトの更新、国家試験情報、就職・進路状況の更新 4) 2024 年度看護学部年報、看護研究雑誌第 16 巻掲載 5) 各種告知事項、実施報告等の更新 6) 在学生メッセージの更新 7) 国際交流ページ更改		

評 価	1. 効果が上がっている事項 対面式 OC については、午前と午後の 2 部制の事前予約とし、2 回の OC で 265 組 471 名（昨年は 291 組 524 名）が参加した。キャンパスツアーでは今年度から実習室に機器を設置し、学生スタッフが機器を紹介する企画を実施し好評を得た。本部キャンパスの解剖実習室や図書館の見学ツアーも高い評価を得られた。本学に興味を持ち、OC に参加した理由として「大学病院があり、実習施設が充実している」、「通学可能な距離にある」、「交通の便がいい」、「カリキュラムが充実している」という回答が多かったが、それらを OC で実感してもらえたのではないと思われる。 企画・広報課職員の参加により、看護学部教員と事務課との連携が強化され、企画・広報課の協力により教員の意見を HP に反映できた。実際の病棟実習風景の撮影と学生の感想と指導教員のコメントを取材し、質の高いコンテンツが作成できた。受験生向けの紹介動画を受験生サイトに掲載し、HP の掲載内容の改善に役立てた。OC や HP の充実が本年の看護学部の受験者の増加の一員となっていると思われる。 2. 改善すべき事項 本委員会の役割は広報を含むため、AC とも密に連携をとり、受験生にとってより見やすい HP を目指す。
将来に向けた発展方策・課題	受験生が受験校を選択する際は大学の HP や OC を参考にする場合が多く、さらなる HP の充実に加えて、AC ともさらに連携し、OC の企画内容を充実させる。次年度の HP については学問分野の興味を引き出し学生募集につなげるため「夢ナビ企画」を検討していく。OC については実習室にモデル人形以外の目玉となる展示を企画する。また、受験生の進路指導をする教員に対しても本学 OC の参加を勧めていく。

委員会名	看護研究雑誌編集委員会	SDGs との 関連	 
目 的	大阪医科薬科大学看護学部における教員等の教育研究成果を広く看護界に発信し、看護学の向上と発展に寄与する		
構成員	樋上容子（委員長） 大橋尚弘 谷水名美 山埜ふみ恵		
活動計画	1. 看護研究雑誌第 16 巻の編集・発行 2. 投稿・査読関連の手順および書式等の整理 3. 第 15 巻の看護学部サイト掲載 4. リポジトリ登録に関する検討とリポジトリ登録開始 5. 冊子版の終刊に関する検討		
活動概要	1. 委員会の開催：年間 6 回の会議を開催し、以下の事項の審議と確認を行った。 2. 看護研究雑誌第 16 巻の編集・発行：投稿規定に基づき、8 月末題目登録締切、10 月末原稿提出締切、3 月発行というスケジュールで、投稿の募集から査読、編集の諸業務を行った。結果、掲載論文は 19 篇となった。 3. 看護研究雑誌第 16 巻の学部サイト掲載：ウェブサイト委員会に依頼して看護研究雑誌第 16 巻を Web 公開した。 4. 本部図書館委員会からの打診があり看護研究雑誌のリポジトリ登録開始についての検討を進め、第 16 巻よりリポジトリ登録開始となった。リポジトリ登録の事務担当者には、看護実践研究センターの事務担当者が担うこととなった。 5. リポジトリ登録の開始に伴い、冊子体の終刊の検討を進め、教授会審議により冊子体は第 16 巻で終刊とする運びとなった。		
評 価	1. 効果が上がっている事項 看護研究雑誌第 16 巻より本学リポジトリへの登録を開始する運びとなり、本学教員等の研究成果を更に広く発信できることとなった。これに伴い次巻より冊子体を終刊し、Web 版（リポジトリ登録含む）の形態で発行していくこととなり予算の削減に寄与することとなった。第 16 巻の査読・編集作業は予定通り進行し、前年度より多くの論文を掲載することができた。 2. 改善すべき事項 投稿から査読依頼、再査読と最終稿提出までの期間が過密で、査読遅れや漏れ等の予期せぬ事象に対応する日数がない為、見直しが必要である。		
将来に向けた発展方策・課題	1. 投稿規定、執筆要領を必要に応じて見直す。 2. 査読開始から最終稿提出までの期間が短く、余裕を持った期間設定の検討が必要である。 3. 査読の質の維持向上は雑誌として常に継続して取り組むべき課題であり、引き続き方策を検討していく。		

委員会名	予算委員会	SDGs との 関連	4 質の高い教育を みんなに 
目 的	看護学部における適正な年間予算案を要望することを目的とする。		
構成員	鈴木久美（委員長） 真継和子 山岡由実 鈴木美佐 土手友太郎 上久保純 堀江雅彦（看護学事務課）		
活動計画	各部署等より提出された予算案を基に作成された 2025 年度看護学部予算案の審議を行い，教授会で承認を得た。 1. 学生の教育，学生の実習に係る備品等 2. 各センターおよび各委員会に係る活費 3. 教員の研修等に係る活動費 4. 教員の交通費 5. 実習補助員に係る諸経費 6. 看護学事務課に係る諸経費 7. その他，学部長が必要と認めたもの		
活動概要	次年度予算案を作成するにあたり，看護学部に係る全体的な予算をできるだけ削減するように努め，看護学部として以下の新規購入を要望した。 1. 看護学部 15 周年・看護学研究科 10 周年記念誌の制作 2. 看護学部棟 1 階の AED 更新 3. 男性導尿・浣腸モデル装着 2 台の購入 4. “でんちゅう”くん TypeⅡ 1 体 5. アトム分娩台 マミージョイデリバリ 6. 京都科学 MW71 小児（幼児）の身体診察シミュレーター（11464-000） 7. 急性期成人看護学・大学院科目における教育電子カルテシステムの導入		
評 価	1. 効果が上がっている事項 近年の法人の財政状況を踏まえ，まずは特に重要で早急に更新・設置が必要な機器を選び出し，その優先度の高いものから順に整備を進めている。 2. 改善すべき事項 予算の執行状況を確認しつつ，設備の修繕や機器・備品の更新を計画的に進め，看護学部内の設備や機器の経年劣化の状況を把握したうえで，限られた予算の中でも合理的に更新する必要がある。		
将来に向けた発展方策・課題	中長期的な視点で看護学部全体の設備修繕や機器・備品の更新については，まず必要性の高いものを見極めて優先順位を明確にすることが重要である。		

委員会名	物品管理委員会	SDGs との 関連	 4 質の高い教育を みんなに
目 的	講義・演習を円滑に進めるため、授業に関する物品の維持及び管理，物品に関する情報収集と学部内教員への発信，その他物品管理に関する事項を行う。		
構成員	鈴木美佐（委員長），二宮早苗，南口陽子，間中麻衣子，有吉真里菜，寺田沙耶，森川健太（看護学事務課 6 月まで），堀江雅彦（看護学事務課 6 月から）		
活動計画	1. 委員会の開催 2. 教務関係備品等・消耗品の在庫管理と点検 3. 教務関係備品の貸し出し管理 4. 実習室，器材庫，シミュレーションルームの整備 5. 経年劣化による物品の確認および修理・購入の必要性を検討 6. 実習室・シミュレータールーム・備品等の利用に関する規定・規約の見直し 7. 2026 年度教務関係物品購入予算案の作成		
活動概要	1. 委員会開催 2025 年 4 月～2026 年 3 月に計 6 回の委員会を開催した。 2. 教務関係備品等・消耗品の在庫管理と点検 1) 教務関係備品の管理 ・ 5 つの共通物品の定数の札が不足しており，事務課へ依頼し補充を行った。 ・ シミュレーションルームの物品に関しては，物品名や資産管理番号などの修正を行い，物品台帳を整理した。 ・ 管理台帳にもとづいて車いすとストレッチャーの点検を実施し，状態確認を行った。あわせて破損が見られたベッドのキャスターについては今年度より順次交換を行った。 2) 定期点検 モデル・シミュレーター（京都科学，坂本モデル，高研）の点検について，各分野物品管理係に確認し実施した。 3) 教務関係備品の点検・消耗品の在庫管理 ・ 各分野へ業者点検依頼の希望のある物品を募り，がん看護学分野よりナーシングアンのモデル点検の希望があり，委員会で優先順位とともに検討した。 ・ 備品・消耗品確認の流れに関する文書について委員会で検討し，今年度は改訂がないことを確認した。委員会では，共通物品の備品・消耗品の点検と整理を 3 月初旬に実施した。年度末に，各分野の備品・消耗品点検について，備品・消耗品確認の流れに関する文書を添付したうえで，各分野の物品管理係に依頼した。今年度も，各分野の物品管理係による分野物品のカウントに関して，カウント方法やリストについて委員へ問い合わせが入ることはなかった。 ・ 委員会では，共通物品の備品・消耗品の点検と整理を 3 月初旬に実施した。消耗品の在庫については，一部バスタオルで若干の減少が認められたが，在庫数は定数を上回っていることを確認した。共通物品に不足している物品が 1 点あ		

活動概要	ったが、破損があり破棄されたことおよび、定数減でも演習に支障がないことを確認したため、定数を変更した。 3. 教務関係備品の貸し出し管理 ・2025年度は、実習室物品の貸し出しとして、看護キャリアサポートセンターへ計2回、アドミッションセンターへ計2回、病院新本館落成記念講演会へ1回、物品管理委員会の管理下である実習室物品（ベッド、ベッドシーツ、各種モデル、枕、車椅子等）の貸し出しを行った。 ・管理に関しては、看護学事務課より、使用後に状況を確認のうえ、返却受取に係る情報を記入のうえ申請様式を整えている。 4. 実習室、器材庫、シミュレーションルームの整備、備蓄見直し ・各分野が使用している器在庫棚の地震対策用に装着しているゴムの劣化が確認されたため、今年度ゴムの交換を行った。また器材庫内に配置している物品の整理を行った。 ・モデルの故障やベッドの破損などを確認した際には、貼り紙掲示やベッドの移動を行い、物品が安全に使用できる環境を整えた。 5. 経年劣化による物品の確認および修理・購入の必要性の検討 ・定期的な清掃およびリネン類のクリーニングの実施を行った。 ・経年劣化に伴う、実習室1のベッドキャスターの破損について、修理の可否について検討し、12本のキャスターの交換を年度末に実施した。また、経年劣化に伴い破損した人体模型について、新規購入等を検討した結果、もう1体保有しているため廃棄処理を行った。 6. 実習室・シミュレータールーム・備品等の利用に関する規定・規約の見直し ・実習室・シミュレータールーム・備品等の利用に関する規定・規約の部分的な見直しの検討を行った。 7. 2026年度教務関係物品購入予算 ・今年度の教務関係物品購入はすべて予算内で執行した。 ・定期点検等での備品・物品等の不具合を早期に把握したうえで、修理及び購入の優先度を委員会内にて検討し、年度内予算での修理・購入及び、次年度以降の購入のための予算化を図った。 ・経年劣化に伴う破損が予見されるベッドのキャスターについて、次年度以降の交換のための予算化を図った。
評価	1. 効果が上がっている事項 1) 教務関係の備品、機材の維持 ・備品、機材および消耗品の管理は、各分野の担当者を介して点検され、当委員会が統括することで円滑に管理できている。備品類の業者定期点検スケジュールの整理を改めて実施し、今後も予想される経年劣化に伴う不具合を早期に把握・対応できるようにした。 2. 改善すべき事項 1) 共通消耗品の購入ルール of 徹底

評 価	・ 共通で使用する消耗品の購入に関して，使用した分が適切に補充されるシステムが作られているが，定数の札が紛失するなどが散見される．演習時に必要な数が提供できるよう，引き続きルールの徹底を呼び掛ける必要がある． 2) 共通物品の定数カウントおよび管理について ・ タオルやシーツ等のリネン類は，古くなったものは徐々に破棄している．今年度はバスタオルで若干の減少が認められたが，在庫数は定数を上回っているため，必要数を考慮し経過観察とする．
将来に向けた発展方策・課題	1. 経年劣化のベッド等，高額物品の買い替えに関する検討 ・ 実習室 1 に設置されているベッドは，一部新規購入し，修理可能なものはそのまま使用している．ベッド支柱のロール部分が壊れているものもあるため，使用する学生の安全面を考え優先的に買い替えを計画する必要がある．故障に伴う高額物品の買い替えは，他学部の有する備品の有効活用も検討し，教育の質も踏まえて検討していく． 2. 予算計画の検討 ・ 高額物品の購入及び修理について，使用頻度をふまえて数年単位の計画を立てる必要がある．併せて，経常的な予算の範囲における物品購入の他にも，適宜法人へ新規予算申請のうえ購入が必要な物品に関しては，実施する必要がある．

委員会名	就職支援委員会	SDGs との 関連	
目 的	大阪医科薬科大学看護学部の学生の就職・進路の支援		
構成員	草野恵美子（委員長） 川北敬美 有田弥棋子 松枝加奈子 赤崎芙美 安富依子 藤原敏洋（看護学事務課） 堀江雅彦（看護学事務課）		
活動計画	1. 学生に対する就職情報提供 2. 学生の就職活動力強化のためのサポート 3. 教員の就職活動支援力向上のサポート 4. 進学，就職活動及び内定状況の把握 5. 卒業生と在校生の交流の機会を設け，情報提供の充実をはかる 6. 来校人事担当者との対応による情報収集 7. 卒業生の動向に関する情報収集のあり方に関する検討 8. HP の更新 9. その他		
活動概要	1. 学生に対する就職情報の提供として，就職活動スケジュール等の情報や看護職員募集情報，パンフレット等をキャリアサポートルーム内外に設置した．また，タイムリーな就職活動ができるよう必要時ポータルシステムで情報を発信した． 2. 就職活動力の強化支援として，就職ガイダンスを3回実施した．第1回目（入門編）は，2025年6月19日（木）に大学病院担当者，就職支援業者による講演を対面で開催した．3年生84名が参加した．第2回目は（実践編），2025年1月25日（土）に大学病院担当者，卒業生の看護師，保健師，助産師による講演，就職支援業者による履歴書・面接対策の講演を実施した．3年生75名が参加した．履歴書添削セミナーは，2026年2月24・25日にオンラインによる個別指導で開催した．参加者は46名であった．低学年ガイダンスは2025年12月10日（水）に就職支援業者による就職活動準備講座に加え，大阪府看護協会ナースセンターによるキャリアプラン講座を開催した．2年生81名が参加した． 3. 教員の就職活動支援力向上にむけて，第2回就職ガイダンスにおける履歴書・面接対策の講演内容を業者の了解を得て録画し，閲覧できるようにした．特に併願の場合の指導など教員の指導を統一するために，「看護学部生への就職支援に関する指導要領」を作成した． 4. 進学，就職活動及び内定状況の把握は就業調査票にて行い，2025年3月に卒業年次生の進路確定状況を学部教授会で報告した． 5. 卒業生と在校生の交流は，第2回就職ガイダンスで各職種の卒業生と質疑応答の時間を設けた． 6. 来校人事担当者の対応は委員が行い，次年度採用試験の日程や人材育成の方針等の情報収集を行い，来校者応接録を作成した．		

活動概要	7. 卒業生・施設アンケートは、対象者を卒後1年目とし、回答方式はオンラインで実施した。卒後1年目の回収率は25.0%、施設は27.6%であった。 8. HPには、就職ガイダンスの開催、今年度の就職先情報、卒業生・施設代表者調査の結果を更新した。
評価	1. 効果が上がっている事項 就職支援ガイダンス（低学年・3年生対象）の開催で学生の意識向上を図った。就職支援ガイダンスは、対面開催とし、学生の参加率は、3年生対象の第1回95.4%、第2回86.2%と2回共に参加率は8割を超えていた。また低学年も97.5%と9割以上であった。学生アンケートの結果より「とても参考になった」「参考になった」と回答した割合が約9割と高く、学生のニーズに沿っていると考えられる。今年度より第2回就職支援ガイダンスを12月に早めたが、学生の71%が「適切な時期」としており、次年度も12月の開催とする。また今年度より低学年ガイダンスで大阪府看護協会ナースセンターのキャリアプラン講座を開催した。学生アンケートから「参考になった」との意見が88%と高く好評であった。 履歴書相談会は、就職支援業者によるオンラインでの個別指導形式で実施した。終了後のアンケートでは100%の学生が「とても役立った」もしくは「役立った」と回答した。今後も継続の方向で検討したい。 就職活動及び就業調査票は、就職活動中の1名を除く90名からの提出があった。就職活動調査票の結果が更新されたことを学生に対し早くユニパにて周知し、早期の就職活動を促進した。 卒業生に関するアンケート調査は、今年度は卒後1年目のみに実施し、回収率は25.0%と昨年と同程度であった。回収率が低いため調査依頼を早め回収期間を長くをとることを検討する。卒業生の結果では、「看護実践や自己の成長のために、他者の支援を求めること」「チームの一員としての自分の役割を認識した行動をとること」が高評価であった。一方で自己評価が低かった項目は「後輩や学生の指導をすること」「緊急時の対応をすること」であった。今後のキャリアアップについて、最も多かった意見は認定看護師であり、看護管理者、専門看護師と続いた。大学院博士前期課程、後期課程の進学を考えているものもあり、本学の卒業生のキャリアアップに生かすことができるよう、進学に関する情報提供を在学中から行っていく必要がある。施設の回収率は、27.6%であった。回答は本学卒業生が1～2名程度在籍する病院に偏っており、大学病院からの回答を得ることが今後の課題である。結果より昨年度と比較して、「個別の健康課題に対する看護実践力」「健康課題の把握とその解決への取り組み」「多職種との連携・協働」「新しい知識や技術の創造」「情報通信技術（ICT）の活用力」は習得度が高くなっていた。今後の看護学部に期待することが多かった項目は「看護実践能力の向上」と「教育・研究能力の向上」であった。
将来に向けた発展方策・課題	1. ガイダンスは、引き続き内容を精選し時間短縮を図ることが重要であり、次年度は2回実施している3年生向けガイダンスでの大学病院・三島南病院からのお話は対象が重複するため、先方のご負担も考慮し、第1回で依頼する予

将来に向けた 発展方 策・課題	定である。卒業生からの講演や面接の模擬練習は継続していく。 2. 就職活動及び就業調査票は、99%の回収率であった。今後もポータルシステムでの提出を継続し、集計作業の簡便化、後輩への情報提供の迅速化をはかる。 3. 卒業生および就職先の施設に関するアンケート結果から、キャリアアップについての情報提供を検討することが考えられる。また大学病院をはじめ、回収率向上のための協力依頼を強化する。2026年度にはこれまでのアンケート調査内容を評価する。
--------------------------------	---

委員会名	国家試験対策委員会	SDGs との 関連	
目 的	大阪医科薬科大学看護学部学生の看護師・保健師・助産師の国家試験受験をサポートして合格率向上を目指す。		
構成員	安田稔人（委員長） 鈴木美佐 伊藤真理 柚木佐知子 中原洋子 赤崎英美 笹野奈菜 土井智生 堀江雅彦（看護学事務課）		
活動計画	1. 全員合格を目指した国家試験受験対策指導の継続 2. 2025 年度国家試験対策の模試及び対策講座の実施 3. 2026 年度国家試験対策の企画及び予算案の作成 4. 模試成績不良者の対策：講座への出席率を向上させる方策の検討，チューター教員との情報共有及びさらなる協働方法の検討，集中勉強会，直前勉強会の開催 5. 国家試験対策（模試および対策講座）の評価		
活動概要	1. 委員の役割と実施内容 1) 役割分担 委員の役割分担は以下の通りとし，実施方法の変更が生じた際などはその都度調整を行った。 (1) 議事次第作成・委員会進行・全体総括 (2) 議事録作成（准教授以下で輪番） (3) 対応の必要な学生に対する個別対応，チューターとの連携 (4) 東京アカデミー窓口 (5) 全学年へのオリエンテーションの実施 (6) 看護師国家試験対策 (7) 保健師国家試験対策 (8) 助産師国家試験対策 (9) 国試対策医学系講義（4 回生向け） (10) 郵便物・広告物・掲示物・図書 (11) 模試・対策講座 (12) 勉強会担当 (13) 自己採点会担当 (14) 学生への国試対策に関するアンケート (15) 来年度予算・必要物品購入 (16) 学生の窓口担当 (17) 医学書院 Web 担当，ウェブアンケートツール更新担当 (18) 現在利用していない国家試験業者対応 2. 国試対策オリエンテーションの実施 全学年に各 1 回，国試対策についてオリエンテーションを行った。オリエンテ		

活動概要	ーションでは、4 年間の全体のロードマップを作成して各学年に応じた意識付けができるように説明した。また、今年度のスケジュールや注意事項、医学書院 Web 等の活用できるツール等について説明した。 3. 模試と対策講座 4 年生では、例年同様に全国規模の模擬試験、対策講座を実施した。学生委員を中心に運営を行った。回数は、看護師国試対策講座 12 回（傾向分析会含む）、看護師国試模試 6 回、保健師国試対策講座 5 回（傾向分析会含む）、保健師国試模試 3 回、助産師国試対策講座 2 回、助産師国試模試 4 回であった。東京アカデミーの全国公開模試（3 回分）は、解説動画をウェブアンケートツールにアップし、復習できる機会を設けた。また、模試の結果が必修問題 80%未満もしくは、C、D 判定の成績低迷者には、チューターとの学修面談を推奨し、個別の学習課題に対応する体制を整えた。尚、各対策講座の開講方法は、大学または東京アカデミー大阪校での対面開催を中心とし、実習期間は授業支援ツールによるオンライン開催を併用した。 3 年生については全国規模の模試 2 回、1、2 年生については全国規模の模試を 1 回ずつ実施した。 模擬試験や対策講座への出席状況や模擬試験の成績を、適宜チューターや教員へのメール配信、学科会議での報告によって共有した。 1. 情報提供と勉強会の運営 1) 国試対策関連の情報提供 4 年生に予想問題集を配布し医学書院 Web の教材活用の案内、各学年の模擬試験や対策講座についてはウェブ会議ツールやウェブアンケートツールを通じて必要な情報提供を行った。 2) チューター教員との情報共有 模擬試験の成績が極端に低い学生や未提出者、欠席回数が多い学生については、チューター教員と情報共有を行い、必要に応じて面談や個別支援を依頼した。 2. 既卒生への対応 チューター教員と連携し、面接状況を共有した。学習状況やメンタル面の状況を確認しながら、必要時は委員会が支援できる体制を整えた。在学生対象の国家試験対策講座へは本人の希望に合わせて参加できるように調整し、事務が国家試験受験手続においても全面的に支援した。 3. 看護師国試対策勉強会 看護師国試対策については、4 回生の模擬試験の結果の推移に基づいて 11 月～12 月および 1 月に勉強会を実施した。 (1) 集中勉強会（11～12 月） 5～9 月実施の模擬試験の 4 回の必修模試すべて 80%未満、模試および対策講座全 8 回中 5 回以上の欠席、直近の必修模試 70%未満の基準により対象者選定した。11/27・28、12/1・2・4（3 日は模試）に実施し、出席率：58～76%（2024 年度：83～89%）であった。対象者は自己学習シートを勉強会事前に作成し、過
------	---

活動概要	去の模試結果を自己分析し苦手科目の克服を目指し学習目標や計画を立ててから勉強会に臨んだ。チューターにも自己学習シートは共有された。対象者には必要に応じて国家試験対策委員による面談と指導を行った。集中勉強会終了後は、自己学習シートに学習成果や目標の振り返りを記入し提出した。学習シートはチューターおよび国会試験対策委員で確認し、次年度への課題や改善点を委員会で検討した。 (2) 直前勉強会 (1 月) 12 月に実施した看護師国家試験模擬試験において、合格基準に達していない学生を中心として全受験者を対象に、計 6 日間「直前勉強会」として勉強会を設けた。本番を想定しながら勉強に取り組めるように、インフルエンザ等の感染対策に留意しつつ、対面で実施した。 学生の選抜条件は、①12 月の模擬試験（東京アカデミー第 3 回模試）において必修得点率が 80%未満、②一般＋状況設定問題得点率 70%未満の学生とした。また、同模擬試験の未受検者も対象とし、17 名を対象として選抜した。大学で勉強したいという学生の希望も考慮し、選抜者以外に勉強会への参加を希望する学生についても出席を認めることとした。 直前勉強会では、医学書院 Web 上で過去問題を中心に作成した公開テストを当日担当教員が提示し、学生は解答後、各自で解説を確認し、自習に取り組んだ。担当委員は教室に常駐し、学生がいつでも教員に質問できるようにした。直前勉強会の期間中に、医学系教員による解説講義を行った。 また、看護師国家試験に自信をもって臨むことができるよう、勉強会の最終日に追加模擬試験（なすもし）を実施した。参加対象者は原則、看護師・保健師国家試験対策直前勉強会選抜者とその他の希望者とし、80 名が受験した。 選抜者 17 名の出席率は 68.1（昨年度 87）%であった。希望者も含め 6 日間で延べ 173（昨年度 303）名が参加した。 4. 保健師国試対策 保健師の国試対策については対策講座をオンライン、模擬試験を対面で行った。保健師選択者対象の直前勉強会を 1 月の看護師国試対策勉強会と同時開催にて実施した。勉強会の必修対象は 12 月模擬試験結果 61%未満とし、勉強会参加者へは医学書院 Web 上で過去の保健師国家試験問題や予想問題の実施、質疑対応以外は自習を中心とした学習とした。その他公衆衛生看護学分野の協力を得て、個別に成績の伸びない学生に対する個別指導を行う等の対策を行った。3 年生の国試対策は、公衆衛生看護学分野にて 12 月模擬試験結果 60%未満をレポート課題として個別の学習指導を行った。 5. 助産師国試対策 模擬試験 4 回および対策セミナー 2 回を行った。模擬試験は学内で対面実施した。対策講座は 2 回ともオンラインであった。適宜学習状況の面談を行い、成績が伸びない学生に対しては、個別指導を行った。 6. 自己採点について
------	--

活動概要	看護師の結果については、東京アカデミーの「第 115 回看護師国家試験 解答速報&自己採点会」に参加し、これを用いて自己採点するよう周知した。保健師、助産師は解答例を示し、自己採点するよう周知した。保健師・助産師・看護師すべてについて 2/15～17 に各自が結果を委員会作成の入力フォームへ入力した。全員から自己採点結果の報告を受け、結果は、教授会、学科会議およびメールで教員に周知した。 7. 自己学習環境支援 東京アカデミーをはじめ各社からの国試対策勉強会に関する情報を整理し、学生がいつでも閲覧できる部屋の環境を整えた。 また、模擬試験の結果から対象学生を選出し、直前勉強会の実施と勉強会終了後に学生が集中して自己学習できる環境を提供し支援に努めた。2025 年度は、PA 会からの支援を受け、「看護師国家試験 予想問題 720」を配布した。「医学書院 看護師/保健師国家試験問題 Web サービス」は、各学年のオリエンテーションで使用方法を周知した。その結果、登録者は 282 名、総ログイン回数は 4078 回であり、学生が Web 上でも自己学習できる環境を整えた。 8. 学生へのアンケート 4 回生を対象として国家試験終了後にアンケートを行った。回収率は 56%であった。対策講座について、「非常に役に立った」「まあまあ役に立った」と回答した割合は 80.4%であったが、今後も対策講座継続した方がよいと回答した割合は 39.2%であった。対策講座の回数に関しては、78.4%が適当と回答した。成績が振るわない学生を対象に実施した勉強会について、直前勉強会については 75%が「非常に役立った」「まあまあ役に立った」と回答した。国家試験対策に関する情報収集について、54.9%が本委員会で実施したオリエンテーションが役立ったと回答した。
評価	1. 効果が上がっている事項 1) 看護師・保健師・助産師の各国家試験の合格率について、看護師 98.9%、保健師 100%、助産師 100%であった。具体的には、第 115 回看護師国家試験は 92 名（新卒 91 名、既卒 1 名）が受験し、受験生 91 名（新卒 90 名、既卒 1 名）が合格、不合格者は 1 名であった（全国平均：新卒 94.1%）。第 112 回保健師国家試験は受験生 28 名が全員合格した（全国平均：新卒 89.9%）。第 109 回助産師国家試験は受験生 5 名が全員合格した（全国平均：新卒 99.8%）。今年度は既卒生の 1 名が看護師国家試験を受験し、合格した。国家試験の合格率は看護師・保健師・助産師ともに高水準を維持できている。 2) Web を活用した情報提供、学習支援は有効であった。 3) 1 月の直前勉強会にて、今年度も昨年度の引き続き追加模試を実施し、学生からも好評であったとともに、直前の実力をアセスメントできる機会となった。 4) 本年度の集中勉強会は参加前に学生が自己学習シートを作成、提出し、チューター教員と委員による内容確認と学習シートを参考にした支援を行った。また勉強会後には自己学習シートに振り返りの記録を記載する機会を設けた。今年

評 価	度初めて試みた自己学習シートは、学生に学習目標の設定や学習方法を再考させる機会となり、一定の効果があつたと考える。 2. 改善すべき事項 1) 対策講座等への出席率が低いため、今後、学生の意見も聞きながら、開催方法などを再検討していく。国家試験対策委員以外の教員との出席率の共有も行う。 2) 対策講義を担当しているのが1社であるため、次年度は他社の対策講義も導入する。 3) 追加模試の結果、点数の低い学生に対しては、チューター教員と委員が連携して木目の細かい個別対応をしていく。
将来に向けた発展方策・課題	1. 成績の伸び悩む学生を対象にした集中・直前勉強会については、全て対面とし、短期間に集中的に行った。また集中・直前勉強会については、模試の結果や対策講座の出席状況だけでなく、普段の成績（GPA 等）も参考にし、対象者を選抜していく必要がある。また選出学生に対する学習方法自体の支援について、引き続き検討していく必要がある。また、国家試験本番に向けて個々の学生のメンタル面にも注意して、チューターと情報を共有していく。 2. 対策講座については出席率が本年度も低かったため、学生のニーズを勘案しつつ、学部教員全体で出席を促すとともに、今年度同様、出席率の低い学生は集中勉強会や直前勉強会の対象者としていく。対策講座は一社と契約の上、年間スケジュールを組んでいるが、次年度は他社による対策講座も試験的に導入する。その結果、教員や学生が授業内容や資料などを業者間で比較できるようにする。学生にとって勉強しやすい方法や媒体を少しでも増やすことができるように、必要に応じて Web 上でのオンライン講座等の利用なども検討していく。 3. 国家試験対策活動の保護者への周知 PA からの支援（対策講座や国家試験参考書の配布など）による成果をフィードバックする。 4. 委員と委員以外の教員との連携はある程度、進んだと思うが、将来的には予算を拡充して、国家試験対策の業者にも年間を通して、模試成績の分析や勉強方法の学生への周知、また直前勉強会へ参加し個別指導なども取り入れていく。

委員会名	看護学部年報編集委員会	SDGs との 関連	 
目 的	看護学部・看護学研究科の年報編集・印刷に関わる事項を調整する。		
構成員	寺口佐與子（委員長） 森瞳子 土井智生 倉橋理香 城山敏江		
活動計画	1. 2024 年度年報の取りまとめ・発行 2. 2024 年度年報の HP 上での公開 3. 2025 年度年報作成のための原稿依頼		
活動概要	1. 委員会の開催 2025 年度 は 7 回（内メール審議 2 回）の委員会を開催した。 2. 2024 年度年報の発行 1) 2024 年度の原稿の校正と編集 2) 2025 年 7 月 31 日に 2024 年度の看護学部年報を発行した。 3) 冊子 35 部を作成し関連部署に配布した。 4) 看護学部教員へはホームページ上で PDF を公開した。 3. 2025 年度年報作成依頼時に用語集を追加で作成し原稿を依頼した。		
評 価	1. 効果が上がっている事項 個人の研究活動について研究推進課のオンラインフォームを活用し、年度末の期日で年報に学会発表などを記載することがなくなり、提出者の事務負担が軽減した。またオンラインフォームおよび共有フォルダへの直接入力により編集作業が大幅に簡略化された。 2. 改善すべき事項 共有フォルダのファイルの削除や行方不明などの不具合が生じる可能性がある。締め切り期限まで適宜入力状況を管理する必要がある。		
将来に向けた発展方策・課題	1. 2025 年度年報内容が各種評価を受ける際の根拠資料として十分であるかを検討する。 2. 2025 年度年報の印刷部数および予算の見直し		

委員会名	国際交流委員会	SDGs との 関連	 
目 的	看護学教育・研究に寄与する国際交流活動を推進することを使命とする。		
構成員	飛田伊都子（委員長） 小林道太郎（副委員長） 谷水名美 山内彩香 勝山あづさ 野瀬珠美 土井智生 倉橋理香 山元紀子（事務）		
活動計画	1. 国際交流に関する基盤整備 2. 国際交流活動（International Day・Sabrina 先生来訪・台北医学大学訪問） 3. 学生の国際交流活動（受け入れ） 4. 学生の国際交流活動（派遣） 5. 学生の国際交流活動（web international module; CRISIIS） 6. 学生の国際交流活動としての SDGs 活動（NEXUS） 7. 学生の国際交流活動支援（国際交流活動説明/報告会・海外留学相談会・助成金） 8. 大学院生・教員の国際研究活動支援（International Writing Group） 9. 教員の国際研究活動支援（国際共同研究） 10. 国際交流活動の広報		
活動概要	1. 国際交流に関する基盤整備 1) 国際交流協定締結・更新 本年度は、オーストリアのザンクト・ペルテン応用科学大学との MOU（覚書）締結に向けた協議を行った。協議の結果、双方の大学が MOU 締結に前向きであることを確認し、先方大学において MOU のドラフトを作成することとなった。MOU が締結されれば、本学学生の派遣が可能となるとともに、本学のサマープログラムへ先方大学の学生（2 年生）を受け入れることが可能となる。 2) 看護学部海外短期留学生奨学金給付に関する事項 経済的な世界情勢を鑑み、大阪医科薬科大学看護学部海外短期留学奨学金の給付額について、アジア地域は 5 万円、欧米地域は 10 万円とする改正が、昨年度に教授会の議を経て承認された。これに加え、本年度は、ミネソタ州立大学における短期留学に要する費用（900 米ドル）について、本経費より支払うことが新たに承認された。当該費用は本来学生が負担するものであるが、円安等の経済状況を踏まえ、学生の経済的負担軽減を目的として、本学が学生に代わって支払うこととなった。 3) 2026 年度予算案の策定 他学部の国際交流委員会の事業計画を鑑みつつ、看護学部における研修生の受け入れによる国際交流、学部生の海外派遣及び学生の国際交流活動としての SDGs 活動の活性化を図るための予算案の作成を行った。 2. 国際交流活動 第 2 回 International Day を 7 月 4 日（金）に開催した。第 1 部はミネソタ州立大学看護学部の Sabrina Ehmke 先生による「Become a Dementia Friend!」		

活動概要	の講演が行われた。第2部はNEXUSの学生が主体となり、茶道や書道、けん玉などの日本文化体験ブースを設置したり、たこ焼き・お好み焼きを参加者と一緒に作ることで国際交流を深めることができた。アメリカ・台湾・ベルギーの海外研修生・本学学生・教職員・地域住民の方々など約50名が参加した。 本委員会より教員2名が3月の台北医学大学派遣プログラムに参加し、本学からの派遣学生とともに現地の教員・学生達と交流した。 3. 学生の国際交流活動（受け入れ） 2025年6月30日～7月11日に海外協定校の研修生（台北医学大学：TMU）3名、ミネソタ州立大学マンケート校：MSUM）1名、ベルギー トマス・モア応用科学大学2名）計6名と教員1名を迎え、看護学部 Summer Program 2025を実施した。ベルギー トマス・モア応用科学大学からの受け入れは今年度が初めてであった。看護教育や臨床の最新動向に関する講義のほか、大学病院や訪問看護ステーション、高齢者施設、地域活動などでの臨地見学を通して、看護実践の現場を体験した。研修生からは、「関西 BNCT 共同医療センターや化学療法ロボットなど高度な医療技術と専門性を発揮したチーム医療・看護に感銘を受けた」「在宅・地域ケアで対象者を尊重した支援の重要性を学んだ」などの声が寄せられた。また、京都ツアーや International Day での本学学生との交流を通じて、日本の文化、礼節、思いやりに触れたこと、病院スタッフを含めた教職員の献身的なサポートが大変印象的であったとの意見も多く見られた。参加者にとって、日本の医療・看護から学び、自国での看護活動に活かす貴重な機会となった。事前の大学間の情報共有、申請などに時間を要すことを鑑み、今年度中に各方面の調整を終えプログラムを調整した。 4. 学生の国際交流活動（派遣） 学生の海外派遣について、9月から11月に募集を行い、11月28日に国際交流センターと学生面接をして派遣学生を決定した。MSUMは、研修期間は2026年3月16日～3月27日で1年生4名・2年生1名の計5名を派遣することとなった。MSUMとは11月21日および1月14日にミーティングを実施した。また1月29日には米ミネソタ州の情勢に関する現地の安全説明がオンラインで行われた。派遣期間中に開催されるヘルスサミットでは、学生がポスター発表で参加する予定である。TMUは、研修期間2026年3月9日～3月20日で3年生1名を派遣する。同時期に教員2名を1週間ごとに1名ずつ派遣した。 ベルギーのトマス・モア応用科学大学への派遣については、2026年度の募集に向けて、派遣時期やプログラム内容を調整中である。 5. 学生の国際交流活動（web international module ; CRISIIS） MSUMが主幹で実施するオンライン国際交流学習プログラムに、今年度は1年生1名の応募があった。参加学生はMSUMの学生2名と計3名で1つのグループとなり、9月～12月までに4回のオンラインミーティングを行った。家族の危機について話し合い、抑うつについて日米比較をまとめた。「日本と海外での考えや価値観の違いや共通点について知ることができた」「良い経験ができた」
------	---

活動概要	等の感想があった。また、プログラム開始前・終了後には、海外の全参加校の担当教員らと、オンライン会議にて情報共有と振り返りを行った。 6. 学生の国際交流活動としての SDGs 活動 (NEXUS) 参加学生は、今年度新たに 6 名が加わり、1 年生 2 名、2 年生 10 名、3 年生 2 名、4 年生 2 名の計 16 名となった。今年度も International Day の企画・運営を担当し、茶道・書道・けん玉といった日本文化の体験に加え、屋外ではたこ焼きやお好み焼きを作る体験を通して、留学生や地域住民の方々と交流を深めた。 また、社会貢献・SDGs 推進室主催の「第 1 回 学生社会貢献・SDGs 活動ピッチ発表会」において、International Day の取り組みや、本学 Bulletin OMPU への投稿活動について発表を行った。現在は、大学病院看護部のご協力のもと、「大学病院における外国人患者様向けパンフレット」の作成を進めている。2026 年 3 月 6 日には関西大学主催の関西大学 SDGs パートナー交流会、および 3 月 7 日には本学第 9 回看護研究会にて発表を行った。 さらに、国際交流活動に関心を持つ卒業生が、卒業後も交流を継続し、経験やネットワークを活かしてキャリア発展や国際的視野を広げることを目的として、NEXT(Nursing Experience X Take over)を立ち上げた。2025 年度は卒業生 5 名が参加し、定期的にオンラインミーティングを開催した。2026 年 3 月 7 日には Home Coming Day を企画し、NEXUS メンバーおよび国際交流委員との交流を行った。卒業生が主体となって運営し、教員がサポートしている。次年度は活動内容をさらに具体化し、活発化を図る予定である。 7. 学生の国際交流活動支援 (国際交流活動説明/報告会・海外留学相談会・助成金) 全学年を対象に、2024 年度に海外留学やオンラインプログラム - CRISIIS, SDGs 活動-NEXUS に参加した学生 4 名による報告会を 5 月に開催した。事後のアンケート (回答数 50 名) の結果から、海外留学や NEXUS への関心が高いことがうかがえた。また、今年度は新たな試みとして、学生および保護者を対象にした海外留学説明会を 6 月と 9 月の計 2 回開催した。説明会では本学の国際交流についての紹介と個別相談を行い、参加者からは「具体的な相談の機会になり良かった」といった声が聞かれた。説明会は対面と遠隔の両形式で実施し、多数の学生から本学派遣プログラムへの応募があったことから、一定の広報効果があったと考えられる。今後もより多くの学生が海外留学を希望できるよう、海外留学に関心のある学生に向けて情報提供や支援を継続していく。また、学生が申請することができる助成金に関する情報についても、海外留学相談会にて発信した。今後はホームページ上でも情報発信できるよう検討を進めていく。 8. 大学院生・教員の国際研究活動支援 (International Writing Group) MSUM が主催する International Writing Group の情報発信と参加の支援を行った。2025 年度は 1 セメスター : 9 月 3 日～11 月 12 日、2 セメスター : 1 月 21 日～3 月 18 日で計 12 回開催された。MSUM を中心にニュージーランドやベトナムなど様々な国の看護学教育・研究者や大学院生が毎回オンライン上で看護
------	---

活動概要	研究に関するディスカッションを行った。本学からは本センター員以外の教員にも数回教員の参加も見られ、交流を図った。参加者からは、自らの研究のブラッシュアップにつながった、昨今の研究に関するトピックについて学ぶことができたといった感想が聞かれた。 9. 教員の国際研究活動支援（国際共同研究） 今年度は、国際共同論文“The CRIISIS COIL model : advancing equitable global allied health and nursing education”が雑誌 <i>Frontiers in Education</i> に公表された。本論文は、本学から委員長が本プロジェクトに参加し、著者として参画した国際共同研究の成果である。医療・看護教育の国際化が制度的・構造的制約により進みにくい現状を踏まえ、公平性、相互性、関係性を重視した CRIISIS COIL モデルを提案している。オンラインによる国際協働学習を通して、学生の文化的謙虚さやコミュニケーション能力、グローバルな健康課題への理解を促進する教育的有用性が示された。 10. 国際交流活動の広報 企画・広報課と協力し、看護学部の国際交流に関するホームページを活動内容ごとに分かりやすくなるよう全体を点検した。派遣や受け入れ、学生の活動や研究活動などを整理し、リワークの上公開した。
評価	1. 効果が上がっている事項 1) 国際交流基盤の拡充と地域・欧州への展開 EU 圏の大学（オーストリア、ベルギー）との協定締結・協議が進み、本学部の国際交流先が米国・台湾に加えて欧州へと拡大した。特にベルギーからの研修生受け入れは初の取り組みであり、学生・教職員双方にとって国際的視野を広げる機会となった。 2) International Day を核とした国際交流活動の定着 本学部主催の International Day は、海外研修生、本学学生、教職員、地域住民が参加する交流の場として定着しつつあり、学生主体（NEXUS）の企画・運営により実践的な国際交流と SDGs 活動を両立できている。 3) 学生の国際交流機会の多様化 米国・台湾・ベルギーからの研修生受け入れ、海外派遣、オンライン国際協働学習（CRIISIS）など、多様な形態の国際交流プログラムを実施できたことで、学生の興味・状況に応じた参加機会が拡大した。 4) 海外派遣支援体制と経済的支援の強化 奨学金給付額の増額や、円安を考慮した追加的な費用負担支援により、学生の経済的負担軽減が図られた。また、保護者も対象とした海外留学説明会の実施により、海外派遣に対する理解促進と応募者増加につながった。 5) 大学院生・教員の国際研究活動の活性化 International Writing Group への参加支援や国際共同研究の成果公表により、教員および大学院生の国際的な研究交流が進展した。オンライン環境を活用することで、継続的な情報共有やディスカッションが可能となってい

評 価	る。 6) 危機管理・運営体制の整備 海外派遣に際しては、国際交流センターと連携し、安全説明やサポート体制の整備が進んでおり、学生が安心して参加できる環境が整いつつある。 2. 改善すべき事項 1) 海外派遣希望者数の偏り 海外留学への関心は高まりつつあるものの、派遣先やプログラムによって応募者数に偏りが見られる。特に一部地域・プログラムについては、内容や学修成果の可視化を含めた更なる工夫が必要である。 2) 大学院生への支援体制の体系化 大学院生の国際交流・研究活動は個別的な支援に留まっており、学部の国際交流委員会と大学院委員会との連携を強化し、継続的・組織的な支援体制を構築する必要がある。 3) 国際交流活動の学内共有と広報の継続的改善 ホームページの整備は進んだものの、学内外に向けた国際交流の成果発信については、さらなる工夫と継続的な更新が求められる。
将来に向けた発展方策・課題	1. 国際交流活動の可視化と学部内への定着 EU 圏大学との協定締結を契機として、特別講演会や公開型セミナーの開催を検討し、国際交流の意義や成果を学部全体で共有する。International Day については学事予定に明確に位置づけ、全教職員・学生への周知を図ることで、学部全体の取り組みとして定着させる。 2. 学生の多様な国際交流機会の体系化 海外派遣、受け入れ、オンライン国際協働学習 (COIL/CRISIIS) など、複数の国際交流プログラムを体系的に整理し、学修成果を可視化することで、学生が自身の学修段階や関心に応じて選択できる環境を整備する。これにより、特定の派遣先やプログラムに応募が集中する状況の改善を図る。 3. 海外留学・国際交流への参加促進と支援体制の強化 学生および保護者を対象とした説明会や個別相談を継続的に実施し、海外留学に対する不安の軽減と理解促進を図る。あわせて、奨学金や助成金に関する情報発信を充実させ、経済的理由による参加の障壁を低減する。 4. 大学院生・教員を含めた国際研究活動の発展 学部の国際交流委員会と大学院委員会との連携を強化し、大学院生の国際交流および国際研究活動を組織的に支援する体制を構築する。International Writing Group や国際共同研究への参加を促進し、研究力の向上と国際的ネットワークの拡充につなげる。 5. 中長期的視点に立った国際展開体制の構築 これまでの国際交流および研究活動の実績を基盤として、学部全体で国際展開を推進できる体制を整備する。将来的には、外部資金の獲得や大型国際化事業への応募を視野に入れ、戦略的かつ持続可能な国際交流の発展を目指す。

委員会名	障がい学生支援委員会	SDGs との 関連	  
目 的	障がいのある学生が、講義・演習・実習において他の学生と等しく教育や受験の機会が得られるよう適切な支援（合理的配慮）を提供することを目的とする。		
構成員	池西悦子（委員長）鈴木久美（学部長）山岡由実（実習委員長）津田泰宏（校医） 近澤幸（教育センター委員）澤村律子（保健管理室） 堀江雅彦 藤原敏洋 南陽子（看護学事務課）		
活動計画	次の各号に掲げる事項について審議し、その実施にあたる。 1) 講義・演習・実習の課題に関すること 2) 支援体制に関すること 3) 施設・設備の整備に関すること 4) その他、障がいのある学生への支援に関して必要なこと		
活動概要	第1回（2025年7月16日）：申請のあった2年生1名の支援計画について審議し、前期定期試験時の配慮および後期実習に関する支援計画を検討し、承認した。 第2回（2026年3月3日～10日・メール審議）：2025年度に支援を行った学生からの意見について報告し、委員間で共有した。また、2025年度年報案について審議し、承認した。		
評 価	1. 効果が上がっている事項 1) 合理的配慮は、支援計画に基づき保健管理室および大学病院と連携して実施され、学生の満足度は概ね高かった。 2) 支援内容が合理的配慮の範囲を逸脱する事例は認められなかった。 2. 改善が求められる事項 精神面に課題を有する学生では、症状の特性により本人の認識や情報提供が十分でない場合があり、配慮が必要と考えられるケースであっても、学生本人が申請を希望しない状況がみられた。		
将来に向けた発展方 策・課題	1. 合理的配慮の検討と提供の継続 障がい者差別解消法、日本学生支援機構のガイドライン、障害学生支援拠点校等が示す情報を踏まえ、合理的配慮の内容について適切に検討し継続的に提供する。 2. 相談・支援体制の強化 学生が安心して相談できる体制を継続的かつ安定的に整備するためには、相談相手を柔軟に選択できる仕組みと、常時相談できる環境の双方を確保することが重要である。その実現に向け、合理的配慮に関する研修を修了した職員を学生相談の窓口として配置し、相談・支援体制を一層強化していくことが今後の課題である。		

委員会名	本学部看護学生を対象とする 研究審査会	SDGs との 関連	 
目 的	看護学部生に対し学部内及び学部外から研究協力の依頼があった場合に、基本的な事項、内容及び日程等から研究協力の受諾の可否を検討する。		
構成員	津田泰宏（委員長） 樋上容子 山埜ふみ恵		
活動計画	1. 研究協力依頼方法のホームページでの公開 2. 研究審査書類の不足・不備の確認、研究協力依頼申請者への再提出の依頼 3. 研究協力受諾の可否の審議 4. 研究協力依頼申請者への審議結果の通知 5. 学外からの承認された研究に係る資料の学生への配布		
活動概要	1. 研究審査会の開催 研究協力依頼申請は 10 件（本学の教員からのもの 2 件を含む）あった。その都度、研究審査会議を開催した（一部はメール審議した）。 2. 研究協力受諾に関する審議 「看護学部学生への研究協力の依頼に対する対応」（2019 年 5 月改訂版）に則り、研究協力の時期や分量などが学生にとって無理がないか、研究への協力が学生に還元されるものであるかの観点で審議した。研究協力は、原則として研究協力に同意した学生が個別に回答することとしていることから、学生に強制したり、単位認定に影響がでないか、また、学生が研究活動に対する理解を深められるよう配慮がなされているかの視点でも検討した。2 件の研究依頼は配布時期の条件付けが必要であったが、10 件全て研究協力受諾可とした。 3. 研究協力依頼方法および審議結果についての問い合わせ 学部内および学部外から研究協力依頼申請に関して不明な点や、申請者から審議結果に対する問い合わせはなかったが、1 件の研究に関して教授会にてアンケートの配布時期を検討すべき意見が出たため、配布時期を変更するように先方に依頼した。		
評 価	1. 効果が上がっている事項 研究協力依頼申請があった際に、速やかに研究審査会議を開催し、審議した。研究者にとっては、研究協力が得られるかどうかは研究遂行において重要であり、審議結果を速やかに通知することができた。 2. 改善すべき事項 様式 1 の添付がないために再提出となるケースを減らすためにホームページより周知を行った結果、その影響かどうかは不明であるが、今年度から研究依頼が急増した。できるだけ協力できるように配慮したが、学生の回答率が悪いことが判明し、負担になっていた可能性がある。一方で、様式 1 の添付がなく再提出となるケースは今年度もかなり見られた。		

将来に向けた発展方策・課題	1. 研究協力依頼申請があった場合の迅速な審議の実施. 2. 1 の審議結果の通知実施. 3. 学年により研究依頼数の偏りがみられており（1，2 年生 3 件，3 年生 6 件，4 年生 4 件），負担を減らすために各学年の研究依頼件数の上限を検討するべきかもしれないと考えられた.
----------------------	---

委員会名	将来構想ワーキンググループ	SDGs との 関連	 
目 的	看護学部および看護学研究科の長期的な展望を議論し、将来の方向性について議論する。		
構成員	草野恵美子（WG 委員長・大学院委員長） 鈴木久美（看護学部長） 池西悦子（学生生活支援センター長） 真継和子（教育センター長） 飛田伊都子（看護学実践研究センター長） 上久保純 倉田啓輔（看護学事務課）		
活動計画	1. 看護学部・看護学研究科の課題の抽出 2. 今年度の重点課題についての検討		
活動概要	会議は合計 9 回開催した。 1. 看護学部・看護学研究科の課題の抽出 第 1 回会議にて、今年度の重点課題について以下の通り抽出した。 1) 入試制度の改革および学生数確保と維持 2) 学部・研究科の特色あるカリキュラムについて ・看護学教育モデル・コア・カリキュラム（令和 6 年度改訂版）への対応 ・大学院 DNP コース設置 ・学士・修士一貫教育 3) 学部・大学院経営について ・収支の黒字化 2. 今年度の重点課題についての検討 1) 入試制度の改革および学生数確保と維持 2025 年度学部入試の総括を行うとともに、今後 18 歳人口が減少する中での学生数確保に向けた将来構想について意見交換を行った。 2) 学部・研究科の特色あるカリキュラムについて (1) 看護学教育モデル・コア・カリキュラム（令和 6 年度改訂版）への対応 カリキュラム委員会を事務局として設置されたカリキュラム WG により検討された看護学教育モデル・コア・カリキュラム（令和 6 年度改訂版）へ対応し、現行カリキュラムの課題を解決する新カリキュラムについての確認・検討を行った。 (2) 大学院 DNP コース設置検討 大学院委員会を事務局として設置されたカリキュラム WG により検討された大学院博士後期課程への DNP コース設置案についての確認・検討を行った。その際、現在の収容定員充足率と将来を見据えての博士後期課程の定員の検討も行った。 (3) 学士・修士一貫保健師教育の検討 保健師教育の大学院化における課題を解決し、より質の高い保健師を輩出する手段の 1 つとして、5 年一貫を含む学士・修士一貫保健師教育の将来構想につい		

活動概要	て検討した。カリキュラム委員会とも連携しつつ、大学院委員会を事務局とするWGを設置することとした。ニーズ調査などを実施し、検討を進めている。 3) 学部経営について (1) 収支の黒字化に向けた検討 看護学部・看護学研究科の収支を確認するとともに、黒字化に向けた方策について財務部を交えて意見交換をし、将来の方向性について検討した。1 学年の学生数の維持、少額でも経費削減につなげる努力、国庫補助金増額につながる採用（助手等）、入学検定料・実習費・学費減免制度などの見直し等の方策案が出された。
評価	1. 効果が上がっている事項 看護学部・看護学研究科の長期的な展望を見据えた会議体として、将来構想とそれに向けた課題の整理と重点課題に焦点化した取り組みを進めることにより、中長期的な方針に基づく検討を行うことができた。さらに関係会議体との連携により、看護学教育モデル・コア・カリキュラムへの対応や大学院 DNP コース設置等について検討を進めることができた。 教授会を含めた常設会議体等では検討機会が少ない学部経営についても、財務部を交えながら検討することができ、黒字化に向けた具体策を検討することができた。 2. 改善すべき事項 今年度重点課題となった、入学生確保や学部・大学院経営については引き続き課題が残るため、次年度も重点課題を明確化して検討を進める必要がある。関係委員会等と連携しながら、教職員全体で将来構想に向けた具体的な方策について検討し、共通理解のもと推進していく必要があると考えられる。
将来に向けた発展方策・課題	1. 重点課題の整理と看護学部全体での共有推進 2. 入学生確保の方策の検討 3. 魅力あるカリキュラム構築のための将来構想（学部新カリキュラム開始に向けた検討、学士・修士一貫教育等） 4. 学部・大学院経営の継続的検討

委員会名	カリキュラムワーキンググループ	SDGs との 関連	 
目 的	看護学教育モデル・コア・カリキュラム改定に向けての対応を検討し、本学部の特色のあるカリキュラムについて議論する。		
構成員	真継和子（WG 委員長） 草野恵美子 津田泰宏 寺口佐與子 二宮早苗 樋上容子 山岡由実 南口陽子 森瞳子 有田弥棋子 間中麻衣子 中原洋子 倉田啓輔 皆本敦（9 月～） 北川祐美（9 月まで）（看護学事務課）		
活動計画	1. 2027 年度新カリキュラム変更申請に向けた準備 1) ディプロマポリシー（DP）および教育目標の整理 2) 現行カリキュラムの課題の整理 3) 科目変更および配当年次の調整 4) 実習科目の配当年次および配置の調整 5) 卒業要件の見直し 2. 2019 年度・2022 年度カリキュラム改正に伴う実習評価 3. 看護学部全体での変更申請内容に関する共有推進 4. 看護技術到達度の整備 5. 客観的臨床能力試験（OSCE）の実施についての検討 6. 模擬患者育成についての検討		
活動概要	会議は合計 10 回，うち 1 回は全教員対象の自由参加型会議を開催した。 1. 2027 年度新カリキュラム変更申請に向けた準備 1) ディプロマポリシー（DP）および教育目標の整理 第 1 回会議において、「看護学教育モデル・コア・カリキュラム改定連絡統制委員会」の配布資料を確認し，対応に向けた意見交換を行った．現行の DP と教育目標に基づき，モデル・コア・カリキュラムの第 1 層である「看護師に必要な資質・能力」の 11 要素を包含した DP と教育目標への改訂を行った．本ワーキング会議（全教員対象の自由参加型会議含む），学科会議，および教授会にて検討を重ね改訂案の作成に至った． 2) 現行カリキュラムの課題の整理 カリキュラム変更に向け，在学生・卒業生・就職先へのアンケートと 2024 年度看護学部教員 FD 研修会の結果をふまえ，現行カリキュラムを自己評価し，課題を整理した．課題として，低学年からの探求力・課題解決力の育成，臨床判断能力の強化，生成 AI を含む情報・科学技術の活用能力の育成，一定レベル以上の基本的知識・技術・態度の育成強化，学習内容と必要時間数の適正化，配当年次の検討などが挙げられた． 3) 科目変更および配当年次の調整 前述した課題に対応するため，生成 AI を含めた IT 活用に関する「医療と情報」，探求力をつけるための「早期ゼミ」，臨地実習前の OSCE の実施を持ち込んだ「臨床看護演習」などを新設した．また，科目名称の変更，時間数の削減，		

活動概要	選択科目の必修化，そして，学習内容の重複を避けるため 4 科目の廃止を決定し，2026 年 5 月末の申請に向けて準備を進めた． 4) 実習科目の配当年次および配置の調整 現行カリキュラムにおいて 3 年生配当科目である「老年看護学実習」(3 単位)」を，新カリキュラムにおいては「老年看護学実習Ⅰ」(1 単位，2 年生配当)と「老年看護学実習Ⅱ」(2 単位，3 年生配当)に分け，高齢者の理解を深める実習内容とした．4 年生では，新設科目追加を伴う単位数増加に対応し，既存科目を精選し内容の重複を解消し単位数を調整するために「統合看護学実習」を閉講とし，「看護実践発展実習」を選択必修科目から必修科目へ変更した．これらを踏まえ，新カリキュラム申請のための 2027～2030 年度の 4 年分の実習計画案を立案した． 5) 卒業要件の見直し 卒業所要単位数を現行の 127 単位以上から 124 単位以上に変更した．保健師・助産師・看護師学校養成所指定規則に即した必修内容・時間数は対比表のとおり，現行水準を確保していることを確認した．適用は 2027 年度入学生からとし，在学生には経過措置を設けることとする．これに伴い，学則改正の手続きを進めた． 2. 2019 年度・2022 年度カリキュラム改正に伴う実習評価 2022 年の看護学分野別評価において「看護実践と理論の統合」に対する意見があったことを鑑み，この科目の必要性及び各実習科目のなかでの学修の可能性を検討し，2027 年の新カリキュラム改正では科目を廃止し，各実習科目の中にも含めることとした．また「老年看護学実習」(3 単位・3 年生)は，「老年看護学実習Ⅰ」(1 単位・2 年生)と「老年看護学実習Ⅱ」(2 単位・3 年生)とし，高齢者理解とその看護を深める内容とすることとした． 3. 看護学部全体での変更申請内容に関する共有推進 2025 年 9 月，10 月，12 月，2026 年 1 月，2 月の学科会議にて，2025 年 11 月，2026 年 1 月，2 月に教授会にて，進捗状況および変更点について説明し，コメント提出フォルダを作成するなどして意見を募った．また，2026 年 1 月には全教員をオブザーバーとして本ワーキンググループでの会議への参加を促し，2 名の参加があった． 4. 看護技術到達度の整備 看護技術到達度について，過去の実施内容を確認したところ，現在は，学生が実習ポートフォリオの「看護基本技術チェックリスト」40 項目を，学習管理システムの入力フォーマットを用いて学年ごとに入力している．しかし，活用目的や活用方法が分かりづらく，ユニパでは到達度が視覚的に分かりづらいという理由から，入力率の低下などの課題が挙げられた．そこで，厚生労働省が提案している「看護師教育の技術項目と卒業時の到達度 71 項目」を参考に，実習だけでなく演習も含めた「看護技術到達度チェックリスト」の作成を行った．チェックリストの目的，評価方法，各分野の演習・実習での技術項目の確認を行った．分野で重複している技術項目に関しては，各分野の特徴を踏まえて行うことを確認
------	--

活動概要	した。「経鼻胃チューブ挿入」の技術項目は、臨床でも看護師が実施しないこと、「放射線の被ばく防止策の実施」「人体へのリスクの大きい薬剤のばく露予防策の実施」は、演習での実施は困難なため、上記 3 項目については演習科目から削除することで合意した。最終的に、【精神症状のアセスメント】を追加した全 72 項目の看護技術到達度のチェックリストを完成させ、実習先への提示方法や学生への周知方法について、今後検討を行う。 5. 客観的臨床能力試験（OSCE）の実施についての検討 客観的臨床能力試験（OSCE）の導入に向けて、実施時期、授業内での実施とするか否か、実施方法や内容、運営上の課題等について検討を重ねた。その結果、分野別実習前の看護実践能力を可視化し、臨地実習前に学生が自己の課題を明確にして実習に臨むことを考慮して、3 年次前期の必修科目として新規科目を設置することで合意した。新カリキュラムにおいて「臨床看護演習」を設置し、演習と OSCE 実施により、科学的根拠に基づいた判断とケアを行うための思考力を強化し、実習に向けた技術と態度を補完および分野別実習に向けた自己の課題の明確化を図ることを目的とすることとした。検討に際し、委員による外部機関の OSCE セミナー、札幌市立大学の OSCE 視察や、他大学の資料収集等を行い、参考とした。 6. 模擬患者育成について 模擬患者育成の必要度、また、どのレベルの模擬患者を求めるかについて、他大学での模擬患者養成プログラムも参考にしながら意見交換を行った。OSCE の課題により模擬患者に求める内容が異なるため、OSCE の内容検討と並行して検討していくこととなった。現存する模擬患者会からの派遣についても、予算や内容を含めた実施可能性を検討した。
評価	1. 効果が上がっている事項 ・現行カリキュラムの強みと課題を共有し、教員間で共通認識が形成されたことで、新カリキュラムの体系化がより円滑に進める基盤が整いつつある。 ・看護技術到達度について全分野で整理し、卒業までに修得すべき技術項目と到達レベルを教員間で共有できたことで、教育内容の一貫性の確保につながった。今後は、実際に演習や実習を通して運用し、到達度の評価と検証を進めていく。 2. 改善すべき事項 ・2027 年度入学生より適用する新カリキュラムが看護学教育モデル・コア・カリキュラム（令和 6 年度改訂版）の趣旨を反映するよう、内容を理解し具体的な教育内容及び教育方法に落とし込んでいくことが必要である。看護学教育センター、カリキュラム委員会をはじめ関連する委員会との連携をとりながら進めていく。 ・看護技術到達度の確認について、実施の目的や活用方法が不明確で、入力率低下や到達度の可視化が十分にできていない。また、新たな 72 項目について実習施設との共有をするかも検討し、学生の看護実践力につなげる必要がある。

将来に向けた発展方策・課題	1. 新カリキュラム変更申請の準備と運用に向けた準備 2. 看護技術到達度評価の目的・活用方法の明確化と可視化 3. 客観的臨床能力試験（OSCE）の実施についての検討
----------------------	--

4) 教育活動

(1) 授業科目一覧

2021年度入学生用

区分	授業科目	助☆ 保◎ 養*	講義 演習 実習	単 位 数	開講期 (必修● 選択○ 自由◇)								卒業 要件 単 位 数	
					第1学年		第2学年		第3学年		第4学年			
					前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期		
基礎科目	人間理解	心理学		講義	2	●							20単位 以上 ○● 選択科目7単位以上 必修科目13単位 (人間理解または異文化理解から5単位以上、 社会理解から2単位以上含まれていること)	
		生物学		講義	2	○								
		化学		講義	2	○								
		物理学		講義	1		○							
		くらしの中の倫理		講義	1		○							
		大阪を学ぶ		講義	1		○							
		哲学		講義	1		○							
		くらしと文学		講義	2	○								
		教育学		講義	2	○								
		体育Ⅰ	*	演習	1	○								
		体育Ⅱ	*	演習	1		○							
		人間関係論		講義	1	●								
	社会理解	キャリアマネジメント		講義	1	●								
		健康科学概論		講義	1	●								
		情報リテラシー		演習	1	●								
		データ処理演習	*	演習	1				○					
		統計学		講義	2		●							
		日本国憲法と法律	*	講義	2	○								
		くらしと社会・環境		講義	2	○								
		くらしと経済		講義	2	○								
	異文化理解	くらしと安全・危機管理		講義	2	○								
		英語Ⅰ（英語を聞く）		講義	1	●								
		英語Ⅱ（英語で話す）		講義	1		●							
		英語Ⅲ（英語で読む・書く）		講義	1			●						
		英語Ⅳ（英語を豊かに）		講義	1				●					
		医療英語		演習	1					●				
		国際言語文化		講義	2	○								
インタラクティブ・イングリッシュⅠ			講義	1	◇		◇		◇		◇			
医工薬連環科学遠隔講座		講義	1		◇		◇		◇		◇			
医工薬連環科学遠隔講座		講義	—	◇										
基礎科目必修単位数					13	7	3	1	1	1	0	0	0	
専門基礎科目	人体の構造と機能	からだの仕組みと働きⅠ（基礎）		講義	2	●							28単位 以上 ○● 選択科目3単位以上 必修科目25単位	
		からだの仕組みと働きⅡ（発展）		講義	2		●							
		感染と免疫		講義	1	●								
		からだと栄養		講義	2		●							
		こころの仕組みと働き		講義	1		●							
		フィジカルイグザミネーション		演習	1			●						
		リプロダクションと看護	☆	演習	1			○						
		セクシュアリティと看護	☆	講義	1			○						
	病気と治療	からだとくすりの働き		講義	2			●						
		病気の成り立ち		講義	2			●						
		病気の診断・治療Ⅰ		講義	2			●						
		病気の診断・治療Ⅱ		講義	2				●					
食生活論			講義	1					○					

区分		授業科目	助☆ 保◎ 養*	講義 演習 実習	単 位 数	開講期（必修● 選択○ 自由◇）								卒業要件 単 位 数
						第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		
						前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	
専門基礎科目	保健と医療	医学概論		講義	1		○							28単位以上 ○●必修科目25単位 ○選択科目3単位以上 ↓
		医療人マインド (2021年度～多職種連携1－医療人マインド)		講義	1	●								
		専門職連携医療論 (2021年度～多職種連携2－医療と専門職)		講義	1				●					
		保健医療福祉概論		講義	2		●							
		公衆衛生学・疫学		講義	2			●						
		ヘルスプロモーション論		講義	1					○				
		医療倫理学		講義	1				●					
		リスクマネジメント		講義	1					●				
	異文化看護入門		演習	1						○				
専門基礎科目必修単位数					25	4	7	9	4	1	0	0	0	
専門科目	看護の基盤	看護学概論		講義	2	●								79単位以上 ○●必修科目74単位 ○選択科目5単位以上 (看護師国家試験受験資格のみ希望の場合は、 看護実践発展科目から2単位以上含まれていること)
		日常生活援助技術		演習	3		●							
		基礎看護学実習Ⅰ		実習	1		●							
		看護アセスメント		演習	1			●						
		治療過程に伴う援助技術		演習	2			●						
		基礎看護学実習Ⅱ		実習	2			●						
		看護管理		講義	1							●		
		看護教育		講義	1							●		
	療養生活支援	成人看護学概論		講義	2		●							
		急性期成人看護学援助論		演習	1				●					
		急性期成人看護学援助方法		演習	1					●				
		急性期成人看護学実習		実習	3						●			
		慢性期成人看護学援助論		演習	1			●						
		慢性期成人看護学援助方法		演習	1				●					
		慢性期成人看護学実習		実習	3						●			
		精神看護学概論		講義	2			●						
		精神看護学援助論		演習	1				●					
		精神看護学援助方法		演習	1					●				
		精神看護学実習		実習	2						●			
		老年看護学概論		講義	2			●						
		老年看護学援助論		演習	1				●					
		老年看護学援助方法		演習	1					●				
		老年看護学実習Ⅰ		実習	1				●					
		老年看護学実習Ⅱ		実習	3						●			
	地域家族支援	母性看護学概論		講義	2		●							
		母性看護学援助論		演習	1				●					
		母性看護学援助方法		演習	1					●				
		母性看護学実習		実習	2						●			
		小児看護学概論		講義	2			●						
		小児看護学援助論		演習	1				●					
		小児看護学援助方法		演習	1					●				
		小児看護学実習		実習	2						●			
		在宅看護学概論		講義	2			●						
		在宅看護学援助論		演習	1				●					
在宅看護学援助方法			演習	1					●					
在宅看護学実習			実習	2						●				
公衆衛生看護学概論			講義	2			●							
公衆衛生看護学活動論			講義	2				●						

区分	授業科目		助☆ 保◎ 養*	講義 演習 実習	単 位 数	開講期（必修● 選択○ 自由◇）								卒業要件 単位数	
						第1学年		第2学年		第3学年		第4学年			
						前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期		
専門科目	看護実践発展科目	地域救命救急		講義	1					○				79単位以上 ○選択科目5単位以上 ●必修科目74単位 （看護師国家試験受験資格のみ希望の場合は、 看護実践発展科目から2単位以上含まれていること） ↓	
		看護と生体診断法		演習	1							○			
		医療カウンセリング		演習	1								○		
		看護実践発展総合演習		演習	1								○		
		看護実践発展実習		実習	2								○		
	保健師科目	公衆衛生看護学活動方法	◎	講義	1						○				
		公衆衛生看護学管理論	◎	講義	2						○				
		公衆衛生看護学演習	◎	演習	1								◇		
		公衆衛生看護学実習Ⅰ	◎	実習	1								○		
		公衆衛生看護学実習Ⅱ	◎	実習	4										◇
	助産師科目	助産学概論	☆	講義	2				○						
		助産診断・技術学Ⅰ	☆	演習	1					○					
		助産診断・技術学Ⅱ	☆	演習	3								◇		
		助産管理	☆	講義	1								◇		
		助産学実習	☆	実習	8										◇
	統合	がん看護学総論		講義	1				●						
		家族看護学		講義	1					●					
		チーム医療論		講義	1						●				
		災害看護論		講義	1						○				
		遺伝とカウンセリング	☆	講義	1								○		
		看護実践と理論の統合		演習	3							●			
		看護研究法		講義	1								●		
		原著講読		演習	1										●
		卒業演習		演習	3										●
		統合看護学実習		実習	2										●
専門科目必修単位数					74	2	8	14	13	8	20	4	5		
必修単位数合計					112	13	18	24	18	10	20	4	5		
履修登録できる単位数の上限					164	48		47		39		30			
☆助産師国家試験受験資格必修科目					◎保健師国家試験受験資格必修科目					*養護教諭二種免許申請希望の場合の必修科目					

区分	授業科目	助☆ 保◎ 養*	講義 演習 実習	単 位 数	開講期（必修● 選択○ 自由◇）								卒業要件 単 位 数 127単位以上		
					第1学年		第2学年		第3学年		第4学年				
					前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期			
基礎科目	基盤科目		講義	1	●								20単位以上	●必修科目13単位 ○選択科目7単位以上 （人間と科学から2単位以上、人間と社会から5単位以上含まれていること）	
			演習	1		●									
			講義	1	●										
			講義	1	●										
			講義	1	●										
			講義	1	●										
			講義	2		●									
	人間と科学		講義	1	○										
			講義	1	○										
			講義	1		○									
			* 演習	1				○							
			* 演習	1	○										
			* 演習	1		○									
			講義	2	○		○		○		○				
	人間と社会		講義	1		○									
			講義	2	○										
			講義	2	○										
			講義	2	○										
			* 講義	2	○										
			講義	2	○										
			講義	1		○									
			講義	2	○										
			講義	1		○									
	人間と言語		講義	1	●										
			講義	1		●									
			講義	1			●								
			講義	1				●							
			演習	1					●						
			講義	1	◇		◇		◇		◇				
			講義	1		◇		◇		◇		◇			
基礎科目必修単位数				13	6	4	1	1	1	0	0	0			
専門基礎科目	人間と健康		講義	2	●								26単位以上	●必修科目23単位 ○選択科目3単位以上	
			講義	2		●									
			講義	1	●										
			講義	2		●									
			講義	1		●									
			講義	1	○										
			講義	2		●									
			講義	2			●								
			講義	2				●							
			講義	2					●						
		☆	演習	1			○								
		☆	講義	1			○								
			講義	1					○						

区分		授業科目	助☆ 保◎ 養*	講義 演習 実習	単 位 数	開講期（必修● 選択○ 自由◇）								卒業要件 単 位 数 127単位 以上
						第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		
						前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	
専門基礎科目	健康と環境	医学概論		講義	1		○							26単位 以上 ○●必修科目23単位 選択科目3単位以上 ↓
		多職種連携論1－医療人マインド		講義	1	●								
		多職種連携論2－医療と専門職		講義	1			●						
		保健医療福祉概論		講義	2		●							
		公衆衛生学		講義	2	●								
		疫学	◎	講義	1			○						
		ヘルスプロモーション論	◎	講義	1					○				
		リスクマネジメント		講義	1					●				
専門基礎科目必修単位数					23	6	9	4	3	1	0	0	0	
専門 科目	看護の基盤	看護学概論		講義	2	●								81単位 以上 ○●必修科目75単位 選択科目6単位以上 （看護師国家試験受験資格のみ希望の場合は、 看護実践発展科目から看護実践発展実習を含む3単位以上含まれていること）
		日常生活援助技術		演習	3		●							
		基礎看護学実習Ⅰ		実習	1		●							
		フィジカルアセスメント		演習	1			●						
		看護展開論		演習	1			●						
		治療過程に伴う援助技術		演習	2			●						
		基礎看護学実習Ⅱ		実習	2			●						
		看護管理		講義	1							●		
		看護教育		講義	1							●		
	療養生活支援看護	成人看護学概論		講義	2		●							
		急性期成人看護学援助論		演習	1			●						
		急性期成人看護学援助方法		演習	1				●					
		急性期成人看護学実習		実習	3					●				
		慢性期成人看護学援助論		演習	1			●						
		慢性期成人看護学援助方法		演習	1			●						
		慢性期成人看護学実習		実習	3					●				
		精神看護学概論		講義	2			●						
		精神看護学援助論		演習	1			●						
		精神看護学援助方法		演習	1				●					
		精神看護学実習		実習	2					●				
		老年看護学概論		講義	2			●						
		老年看護学援助論		演習	1			●						
		老年看護学援助方法		演習	1				●					
		老年看護学実習		実習	3					●				
	地域家族支援看護	母性看護学概論		講義	2		●							
		母性看護学援助論		演習	1			●						
		母性看護学援助方法		演習	1				●					
		母性看護学実習		実習	2					●				
		小児看護学概論		講義	2			●						
		小児看護学援助論		演習	1			●						
		小児看護学援助方法		演習	1				●					
		小児看護学実習		実習	2					●				
		地域・在宅看護論		講義	1	●								
		地域・在宅ケア実習		実習	1		●							
		在宅看護学概論		講義	2			●						

区分	授業科目	助 ☆ 保 ◎ 養 *	講義 演習 実習	単 位 数	開講期（必修● 選択○ 自由◇）								卒業要件 単 位 数			
					第1学年		第2学年		第3学年		第4学年					
					前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
専 門 科 目	地域家族 支援看護	在宅看護学援助論		演習	1				●					81単位以上 ○選択科目6単位以上 ●必修科目75単位 （看護師国家試験受験資格のみ希望の場合は、 看護実践発展科目から看護実践発展実習を含む3単位以上含まれていること） ↓		
		在宅看護学援助方法		演習	1					●						
		在宅看護学実習		実習	2						●					
		公衆衛生看護学概論		講義	2			●								
		公衆衛生看護学活動論Ⅰ		講義	1				●							
	看護実践 発展科目	看護と生体診断法		演習	1								○			
		医療カウンセリング		演習	1								○			
		看護実践発展総合演習		演習	1							○				
		看護実践発展実習		実習	2							○				
	保健師科目	公衆衛生看護学活動論Ⅱ	◎、☆	講義	1					○						
		公衆衛生看護学活動方法	◎	講義	1						○					
		公衆衛生看護学管理論	◎	講義	2						○					
		公衆衛生看護学演習	◎	演習	2								◇			
		公衆衛生看護学実習Ⅰ	◎	実習	1								○			
		公衆衛生看護学実習Ⅱ	◎	実習	4										◇	
	助産師科目	助産学概論	☆	講義	2					○						
		助産診断・技術学Ⅰ	☆	演習	1						○					
		助産診断・技術学Ⅱ	☆	演習	3								◇			
		助産管理	☆	講義	1								◇			
		助産学実習	☆	実習	8										◇	
	統合	がん看護学総論		講義	1					●						
		家族看護学		講義	1						●					
		災害看護論	◎、☆	講義	1						○					
		遺伝とカウンセリング	☆	講義	1								○			
		多職種連携論3－医療倫理		講義	1						●					
		多職種連携論4－医療安全		講義	1								●			
		異文化看護入門		演習	1						○					
		国際交流演習		演習	2			○		○		○			○	
		原著講読		演習	1								○			
		看護実践と理論の統合		演習	3							●				
		看護研究法		講義	1							●				
		卒業演習		演習	3										●	
		統合看護学実習		実習	2										●	
専門科目必修単位数				75	3	9	14	12	8	21	3	5				
必修単位数合計				111	15	22	19	16	10	21	3	5				
履修登録できる単位数の上限				177	55		46		41		35					
☆助産師国家試験受験資格必修科目				◎保健師国家試験受験資格必修科目				*養護教諭二種免許申請希望の場合の必修科目								

(2) 各分野の教育活動

分野名	基盤看護学
担当教員	二宮早苗 川北敬美 赤崎英美 日高朋美 野口美穂
担当科目	看護学概論，日常生活援助技術，治療過程に伴う援助技術，看護展開論，フィジカルアセスメント，看護管理，基礎看護学実習Ⅰ，基礎看護学実習Ⅱ，卒業演習，統合看護学実習
現状の説明	「看護学概論」では，看護とは何かを探究することを目的に，看護の基本概念である「人間」「環境」「健康」「看護」の理解を深める授業を行った。 「日常生活援助技術」では，基礎看護学実習Ⅰの学びと連動するように授業内容を調整した。「治療過程に伴う援助技術」では「看護展開論」の進行に合わせた演習項目になるように調整した。 「看護展開論」では，腰椎圧迫骨折の事例を用いて，“情報収集”から“看護の実施・評価”まで学習できるように授業設計した。また早期に学生のアセスメントの理解を確認できるように第8回の時点で学生の記録を確認した。 「フィジカルアセスメント」の演習では，歩行の観察項目・所見を追加した。 「看護管理」の筆記試験の問題内容を大幅に見直したところ，高得点者と低得点者に2分された。再試験者にはレポート課題を課し，全員合格とした。 「基礎看護学実習Ⅰ」では，病棟と外来の実習を2回ずつ交互にすることで，すべての学生が早期に双方の理解を深めることができるようにした。 「基礎看護学実習Ⅱ」では，1～2月の2週間に実施した。81名の学生が前半と後半に分かれて実習を行い，受持ち患者の看護展開を行った。 「統合看護学実習」では，10名の学生が実習前にOSCE受検後，第二東和会病院で退院支援を必要とする複数名の患者の看護展開を行う実習を行った。 「卒業演習」では，各教員が2～3名の学生を担当し，文献検討や調査，実験，インタビュー等を通して深めた知見に関して卒業論文を作成し発表を行った。
点検評価	1. 効果が上がっている事項 「統合看護学実習」のOSCEを実習前に実施することで，学生の現時点での到達度の確認と，最後の実習に向けた課題の抽出につながった。複数受持ちを導入したことで，患者の個別性の理解と優先順位を考慮した看護実践につながった。 「看護展開論」の記録確認を早期に行ったことで，学生のアセスメントに関する理解の状況を確認でき，アセスメント力の向上につながった。 「フィジカルアセスメント」のシミュレーション演習は，測定・観察技術に加え，患者の状態をアセスメントする力の育成に寄与していた。 2. 改善すべき事項 看護技術項目の分野間の調整に従い，整容や注射以外の与薬方法に関する技術項目の演習を取り入れていく必要がある。
将来に向けた発展方策・課題	モデル・コア・カリキュラムの改訂に合わせ，看護技術の技術試験を「客観的臨床能力試験（OSCE）」に準じた試験となるように，試験方法や評価項目の見直しをしていく。

分野名	看護教育学
担当教員	池西悦子
担当科目	キャリアマネジメント, リスクマネジメント, 看護教育, 統合看護学実習, 卒業演習
現状の説明	「キャリアマネジメント」では、働くことの意味やキャリア理論, ダイバーシティとインクルージョン, 看護職のキャリア形成について, 講義・ワーク・講演を通して学び, 社会人基礎力と専門性の発達を踏まえて, 目指すキャリアと学生生活を結びつけて考える力を育成した. 「リスクマネジメント」では, 医療安全の基本, 医療現場の安全対策, 実習で起こりやすい医療事故やインシデント報告, KYT や個人特性の評価など, 実習前に必要な知識を扱い, 学生のリスク感性向上を図った. 「看護教育」では, 看護学教育の基礎, 学習理論, 教育方法・評価について教授し, 実習経験の省察を通して自己の強みと課題を明確化し, 行動計画を立案した. 「統合看護学実習」では, 5名の学生を受け入れ, 兵庫県立尼崎総合医療センターで1週間, 看護の専門性理解を深める実習を行い, その後, 大阪医科薬科大学病院で1週間, 看護師個人・チーム・病棟のマネジメントを学ぶ実習を実施した. 「卒業演習」では, 2名の学生を担当し, 文献検討と学生対象の調査を行い, 得られた知見を基に卒業論文の作成と発表へと導いた.
点検評価	1. 効果が上がっている事項 ミニレポートへのフィードバックは, 学生が多様な意見に触れる機会となり, 視野の拡大につながったと評価された. 「キャリアマネジメント」では, 企業のインクルージョンを調べて発表する授業を追加したことで, 現代社会の課題を意識した学びが深まった. 看護職の講演は, 学習とキャリアのつながりを実感し, 学修意欲の向上に寄与した. 「看護教育」では, これまでの教育や実習経験の省察が, 学生の自己理解と課題の明確化に効果的であった. 「統合看護学実習」にマネジメント実習を取り入れたことで, 時間管理や報連相の重要性, チームの一員としての自己課題への気づきが得られた. また, 他分野教員との複数体制による授業展開により, グループワークでの学生支援が深まり, 授業内容の充実につながった. 2. 改善すべき事項 社会の変化や新たな知見に応じて, 授業内容と方法を継続的に更新していく.
将来に向けた発展方策・課題	実践看護師の授業参画や, 臨床現場の医療安全の実際を教材とした授業は, 学生の学習意欲向上に寄与している. キャリアマネジメントの手法の一つとしてポートフォリオの作成・活用を体験させ, 正課外ポートフォリオへの入力につなげていく. 看護教育では, 生涯学習力の基盤となる自己主導型学習に関する内容を, 今後さらに充実させていく.

分野名	人文社会学
担当教員	小林道太郎
担当科目	アカデミックスキル，情報リテラシー・データサイエンス，倫理学，哲学，異文化論，多職種連携論 3 医療倫理，原著講読，卒業演習，インタラクティブ・イングリッシュ I・II
現状の説明	アカデミックスキルは前年度に引き続きレポートの書き方とグループワーク・発表を中心とした授業と課題のチェック・コメント等を行った。情報リテラシー・データサイエンスは，昨年度の結果を踏まえてグループワークと発表の時間等を調整した。異文化論は前年度まで行っていた JICA セミナーができなかったため，最終回は異文化の具体的な紹介を行う動画の視聴とした。倫理学，哲学は概ね前年を引き継いだ，必要箇所について内容をアップデートした。原著講読は今年度から選択科目（ただし旧カリキュラム学生は必修）となり，少人数での授業となった。多職種連携論 3 医療倫理は 2 年目であり，前半 4 回は講義，後半 4 回分は阿武山キャンパスで 3 学部合同ディスカッションと発表を行った。卒業演習は 3 名の学生を担当し，発表会は実践支援看護学領域合同で行った。インタラクティブ・イングリッシュは他学部の担当教員および事務課と共同して授業準備・運営を行った。ネイティブ講師による授業を一部見学し，採点登録等を行った。
点検評価	1. 効果が上がっている事項 アカデミックスキルと情報リテラシー・データサイエンスでは，学生が自分たちで調べて発表することで多くのことを学んだという実感が聞かれた。多職種連携論 3 医療倫理の 3 学部合同ディスカッションは，前年度と同様に教育センターと協力して行った。当日，学生は全員出席であり，運営，採点とも特に問題なく実施することができた。 2. 改善すべき事項 生成 AI の利用が身近になっていること等を踏まえ，アカデミックスキルと情報リテラシー・データサイエンスの内容はさらにアップデートしていく必要がある。
将来に向けた発展方策・課題	学生が主体的に授業に参加し，自分で何かを考えたり発見したりする経験ができるよう，講義科目でも学生にワークや話し合いをしてもらう部分を増やしていきたい。 倫理学，異文化論は，特に社会の変化に対応して教える内容を毎年アップデートしていく必要がある。

分野名	急性期成人看護学
担当教員	寺口佐與子 谷水名美 勝山あづさ
担当科目	成人看護学概論，急性期成人看護援助論，急性期成人看護学援助方法，急性期成人看護学実習，統合実習，卒業演習，災害看護論
現状の説明	一部授業をオンラインで実施した。1年生の成人看護学概論で成人を対象とする一般的な概念や理論を教授した。2年生の急性期成人看護援助論で臨床判断や「生命の危機的状況にある対象」の概念と理論，身体心理社会的な看護問題と介入について教授した。3年生前期の急性期成人看護学援助方法では，アクティブ・ラーニングを用いて，既習知識を活用し，周手術期患者の事例をもとにした看護計画の立案とロールプレイ演習を展開し，具体的な看護介入方法の探求と理解を目指した。後期の急性期看護学実習で周手術期患者の受け持ちを通し，生命の危機的状況にある対象についての看護計画を立案・実行・評価することで，急性期看護に必要な基礎的知識・技術・態度の習得につなげた。また，選択科目の災害看護論では災害時の応急処置や搬送等の実技指導を行った。4年生の統合実習では1～3年生までの知識と技術を統合させるために学生自身が実習計画を立て，急性期看護についての学びを深めた。また，卒業演習として興味のあるテーマに関する文献検討に取り組み，論文作成と研究発表を実施した。
点検評価	1. 効果が上がっている事項 急性期領域の核となる「生命の危機的状況」にある対象について，1回生から3回生まで講義，演習，実習と「命を守る」ための一貫した内容を教授し続けることで，急性期の特徴を理解しつつ急性期看護の対象，アセスメント，看護ケアを学ぶことができています。また，双方向授業支援ツールでの小テストを取り入れることで学生の主体的な学習行動につながっている。 2. 改善すべき事項 1) 「生命の危機的状況」にある対象のアセスメントが難しいため繰り返しの知識の定着を図ることと，3回生では，その応用に適した事例を用いて理解させる必要がある。その準備が不十分だと，急性期領域実習の看護過程を展開することが困難となるため，根気よく指導する必要がある。 2) 急性期の時期に応じて変化する看護問題抽出を多角的にとらえることができること，必要な基礎知識とその応用ができることを目指し，絶えず学生に問いかけ，指導していく必要がある。 3) 実習では「生命の危機的状況」を強調した指導や，患者入院期間の短縮に伴い，心理社会的側面からの看護問題の抽出や介入が困難な学生も見受けられ，早期から身体的心理的社会的側面を統合することを指導する必要がある。
将来に向けた発展方策・課題	急性期看護学の知識の定着のためには繰り返しの教授を行う必要がある。また，現象を学生の持っている知識に照らし合わせて「言語化」することができるように，演習・実習ではできるだけ学生に「語らせる」ことを念頭にに関わり，「考える」「考え続ける」ということを刺激することを意識した内容を取り入れる。

分野名	慢性期成人看護学
担当教員	飛田伊都子 有田弥棋子 野瀬珠美
担当科目	成人看護学概論，慢性期成人看護学援助論，慢性期成人看護学援助方法，慢性期成人看護学実習，看護実践と理論の統合，統合看護学実習，卒業演習
現状の説明	成人看護学概論では，成人期の対象のライフステージ及び健康レベルに応じた身体的・社会的・精神的特徴を理解できるよう，可能な限り事例を紹介しながら授業を行った．慢性期成人看護学援助論では，前半に主要な慢性疾患とその看護について講義を行い，看護過程やアセスメントについて学習できるよう構成した．慢性期成人看護学援助方法では，教員が作成した事例に基づき，講義と事例展開，さらに技術演習を組み合わせて実施した．また，学生の基本的理解を把握するために事前課題を提示し，授業では学生の創意工夫の視点や学生間の相互作用を共有できるよう，アクティブ・ラーニングを取り入れた授業を行った．慢性期成人看護学実習は，大学病院の呼吸器内科，代謝内科，神経内科，循環器内科の4病棟で実施した．実習では，医師および慢性看護専門看護師（CNS）による臨床講義を取り入れるとともに，医学部・薬学部と合同で多職種連携カンファレンスを実施した．統合実習は，学生の希望するテーマに応じて，大阪医科薬科大学病院，大阪医科薬科大学三島南病院，沖永良部徳洲会病院，高槻赤十字病院の4施設で実施した．卒業演習では，教員が8名の学生を担当し，学生が選択したテーマに基づき文献検討を行い，論文を作成するとともに学内発表を行った．
点検評価	1. 効果が上がっている事項 「慢性期成人看護学援助論」では，基盤看護学分野の「看護展開論」との連携により，看護過程の学習がスムーズに進むよう調整を継続した．「慢性期成人看護学援助方法」においては，グループワークや技術演習を積極的に取り入れており，学生の主体的な授業参加につながっている．実習では，指導者と教員の連携による指導体制で，学生が目標を意識しながら実習に取り組む姿勢が高まった．また，カンファレンスの充実により，多職種連携や倫理的課題への理解も深まった． 2. 改善すべき事項 次年度は，学生の個別性や到達度に応じたきめ細かな指導が継続的に求められるため，指導者・教員間の情報共有をより密にした体制を整える．カンファレンスについては，多職種連携や倫理的課題に関する学生の思考力・判断力が深まるよう，テーマ設定や進行方法を工夫していきたい．
将来に向けた発展方策・課題	概論・援助論・援助方法・実習と続く学習プロセスに沿って思考を整理する意識を学生が持てるよう，授業の構成と説明をさらに工夫していく．知識と技術の統合を基盤とし，病いとともに生きる人とその家族への看護援助について系統的に思考を深められるよう，学習課題を焦点化した授業計画を立てる．事例における倫理的課題や意思決定支援への理解を深める授業内容についても検討を進める．実習においては，引き続き指導者・教員間の連携を密にし，学生の個別性や到達度に応じた指導体制を整えていく．

分野名	精神看護学
担当教員	山岡由実 山内彩香 安富依子
担当科目	人間関係論, 精神看護学概論, 精神看護学援助論, 精神看護学援助方法, 精神看護学実習, 看護実践と理論の統合, 統合看護学実習, 卒業演習
現状の説明	「人間関係論」では, 人間理解・相互影響についての理解を深めるため, ペアワークやロールプレイを取り入れた。「精神看護学援助論」では, 疾患・治療に加え, 対象者が体験している世界を理解しアセスメントに繋げることを強化した。また, 「精神看護学援助方法」では, 精神看護の実践者や当事者の話を聴く機会を設け, 学生が精神看護やその対象に対するイメージを具体化できるよう促した。 「精神看護学実習」では, 今年度の実習目標に対象者の苦悩とストレスへの理解を深めることを位置づけた。精神疾患がその人の生活や人生にどのような影響を与えているのか, また, その人が希望を持って生活していくためにどのような支援が必要かを, 対象者の持つ力にも注目してケアを考えるよう指導した。多職種連携 - 臨床カンファレンスは 8 回実施し, 88 名の学生が参加した。今年度は「その人らしさを大切にしたいチーム医療」をテーマに, 学生が対象者を全人的に捉え, 多職種の視点から医療・ケアを考えることを目的に実施した。グループワークでは教員も介入し, 意見交換の促進を図った。「統合看護学実習」は, 地域包括ケアシステムの視座を盛り込んだ実習展開とし, 「卒業演習」では 5 名の学生が関心に沿って文献研究を行った。
点検評価	1. 効果が上がっている事項 授業評価では, 講義・演習科目において約 90%の学生が「学習目標を達成できた」と回答し, 実習では 95%以上の学生が「実習は有意義であった」「看護（観）を深める機会になった」と評価していたことから, 精神看護における対象理解や関わり的重要性, 援助方法について学びが得られたと考える。多職種連携 - 臨床カンファレンスでは, テーマや運営方法の見直しにより例年より活発な意見交換が見られ, アンケートでも 95%以上の学生が多職種の視点や連携の重要性について肯定的に評価し, 多職種協働への理解を深める学習機会となった。また, 統合看護学実習では, 記録内容から地域における精神看護や地域包括ケアシステムの実際, その重要性について学びが深まっていることが窺えた。 2. 改善すべき事項 演習や実習での様子から, 学生は精神疾患を患う人の苦悩を想像することや他者と対面で意見交換することが難しくなっている様子が窺える。講義では, 学生が精神看護学に対する興味・関心を高め, 基本的な知識を習得できることに加え, 学生同士で考えを共有したり, 課題解決に向けて共創していけるよう教授方法を工夫する必要がある。また, 実習では, 学生が対象者と共にいる時間を増やし, 対象と関係性を築きながら, 看護を展開する力を育んでいく必要がある。
将来に向けた発展方策・課題	今後は, 学生が対象者の体験や思いを想像し多様な視点から理解できる力を育むため, 対話型の授業や演習をさらに充実させるとともに, 実習では対象者と関わる機会を確保し, 関係性を築きながら看護を展開する力の育成を図る。

分野名	老年看護学
担当教員	樋上容子 杉木佐知子 寺田沙耶 濱浦弘美（10月から）
担当科目	老年看護学概論，老年看護学援助論，老年看護学援助方法，老年看護学実習，看護実践と理論の統合，統合看護学実習，卒業演習
現状の説明	昨年度で2年次の「実習Ⅰ」が終了したため，講義・演習では，動画教材の積極的な活用や教員による模擬患者を設定した演習により，紙面だけでは想定が難しい高齢者像や患者像を，より現実味をもって考えることができるよう工夫した．また，倫理的課題の1つである身体拘束について，演習で体験した後にグループディスカッションを行い学生らが自分事としての思考できるよう促した． 「老年看護学実習」においては，介護老人保健施設1施設が新規実習施設として加わったが，実習指導者への事前説明や実習中の丁寧な情報共有により，実習指導者と連携を取りながら実習指導を進めることができた．また実習オリエンテーションにて，アクティビティケアについての説明を行ったことで，学生らは老年看護におけるアクティビティケアの意義を理解し，患者の自尊心を考慮した身体的・精神的活動性の向上を目指した実践が増えた．加えて，実習スケジュールを改定し，実習最終日に学内日を設け実習中に捉えた倫理的課題（日常倫理を含む）についてグループワークしたことで，深い学びを得ることができた．「実践と理論の統合」の事後に実施していた個人面談を実習最終日に設け，学生らの記憶が鮮明な内に振り返りを行うことができた．「実践と理論の統合」事後では，個々の実践での学びをグループワークで他の学生と共有し，理論を用いてまとめることで学びを深めることができた．今年度は，多様な理論を活用しており，学びの幅が広がっていた． 「統合看護学実習」は，総まとめとして，学生が立案した実習計画のもと，三島南病院のご協力を得て患者選定していただき主体的に実習を進めることができた．「卒業演習」では，8名の学生がそれぞれ関心のあるテーマに沿い計画的に進め文献研究など卒業論文としてまとめ，学内発表を行った．
点検評価	1. 効果が上がっている事項 講義，演習ではグループワークを多用し，学生が自分事として考え，主体的に授業に取り組めるよう工夫できている．実習では実習指導者との情報共有や，検討に基づく実習日程や内容の改定により，実習の質の担保に向けた改善が図られた． 2. 改善すべき事項 学習の効果を高めるため授業形態を柔軟に考え，学生が主体的に授業に取り組めるよう工夫や見直しを継続していく．老年看護学実習においては，学生が後期高齢者看護や認知症看護を実践できるよう実習施設と調整・連携を図りながら進めていく．
将来に向けた発展方策・課題	講義・演習・実習のそれぞれにおいて，教員が意図する段階的な学習を学生に丁寧に説明し，主体的に取り組めるように進める．実習では，実習指導者と連携し，特に後期高齢者や認知症者の看護に取り組めるよう進める．講義・演習・実習のスケジュールを含めた全体像の見直しを定期的の実施し，学習内容をさらに充実させていく．

分野名	がん看護学
担当教員	鈴木久美 南口陽子 土井智生 城山敏江
担当科目	がん看護学総論, 看護研究法, 多職種連携医療論Ⅳ・医療安全, 看護実践発展総合演習, 看護実践発展実習, 統合看護学実習, 看護と生体診断法, 卒業演習, アカデミックスキル, 地域・在宅ケア実習
現状の説明	「がん看護学総論」では, 知識の教授のみならず, 治療期や終末期にあるがん患者の特徴, ACP などをも具体的にイメージできるように視聴覚教材も効果的に取り入れながら授業を展開した。また, がん医療における倫理課題に関するグループワークにより倫理観の涵養を図った。「看護研究法」では, 研究の基本とともに, 文献検索の演習や学生の研究疑問を明確にする課題を通して卒業演習につながるよう授業を展開した。「多職種連携医療論Ⅳ・医療安全」では, 講義・演習のみならず三学部合同ゼミを通して多面的に医療安全について議論し, 学びを共有した。「看護実践発展総合演習」では, 事例を提示し, 対象の状況を踏まえて必要な看護技術を考えながら繰り返し技術演習を行うことで学生の技術力の向上を図った。「看護実践発展実習」では, ケア度や重症度の高い患者に対する看護実践力を身に付けられるよう実習指導者と密な連携を図りながら実習を行った。「看護と生体診断法」では, 患者の総合的なアセスメント能力の向上を目指した授業を展開した。「統合看護学実習」では 8 名の学生を受け入れ, 治療期および終末期にあるがん患者に対する実習を行った。「卒業演習」では 6 名の学生を受け入れ, 学生の関心に沿ってテーマを決めて取り組み, 成果の発表会を行った。なお, いずれの科目も授業の後には学生からの感想や質問を募り, 細やかにフィードバックを行うことで学びを共有するとともに疑問点の解消を図った。 「アカデミックスキル」では, 他分野の教員と連携し, 大学で学ぶための基礎的技法や学士力の基盤となる能力の醸成に努めた。「地域・在宅ケア実習」では, 地域で暮らす対象者の多様性について学べるよう実習指導を行った。
点検評価	1. 効果が上がっている事項 講義科目と演習科目ではグループワークやケーススタディ, シミュレーション機器を活用したアクティブ・ラーニングと細やかなフィードバックにより, 学生からの授業評価ではいずれの科目においても満足度が高かったという回答を得た。実習科目においても, 学生が主体的に様々な看護技術を患者に対して安全に実践する機会を設けることができ, 学生からの授業評価も肯定的な回答を得た。 2. 改善すべき事項 引き続き, 学生の思考力を高める課題やディスカッションテーマの設定により多様な視点を学び, 理解を深められる授業にしていく。課題の量については内容を厳選して効率よく学べるよう工夫していく。
将来に向けた発展方策・課題	講義・演習科目では, 基礎的知識をもとに論理的思考を深め, 多角的な視点から対象を理解できるよう思考力の強化を図るとともに, 臨床判断力や看護技術を含めた看護実践能力の育成につなげたい。実習科目では, 看護実践能力の向上を目指し, 実習指導者や教員間の連携をさらに強化したい。

分野名	臨床医学
担当教員	安田稔人 津田泰宏
担当科目	健康科学論，からだの仕組みと働きⅠ・Ⅱ，フィジカルアセスメント，病気の成り立ち，病気の診断・治療Ⅰ・Ⅱ，急性期成人看護援助論，災害看護論，リハビリテーション医学
現状の説明	健康寿命の延伸のために，看護学においても運動器は重要な分野である．また，生活習慣病といわれる疾患の病態や背景を学生の間から学ぶことも大切である．臨床医学の授業は講義形式であるが，授業支援ツールなども活用してできるだけ双方向授業を心掛けている．また，画像（単純 X 線像や超音波画像，MRI など）や，動画（歩容の観察，内科的診察手技，外科手術など）を提示し，臨床現場をイメージできるように工夫している．さらに，授業中にワークシートでの解剖用語の穴埋めなど能動的な学習も行えるようにしている．運動器の講義では，機能解剖学の視点から，学生に考えさせながら教育し，3 年時のリハビリテーション医学の講義につなげている．チーム医療においては，看護職が多職種と連携して患者さんに関わっていく必要性を医師の立場から説明している．
点検評価	1. 効果が上がっている事項 国家試験対策として解剖生理，病気の講義中に，国試の過去問題を学生に提示（双方向授業支援ツールを使用）して，授業時間中に学生の理解度を確かめている．今年度の国家試験でも正答率が全国平均を大きく上回っている問題もあり，一定の効果を挙げている．授業終了時には授業難易度に関するアンケート調査を行い，次回授業や次年度授業に役立てている．医学部の教員によるオムニバス形式が多い科目に関しては，まとめの授業などを行い知識の整理を促していく．また，健康寿命の延伸のためのトレーニングを実演しながら市民に教えるなど，社会貢献もおこなっている． 2. 改善すべき事項 解剖生理，病態については，将来，看護師として患者さんに関わり，フィジカルアセスメントや援助を行なっていく中でどう役立てるかが重要である．授業の中でこのことを丁寧に説明し，実際の臨床の場面を学生がイメージできるよう，学生にとってわかりやすい授業を行なっていく．医学部の教員によるオムニバス形式が多い科目に関しては，さらに担当教員との連携を工夫する必要がある．
将来に向けた発展方策・課題	これからの医療において，知識，技術などの個人の力はもちろん重要であるが，同時に医療チームとしての力を高めることも欠かせない．その中で日常診療における臨床医の視点を学生に伝えて，卒業後の多職種連携の手助けになるよう，授業や実習中に学生に教育していく．「患者さんのために」という想いは医師も看護師も同じであり，患者さんに対して温かい心を持ちながら，正しくアセスメントして，治療，援助を行うためにも患者さんを診る力を身につけてもらうことが大切である．解剖や病態生理の国家試験での正答率が低いため，1 年の講義をいかに演習や実習に繋げながら，卒業時に知識をつけていくかが今後の課題である．

分野名	小児看護学
担当教員	鈴木美佐 森瞳子 倉橋理香
担当科目	小児看護学概論, 小児看護学援助論, 小児看護学援助方法, 家族看護学, 小児看護学実習, 看護実践と理論の統合, 統合看護学実習 (小児), 卒業演習
現状の説明	「小児看護学概論」では、PBLによるグループワークおよびプレゼンテーションを引き続き実施した。「小児看護学援助論」では、小児看護がイメージしやすいよう視聴覚教材を積極的に用い講義を展開した。「小児看護学援助方法」では、小児特有の疾患事例を用い、年齢や病期に応じた看護過程の展開を行った。看護技術演習は、小児の特性をふまえた基本技術習得とともに、ディスカッションで体験に基づく学びを深めた。「家族看護学」では、家族を捉えるための基本的な理論および、家族支援専門看護師の実践活動に関する講義を行った後、事例展開を行った。「小児看護学実習」では、8日間の病院（小児・NICU病棟、外来）実習および2日間の保育室・小・中学校・特別支援学校実習を実施した。外来実習では、病棟と外来の看護の継続性を学ぶ視点から外来担当患児を設定し、診察の見学を取り入れた。学生2名で一人の患児を受け持つ方式での実習にて、学生間の学びの共有や相補、発展など良い効果を得ることができた。「看護実践と理論の統合」の事前演習では、小児病棟・NICU別に事例演習を実施し学生の準備性を整えた。「統合看護学実習」では学生8名が、病院実習（大学病院・外部病院）とフィールド実習（2泊3日の難病児キャンプ・1型糖尿病児キャンプ）にて、看護マネジメントの視点と子どもと家族を取り巻く医療・福祉・教育との多職種連携について実習を展開し、看護の役割を考察する機会となった。実習後には実習指導者を招いて学びの発表会を実施した。「卒業演習」では8名の学生が、個々のテーマについて文献研究を行い、学内卒業演習発表会で成果を共有出来た。
点検評価	1. 効果が上がっている事項 講義科目にPBLを取り入れ、学生の主体的参加が定着した。オンデマンド授業の活用・中間・期末テスト実施および試験後の解説などを行うことで、知識の定着に一定の効果を感じることが出来た。小児看護学実習では、ペアで一人の患児を受けもつ実習展開方法にて学びの相補・発展など良い効果を得ることができた。NICU・小児病棟実習指導者との調整を踏まえ、倫理カンファレンスやフィジカルアセスメントの機会を意図的に設け、更なる学びの質の向上を図ることができた。 2. 改善すべき事項 NICU・小児病棟における入院児の減少などの影響により受け持ち児決定までに0.5～1日程度要することや、入院期間の短期化により2事例以上を受け持つことが増加した。限られた実習機会を最大限に活用できるよう、事前課題の再検討・シャドーイングや外来実習における目標の設定および調整等が課題である。
将来に向けた発展方策・課題	小児看護学における学習目標の達成に向けて、講義・演習・実習内容及び方法のさらなる検討を行う必要がある。次年度は新たにシミュレーション機器の導入をはかり、講義・演習・実習を連関させ、子どもの特性を踏まえたフィジカルアセスメントおよび臨床推論を含む看護実践能力の向上に向けて取り組む。

分野名	母性看護学・助産学
担当教員	近澤幸 間中麻衣子 松枝加奈子 笹野奈菜 酒向なつみ
担当科目	セクシュアリティと看護，リプロダクションと看護，母性看護学概論，母性看護学援助論，母性看護学援助方法，母性看護学実習，助産学概論，助産診断・技術学Ⅰ，助産診断・技術学Ⅱ，助産管理，助産学実習，看護実践と理論の統合，卒業演習，統合看護学実習
現状の説明	講義科目では，最新の国家試験出題傾向を分析し，教育に活用した．また，期末試験だけでなく，小テスト，中間試験を行った． 演習科目では，実践的演習をめざし，オリジナルのアセスメントツール，実践的模擬事例，教員作成の母性看護技術 DVD 活用などにより基本的な看護実践能力の育成をめざした．また，助産診断・技術学Ⅱでは，シミュレーション教育を行った．さらに，無痛分娩事例の増加に対応するため，医師による無痛分娩の講義を行った． 実習では，実習施設との連携，教育設備の充実，教材整備・教材開発，医学部・大学病院看護部との連携により，基本的な看護実践能力の育成を行った．また，多職連携・臨床カンファレンスでは，医学部・薬学部・看護学部での合同カンファレンスを行った．さらに周産期医療・地域母子保健関連の課題を鑑み，産褥期・新生児期やハイリスク分娩の支援の強化や，病院実習以外に助産所や子育て総合支援センター，保健センターなどでの実習を行った．
点検評価	1. 効果が上がっている事項 前年度の学生の授業評価をふまえ，講義・演習内容の改善を行うことができた．3 学部による多職種連携・臨床カンファレンスでは，お互いの実践活動を知り，連携・協働のあり方について深める機会となった．助産学実習では，9 月末までに分娩介助実習を終了した． 2. 改善すべき事項 次年度も，小テスト・中間テストや練習問題，予習課題，反転授業，復習課題などで知識・技術習得を促すことができるよう教授方法を工夫する．2026 年度の助産師国家試験受験資格選抜は 6 名を選抜した．2026 年度はさらなる出産数の減少傾向が予想されている．10 例程度の分娩介助例数確保のため，事例展開などによる教育の質の担保を行っていく．さらに，周産期医療・地域母子保健関連の課題，ハイリスク妊産褥婦への支援や施設と地域の切れ目ない支援の視点の強化を次年度も継続していく．
将来に向けた発展方策・課題	学生の習得状況を丁寧に確認し，視覚支援教材などの積極的活用やシミュレーション教育などによって看護実践力を育成する．各学生が，確実な知識・技術習得に加え，生涯学習力の基盤となる学士力を育成できるよう教育方法を検討する．助産師基礎教育に関する国内外の状況をふまえ，大学教育における助産学教育のあり方について検討する．

分野名	在宅看護学
担当教員	真継和子 伊藤真理 大橋尚弘 有吉真里菜
担当科目	地域・在宅看護論，地域・在宅ケア実習，在宅看護学概論，在宅看護学援助論，在宅看護学援助方法，在宅看護学実習，看護実践と理論の統合，統合看護学実習（在宅），卒業演習，家族看護学，医療カウンセリング
現状の説明	「地域・在宅看護論」では，学生の生活体験や事例をもとにしたグループワークを中心に，暮らしと健康・看護への関心を高めた．「地域・在宅ケア実習」では，学生の関心からテーマ設定をし，人々の生活や価値観の多様性，ケアへの理解を深められるよう実習指導した．「在宅看護学概論」では，オンデマンド動画の配信等の反転授業を取り入れ，事例検討により知識の定着を図った．「在宅看護学援助論」では，視聴覚教材を活用し，在宅での支援の特徴やその方法をイメージしやすいように工夫した．演習では，CNSやJANPU-NPの協力を得て，フィジカルアセスメントの知識や技術を強化した．「在宅看護学援助方法」では2事例を用いて，問題解決型だけでなく目標志向型の思考の強化を図った．模擬訪問の実施やグループディスカッションにより，学びを実習で活用できるように工夫した．「在宅看護学実習」は，学生の体験を言語化できる機会を確保するとともに，学生のレディネスに合わせて実習指導した．可能な限りケアに参加させ看護実践力に繋がられるよう実習指導者との調整を図った．課題となっていた実習時間の超過については，実習指導者との調整を図った．「統合看護学実習」は9名の学生が選択し，うち3名は医薬看合同の地域医療実習に参加した．チームの一員としての役割や多職種連携の実践が理解できるよう実習指導を行った．「卒業演習」は8名の学生が選択し，個々の関心からテーマを絞り込み，論文作成，学内発表までできた．「家族看護学」では事例分析により理論の理解を深めた．「医療カウンセリング」ではロールプレイングとリフレクションにより，知識と技術の習得を図った．いずれの科目においても，学生からのコメントへのフィードバックを行った．
点検評価	1. 効果が上がっている事項 講義・演習においては，グループワークや事例検討，視聴覚教材の活用，高度実践看護師による演習とフィードバックを取り入れた結果，学生の授業評価において学習到達度および総合的満足度が高い傾向が示された．実習では，暮らしを観察する視点が強化され，目標志向型の思考を通して，療養者や家族の強みに着目した看護実践につながっていることが確認された． 2. 改善すべき事項 科目により，学習内容の多さや難易度を指摘する声がある．引き続き教授内容の精選と課題の提示について検討し，効果的に学習がすすめられるよう工夫していく．各科目間のつながりと分野の特徴を明確にしていく．
将来に向けた発展方策・課題	在宅の場をふまえた臨床推論力を高め，目標志向型の思考を強化することで，人々の強みを活かしたケアを実践できる力の育成につなげる．実習では，実習指導者との連携を強化し，学生が安心して学修に取り組める環境の確保を図る．

分野名	公衆衛生看護学
担当教員	草野恵美子 中原洋子 山埜ふみ恵 濱浦弘美
担当科目	公衆衛生看護学概論，公衆衛生看護学活動論Ⅰ，統合看護学実習（公衆衛生看護学分野），卒業演習，公衆衛生看護学活動論Ⅱ，公衆衛生看護学活動方法，公衆衛生看護学管理論，ヘルスプロモーション論，公衆衛生看護学演習，公衆衛生看護学実習Ⅰ，公衆衛生看護学実習Ⅱ
現状の説明	今年度は基本的に対面で講義・演習を進めることができた。公衆衛生看護活動方法や公衆衛生看護管理論では，グループワークや発表会を実施し学生の成果の可視化や学びの共有に努めた。また，地域診断では住民の方を特別講師としてお招きし，住民の生の声を直接聞いて反映させ，既存の量的データだけでなく，質的データによる地域診断の重要性を学ぶ機会を作ることができた。公衆衛生看護学実習Ⅰは学生28名が履修し，今年度はすべての実習施設において対面にて，例年通り5月に実施することができた。公衆衛生看護学実習Ⅱの履修者は28名であり，7グループに分かれて実習を行った。実習地は，堺市北保健センター，八尾市保健所・保健センター，富田林保健所・大阪狭山市保健センター，兵庫県宍粟市（一宮町），兵庫県赤穂市，兵庫県神崎郡神河町であった。健康教育は全実習地において実施することができた。統合看護学実習は9名が履修し，学生は主体的に実習課題を設定して，社会福祉協議会と地域包括支援センターで実習し，最終日には発表会にて学びを共有した。卒業演習は8名の学生が研究テーマを設定し，論文作成と研究発表を行った。
点検評価	1. 効果が上がっている事項 1) 地域診断などに必要な情報は年々，ウェブサイト上からの収集が必要であることから，公的機関でWi-Fiがない実習施設が多く，実習先でもインターネットを使えるように引き続きICTの活用を行った。これを用いて，遠隔地と学内をカンファレンス時につなぐことも可能となった。 2) 保健所・市町村実習における実習目標に照らした学生の自己評価では，「公衆衛生看護管理」の項目において「できた・よくできた」と回答した学生の割合が最も低く，昨年度よりも低下していた。 2. 改善すべき事項 自己評価において年々増加しているものの最も低かったのは「公衆衛生看護管理」についてであり，今後強化していく必要がある。
将来に向けた発展方策・課題	わかりにくい保健師活動のイメージを高めるために，実習に行く前の早い段階（2～3年生）で，引き続き，実践現場の保健師活動に触れる機会を増やすとともに，住民等対象者の生の声を聴く演習を強化する。 実習において「公衆衛生看護管理」の理解を深める方策を検討する。 保健師教育の将来構想について，引き続き検討する。

分野名	社会医学
担当教員	土手友太郎
担当科目	公衆衛生学，保健医療福祉概論，統計学，大阪を学ぶ，情報リテラシー・データサイエンス（1年次），疫学（2年次），災害看護論（3年次），卒業演習（4年次）
現状の説明	公衆衛生学，保健医療福祉概論，統計学，大阪を学ぶ，疫学，災害看護論について，今年度もオンデマンド授業を数コマ導入した．面接授業においては，双方向授業アプリを用い，リモコン端末から，リアルタイムで，設問やアンケートを回答させた．また面接授業とオンデマンド授業の両方において，双方向授業支援ツールで予習復習，授業中および終了前に小テストを実施した．採点結果は，各テストの正解数のみを正解とともに公開した．
点検評価	1. 効果が上がっている事項 予習復習，授業中および終了前に小テストを実施したことにより，授業への準備状況が改善した．また授業中および終了前にも実施することで授業への集中力を維持しやすくなった．授業後，結果を速やかに公開することで，学生の理解度を，学生全員と教員で，共有できたので，次回以降の授業内容の補足や追加ができた．毎回のテストの実施により，授業期間における学生の形成評価ができ，集計により総括評価ができた．期間を通じて，毎回形成評価を継続したことにより，各科目の全般的な項目に対する総合的な理解度を把握できた． 2. 改善すべき事項 オンデマンド授業は，自主的な学習習慣を促す効果が期待されるが，学生により，回答そのものをしてこない場合もあった．オンデマンド授業は，対面授業のような定時来校する負担がないものの，授業に対する積極性が学習効果を大きく左右すると思われた．授業中のテストの成績，出席および回答状況などから同習慣があまりないと考えられる学生には，何らかの対策が必要である．
将来に向けた発展方策・課題	オンデマンド授業は，自主的な学習を促すことができるため，適切な回数や間隔を検討していく．今後大いに採用すべき教育技法である．よって，授業科目に応じた最適の回数や時期を検討していく．

Ⅲ. 看護学研究科

1. 教員組織

1) 教員構成および教員数

【看護系教員】

2026 年 3 月 31 日現在

領域	専門分野	教授	准教授	講師	助教
実践 支援看護学	看護教育学	1	1		2
	看護技術開発看護学	1			
	人文社会学	1			
療養生活 支援看護学	移植・再生医療看護学	1	1		1
	がん看護学	1	1		
	慢性看護学	1			
	精神看護学	1		1	
	老年看護学	1		1	
	臨床医学	2			
地域家族 支援看護学	母性看護学		1	2	1
	小児看護学	1	1		1
	地域看護学	1		2	
	在宅看護学	1	2		
	社会医学	1			
	プライマリケア看護学	2	2		1
計（実人数）		14	7	6	6

2. 年間事業

1) 年間事業活動内容

看護学研究科では、大学院委員会が中心となり年間の事業計画を立案し、教育および研究の質向上をめざし、教育活動や研究活動に取り組んだ。2025 年度に実施した主な事業を報告する。

(1) 教育活動

博士前期課程・後期課程の学生に対する教育の円滑な展開および質向上に向けた計画を策定・実行している。（詳細は大学院委員会報告参照）

(2) 研究活動

博士前期課程・後期課程の学生が取り組む研究について、節目ごとにグループ指導や発表会を実施し、広く助言を得る学習機会を提供し、研究が進められるよう支援している。プレ FD として院生も FD の対象とし、研究活動等へ活かす機会を設定した。

(3) 学生生活支援（学習環境、学生サービスの充実、災害・感染症対策、健康管理等）

院生と教員の交流会を実施し、学年が違う院生同士の交流も行うことができた。また、学生の意見を調査等から把握し、今後の教育環境整備の検討を行った。

2) 2025 年度看護学研究科予算執行額

予算執行額 2,113,155 円 (予算額 250 万円)

「内訳」

予算額 220 万円 執行額 1,949,224 円

(看護学研究科設置経費 (入試, 入試・教育要項作成, 学生証, 実習費, 申請業務費用等)

予算額 10 万円 執行額 100, 000 円 (ベストティーチャー賞 (看護学研究科))

予算額 10 万円 執行額 0 円 (大学院特別講義)

予算額 10 万円 執行額 63,931 円 (大学院学院看護学研究科 FD ワークショップ)

3) 学生在籍数

【博士前期課程】

2025 年 5 月 1 日現在

コース	専門分野	1 年	2 年	在学年限 延長他	合計
教育研究	看護教育学		1	1	2
	看護技術開発看護学				
	人文社会		1		1
	移植・再生医療看護学				
	がん看護学		1		1
	慢性看護学				
	精神看護学				
	老年看護学				
	母性看護学		1		1
	小児看護学			1	1
	地域看護学	2	1		3
	在宅看護学	1	1		2
高度実践	がん看護学	1	2		3
	慢性看護学		1		1
	精神看護学		1		1
	老年看護学	1			1
	母性看護学				
	小児看護学				
	プライマリケア看護学			1	2
合計		5	10	3	18

【博士後期課程】

2025 年 5 月 1 日現在

領域名	1 年	2 年	3 年	在学年限 延長他	合計
実践支援看護学	2	2			4
療養生活支援看護学	1	2	2		5
地域家族看護学	2	2	2	1	7
合計	5	6	4	1	16

2025年度 看護学研究科学事予定表

4) 学事一覧

4 月		5 月		6 月		7 月		8 月		9 月	
日曜	内 容	日曜	内 容	日曜	内 容	日曜	内 容	日曜	内 容	日曜	内 容
1 火		1 木 (院)木④		1 日創立記念日		1 火 (院)火⑪		1 金【秋季】口頭試問【最終試験】		1 月	授業日相表の見方 ・○数字は、各曜日授業の回数を示します。
2 水	臨時学部・研究科教授会	2 金 (院)金④		2 月 (院)月⑧		2 水 (院)水⑬		2 土		2 火	
3 木	入学宣誓式(学部・大学院)	3 土憲法記念日		3 火 (院)火⑦		3 木 (院)木⑬		3 日		3 水	
4 金	新入生オリエンテーション	4 日みどりの日		4 水 (院)水⑨		4 金 (院)金⑬		4 月		4 木	※各授業、特別研究・課題研究については、指導教員と大学院生との調整により、日時を変更することがあります。
5 土	(院)土①	5 月		5 木 (院)木⑨		5 土 (院)土⑫		5 火		5 金	※授業科目については、時間割表を参照してください。
6 日		6 火振替休日		6 金【秋季】論文タイトル締切		6 日		6 水		6 土	
7 月	(院)月①	7 水 (院)水⑤		7 土 (院)土⑧	入試説明会・個別相談会	7 月 (院)月⑬		7 木		7 日	
8 火	(院)火①	8 木 (院)木⑤		8 日		8 火 (院)火⑫		8 金		8 月	
9 水	(院)水① 学部・研究科教授会15:00	9 金 (院)金⑤		9 月 (院)月⑨		9 水 (院)水⑭ 学部・研究科教授会15:00		9 土		9 火	
10 木	(院)木①	10 土 (院)土④		10 火 (院)火⑧		10 木 (院)木⑭		10 日		10 水	学部・研究科教授会15:00
11 金	(院)金①	11 日		11 水 (院)水⑩ 学部・研究科教授会15:00		11 金 (院)金⑭		11 月	山の日	11 木	
12 土	研究計画、中間発表会 大学院生の交流会	12 月 (院)月⑤		12 木 (院)木⑩		12 土 (院)土⑬		12 火	夏季閉鎖期間 (予定)	12 金	
13 日		13 火 (院)火④		13 金 (院)金⑩		13 日		13 水		13 土	看護学研究科入学試験
14 月	(院)月②	14 水 (院)水⑥ 学部・研究科教授会15:00		14 土 (院)土⑨		14 月 (院)月⑭		14 木		14 日	
15 火	(院)火②	15 木 (院)木⑥		15 日		15 火 (院)火⑬		15 金	【秋季】論文発表会	15 月	敬老の日
16 水	(院)水②	16 金 (院)金⑥		16 月 (院)月⑩		16 水 (院)水⑮ 高度要領コース実習報告会		16 土		16 火	
17 木	(院)木②	17 土 (院)土⑤		17 火 (院)火⑨		17 木 (院)木⑮		17 日		17 水	臨時学部・研究科教授会15:00 (【秋季】学位授与可否審議)
18 金	(院)金②	18 日		18 水 (院)水⑪		18 金 (院)金⑮		18 月		18 木	成績開示
19 土	(院)土②	19 月 (院)月⑥		19 木 (院)木⑪		19 土 (院)土⑭		19 火		19 金	入試合格者発表会16:00
20 日		20 火 (院)火⑤		20 金 (院)金⑪		20 日		20 水		20 土	
21 月	(院)月③	21 水 (院)水⑦		21 土 (院)土⑩		21 月 海の日		21 木		21 日	
22 火	(院)火③	22 木 (院)木⑦		22 日		22 火 (院)火⑭		22 金		22 月	
23 水	(院)水③ 臨時研究科教授会15:00	23 金 (院)金⑦		23 月 (院)月⑪		23 水 (院)水⑮ 臨時研究科教授会15:00 (【秋季】主査・副査の決定)		23 土		23 火	看護学研究科入学試験(予備日) 秋分の日
24 木	(院)木③	24 土 (院)土⑥		24 火 (院)火⑩		24 木		24 日		24 水	
25 金	(院)金③	25 日		25 水 (院)水⑫ 臨時研究科教授会15:00		25 金【秋季】修士・博士論文提出(正午迄)		25 月	【秋季】(修正版) 論文提出締切 16:50迄	25 木	
26 土	(院)土③	26 月 (院)月⑦		26 木 (院)木⑫		26 土 (院)土⑮		26 火		26 金	
27 日		27 火 (院)火⑥		27 金 (院)金⑫		27 日		27 水	臨時研究科教授会 15:00	27 土	(院)土①
28 月	(院)月④	28 水 (院)水⑧ 臨時研究科教授会15:00		28 土 (院)土⑪		28 月 (院)月⑮		28 木		28 日	
29 火	昭和の日	29 木 (院)木⑧		29 日		29 火 (院)火⑮		29 金		29 月	
30 水	(院)水④	30 金 (院)金⑧		30 月 (院)月⑫		30 水 臨時学部教授会 15:00		30 土		30 火	
		31 土 (院)土⑦				31 木		31 日			

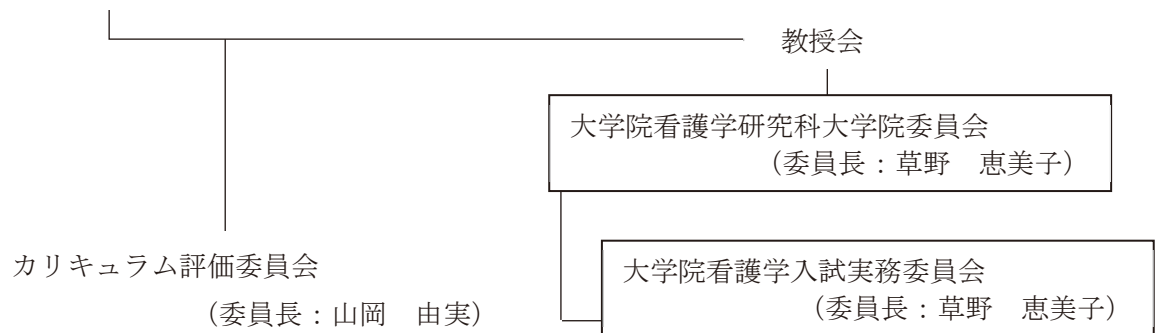
2025年度看護学研究科学事予定表

10月			11月			12月			1月			2月			3月		
日曜	内 容		日曜	内 容		日曜	内 容		日曜	内 容		日曜	内 容		日曜	内 容	
1 水	(院)水①		1 土	周年記念式典		1 月	(院)月⑥ 臨時学部教授会1500		1 木	冬季閉鎖期間		1 日			1 日		
2 木	(院)木①		2 日			2 火	(院)火⑨		2 金	冬季閉鎖期間		2 月			2 月		
3 金	(院)金①		3 月	文化の日		3 水	(院)水⑩		3 土	冬季閉鎖期間		3 火			3 火		
4 土	(院)土②		4 火	(院)火⑤		4 木	(院)木⑩		4 日			4 水			4 水		
5 日			5 水	(院)水⑥		5 金	(院)金⑩ 主査・副査推薦締切		5 月	(院)月⑩		5 木	研究計画発表会		5 木	試問期間	
6 月	(院)月①		6 木	(院)木⑥		6 土	(院)土⑩		6 火	(院)火⑬		6 金	研究計画発表会		6 金		
7 火	(院)火①		7 金	(院)金⑥ 論文タイトル締切		7 日			7 水	(院)水⑭		7 土	研究計画発表会		7 土	入試説明会・個別相談会	
8 水	(院)水② 学部・研究科教授会1500		8 土	(院)土⑥		8 月	(院)月⑦		8 木	(院)木⑭		8 日			8 日		
9 木	(院)木②		9 日			9 火	(院)火⑩		9 金	(院)金⑭		9 月			9 月		
10 金	(院)金②		10 月	(院)月④		10 水	(院)水⑪ 学部・研究科教授会1500 (主査・副査の決定)		10 土	(院)土⑭		10 火			10 火		
11 土	(院)土③		11 火	(院)火⑥		11 木	(院)木⑪		11 日			11 水	建国記念の日		11 水	学部・研究科教授会1500 (学位授与可否審議)	
12 日			12 水	(院)水⑦ 学部・研究科教授会1500		12 金	(院)金⑪		12 月	成人の日		12 木	学部・研究科教授会1500 論文発表会		12 木		
13 月	スポーツの日		13 木	(院)木⑦		13 土	(院)土⑪		13 火	(院)火⑭		13 金	論文発表会		13 金		
14 火	(院)火②		14 金	(院)金⑦		14 日			14 水	(院)水⑮ 学部・研究科教授会1500		14 土	論文発表会		14 土		
15 水	(院)水③		15 土	(院)土⑦		15 月	(院)月⑧		15 木	(院)木⑮		15 日			15 日		
16 木	(院)木③		16 日			16 火	(院)火⑪		16 金	(院)金⑮		16 月			16 月		
17 金	(院)金③		17 月	(院)月⑤		17 水	(院)水⑫		17 土			17 火			17 火		
18 土	(院)土④解部慰霊祭		18 火	(院)火⑦		18 木	(院)木⑫		18 日			18 水			18 水		
19 日			19 水	(院)水⑧		19 金	(院)金⑫		19 月	(院)月⑪		19 木			19 木	成績開示 学位記授与式	
20 月	(院)月②		20 木	(院)木⑧		20 土	(院)土⑫		20 火	(院)火⑮		20 金			20 金	春分の日	
21 火	(院)火③		21 金	(院)金⑧		21 日			21 水	(院)水⑫		21 土			21 土		
22 水	(院)水④ 臨時研究科教授会1500		22 土	(院)土⑧		22 月	(院)月⑨		22 木	(院)木⑬		22 日			22 日		
23 木	(院)木④		23 日	勤労感謝の日		23 火	(院)火⑫		23 金	(院)金⑭		23 月	天皇誕生日		23 月		
24 金	(院)金④		24 月	振替休日		24 水	(院)水⑬ 臨時研究科教授会1500		24 土	(院)土⑮		24 火			24 火		
25 土	(院)土⑤		25 火	(院)火⑧		25 木	(院)木⑬		25 日			25 水	臨時研究科教授会1500 (修正版)論文提出締切 16:50迄		25 水	臨時研究科教授会1500	
26 日			26 水	(院)水⑨ 研究計画発表会 臨時研究科教授会1500		26 金	(院)金⑬		26 月	(院)月⑮ 修士・博士論文提出(正午迄)		26 木			26 木		
27 月	(院)月③		27 木	(院)木⑨		27 土	(院)土⑬		27 火			27 金			27 金		
28 火	(院)火④		28 金	(院)金⑨		28 日			28 水	臨時学部・研究科教授会1500		28 土			28 土		
29 水	(院)水⑤		29 土	(院)土⑨		29 月	冬季閉鎖期間		29 木			試験期間			29 日		
30 木	(院)木⑤		30 日			30 火	冬季閉鎖期間		30 金	口頭試験【最終試験】					30 月		
31 金	(院)金⑤					31 水	冬季閉鎖期間		31 土						31 火		

3. 運営と教育活動

1) 運営組織

大学院看護学研究科（研究科長：鈴木 久美）



2) 委員会

委員会名	看護学研究科大学院委員会	SDGs との 関連	4 質の高い教育を みんなに 	17 パートナリプで 目標を達成しよう 
目 的	看護学研究科の管理・運営を円滑に進めるために設けられ、大学院生の教育、研究、学位審査、学生生活に関する事柄。また、入学試験等に関する協議を行い、必要事項を審議事項、報告事項として教授会に提議する。			
構成員	草野恵美子（委員長）津田泰宏（副委員長）樋上容子 二宮早苗 南口陽子 上久保純（看護学事務課）森川健太（看護学事務課）長田紗季（看護学事務課）			
活動計画	1. 教育課程全般の運営 2. 教育活動に関する自己点検とカリキュラムの見直し 3. リポジトリの具体的運用方法の検討 4. 高度実践コースの課題研究に関する検討 5. 広報活動推進と受験者獲得のに向けた対策 6. 入試運営、入学試験方式の違いによる入学後の学修成果の評価、AP の評価 7. 学生生活支援(学習環境、学生サービスの充実、災害・感染症対策、健康管理等) 8. FD の推進 9. 大学院運営力の強化 10. 大学院教育における国際性の涵養 11. 大学院設置基準改正に伴う TA 業務の検討 12. CNS・NP 認定資格審査合格に向けたフォローアップ体制の確立 13. 新型コロナ感染症への対応（必要時）			
活動概要	1. 教育課程全般の運営 1) 委員会の開催 14 回の委員会（定例 12 回，臨時 2 回）を開催した。 2) 新入生オリエンテーション 4 月に新入生を対象に，教育課程と履修方法，学生生活に関すること，学位論文の指導体制と進め方，TA/RA について説明した。加えて，入学者全員に向けて，主体的な学習姿勢を求める説明を行った。 3) 既修得単位認定に関する事項 新入生のうち 1 名の既修得単位認定にあたり該当科目の科目責任者との調整，認定の可否について検討した。 4) 学位論文に関する事項 2024 年度修了生の学位論文要旨及び審査結果の HP での公開を 5 月に行った。学位論文の公表について，2024 年度修了生 6 名について機関リポジトリを用いたインターネットによる学位論文の公表を行った。 学位論文申請から論文提出までのマニュアルを提示し，学位論文申請，論文審査，提出等が円滑に実施されるよう調整した。口頭試問の場の確保，論文発表会の企画・運営を行った。学位論文発表会は 2 月 12 日，13 日，14 日の 3 日間にわ			

活動概要	たりに実施した。学位論文の最終評価のまとめと修了単位取得状況を確認し、教授会に諮った。 学位論文発表会の詳細は以下のとおりである。 2月12日（木）博士前期課程4名 2月13日（金）博士前期課程4名 2月14日（土）博士前期課程4名，博士後期課程2名 5) 特別研究・課題研究に関する事項 4月に新入生の主指導・副指導教員の調整を行い、教授会に諮った。セメスター毎にグループ指導の実施状況について把握し、規定回数に満たない場合には指導教員に実施を促すこととした（今年度はなし）。4月，11月，2月に博士後期課程の中間発表会，両課程の研究計画発表会を開催した。詳細は以下のとおりである。また，2024年度より特別研究（博士後期課程）主指導」の担当基準について，大学院生の主指導経験がない場合は，「卓越した研究業績（公的競争的外部資金（科研費等）の採択が2件以上あること）」を追加した新基準で実施している。 (1) 中間発表会：4月12日（土）3名 11月26日（水）博士後期課程1名 (2) 研究計画発表会：4月12日（土）博士後期課程2名 11月26日（水）博士後期課程1名 2月6日（金）博士前期課程4名 2月7日（土）博士後期課程4名 6) 高度実践コース実習に関する事項 高度実践コース実習報告会を7月16日に開催し，がん看護学2名，慢性看護学1名，精神看護学1名の発表があった。 高度実践コースの実習費について，2025年入学生より15万円に変更した。 7) TAオリエンテーションおよび研修の実施 TA8名を対象に，TAの目的・役割・心得についてのオリエンテーションの受講および，TA研修として「看護学教育における教授と学習」，「成人学習理論」，「看護教育における倫理」をオンライン動画で受講できるよう動画を配信した。 8) 入学前補習授業の実施 2026年度入学予定者を対象に，2026年3月7日，2時限で入学後の学びをスムーズに進めるため補習授業を実施し，入学予定者9名全員の参加があった。主として研究における文献検討の意義や論文の読み方，文献検索方法について講義し，指定した文献を全員で抄読およびクリティークした。事後アンケート結果から，参加者は意欲的に取り組み，全員から入学後の学習に役立つとの評価を得られた。一方で，限られた時間の中で入学者それぞれのニーズにできるだけ対応できるように，目標設定と事前課題の内容についての検討が必要である。 9) 科目等履修生の募集 2025年度後期，2026年度前期の科目等履修生の募集，選考に際しての出願書類の確認を実施し，教授会に諮った。また，2026年度前期の募集より入学願書の
------	---

活動概要	出願資格の取得学位の記載について一部修正を行った。 10) 科目担当教員についての事項 科目担当教員（常勤教員，兼任教員，非常勤教員）について，新たに科目を担当する教員についての業績書類の確認と審議，兼担および非常勤教員の継続に関して審議し，教授会に諮った。 11) ベスト・ティーチャー賞の公示・投票 ベスト・ティーチャー候補者の選考に関する要領に沿って該当教員を選出し，ベスト・ティーチャー細則にもとづき博士前期課程及び博士後期課程の院生に2026年1月末に公示，2月に投票を実施した。その結果を教授会に諮った。 12) 長期履修の申請について 2月に3名からの申請があり，状況を確認し教授会に諮った。 13) 授業評価アンケートの実施 2月に在学生を対象に授業評価アンケートを実施し取りまとめ，教授会で報告し共有した。回収率は博士前期課程 55.5%（昨年 50%），博士後期課程 43.7%（昨年 50%）であった。 14) 研究業績調査の実施 3月に在学生，修了生に調査依頼をした。 15) 教育要項の作成 博士前期課程および博士後期課程の学位論文についての記載内容（研究計画書の構成や論文の内容）を見直した。博士後期課程の公表条件の基準や論文の内容は，これまで重ねて加筆修正されていた内容を分かりやすく整理した。その他，文言の統一や修正を行った。 2. 教育活動に関する自己点検とカリキュラムの見直し 1) 2024 年度アセスメントポリシーPDCA シートの作成 2024 年アセスメントポリシーに基づき点検・検証し，PDCA シートを作成し教授会に報告した。 2) カリキュラム評価，修了生アンケートの分析 4月に，2024 年度の修了生アンケートの結果を取りまとめ，教授会で共有した。また，2025 年度の調査を3月に実施した。回収率は，博士前期課程（教育研究コース）66.7%（昨年 66.7%），博士前期課程（高度実践コース）80.0%（昨年 50%），博士後期課程 50%（昨年 50%）であった。 3) 就職先調査による点検 最も多く修了生が就職している病院の看護部長・副看護部長に協力を仰ぎ，聞き取りによる意見収集を行った。修了生に期待することは，大学院で身につけた研究力により課題を可視化し，理論と実践を統合して実践に落とし込む循環やこれらを組織的に動かすことが挙げられた。昨今では臨床推論や思考力，対話力等に課題をもつ職員もおり，現場をより良くするために，これらのスタッフを現場で導く人になってほしいとの期待も挙げられていた。 大学院進学に関する組織の支援体制は，高度実践コースの場合，年間 3 名まで
------	---

活動概要	1 年目は給与が支給され、2 年目も経済的支援が行われている。 大学院に期待することは、博士前期課程については、「看護管理」を学ぶカリキュラムがまず挙げられた。認定看護管理者教育課程サードレベルを修了していれば診療報酬を得られることとなっている。また、他にも現在は本学にない「クリティカル（急性期）看護，急性・重症患者看護 CNS」「母性看護 CNS」といったニーズもあり，他学に進学するケースもあるとのことであった。また「家族支援 CNS」のニーズも聞かれ，多様な専門領域で役立つとのことであり，広域入退院加算等にもつながる可能性があるとのことであった。 これらのニーズをもとに，今後さらに必要性等を精査し，特に博士前期課程に関する見直しの必要性が考えられた。 4) 博士後期課程のカリキュラム改正の検討 委員会内に新たに DNP ワーキング（研究科長含む）を設置し，2028 年 4 月 1 日からの博士後期課程全体の教育目標やカリキュラム改正や定員数変更，新たな DNP コースの設置について，今年度全 9 回の会議を重ね，検討と準備を進めた。大学院委員会や教授会での審議の結果，2028 年 4 月 1 日より以下の内容への改定が決定した。 (1) 博士後期課程の定員変更とコースの設置 現在の博士後期課程の定員は 3 名であるが，過去 10 年の受験者と入学者の推移より，博士後期課程においては受験者数が安定しており，定員超の入学者数が続いているため，3 名から 5 名への定員増とすることとなった。 2014 年 4 月の設置から 10 年が経過し，看護を取り巻く環境は大きく変化しており，技術革新や看護対象者の健康課題の複雑化といった社会情勢の変化，看護学研究方法論の著しい進展がある。これまでの 10 年間の教育成果を基盤としつつ，最新の学問的知見を含むより実践的かつ高度な研究能力を担保する必要がある。そのため，博士後期課程に，教育研究コース・DNP コースの 2 つのコースを設置し，教育目的・教育目標の改定を行う。これに伴い，アドミッションポリシー，ディプロマポリシー，カリキュラムポリシーの改定，出願資格や入試概要の見直し，学位論文の構成と学位論文の申請基準を改定する。加えて，基盤科目の新設・再編（「看護科学研究論」「看護学研究法応用論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」「Advanced Academic Writing」「看護学教育開発論」「看護学組織開発論」）を配置することとなった。それぞれの具体的な内容についても審議を経て，教授会にて承認された。 (2) DNP コースの設置検討 本学はこれまで，博士前期課程において CNS/NP 等の高度実践者を養成しており，今後，さらなる実践の改革を担える人材育成のニーズに応じた博士後期課程における大学院教育として DNP コースを新たに設置することとなった。 新たな DNP コース設置に伴い，専門科目に看護実践の場における課題分析や既存のデビデンスを活用した実装研究力を養うための「DNP 特論」「DNP 演習」や「プロジェクト研究」を配置する。これらの具体的な内容についても審議を経て，教授会にて承認された。
------	--

活動概要	3. リポジトリの具体的な運用方法の検討 2024 年度に博士後期課程を修了した学生の学位論文について、リポジトリ登録を行った。 4. 高度実践コースの課題研究に関する検討 高度実践コースの課題研究は教育研究コースの半分となる 4 単位であるが、実習との両立が学生の負担になっていないか引き続き修了者アンケート結果等から検討していく。 5. 広報活動推進と受験者獲得のに向けた対策 1) 入学者用パンフレット・ポスターの見直し 今年度もパンフレットおよびポスターを作成し、内容の見直しを行った。また、News のコーナーに高度実践看護師（CNS、NP）の認定状況および看護学研究科の 10 周年報告を掲載することとした。 2) 入学試験要項見直し 入学試験要項を見直し、受験者によりわかりやすい要項となるよう修正した。また、文部科学省より通知のあった大学院入学者選抜実施要項に基づき、合否判定方法を具体的に明記した。 3) 「入試説明」「英語文献の読み方講座」HP 上での動画配信 2022 年度より好評であるオンデマンド形式による入試説明と分野紹介、修了生による大学院紹介を実施した。 4) 入試説明会・個別相談会の実施 対面開催を中心としウェブ会議システムを併用したハイブリッド方式にて入試説明会・個別相談、在学生との懇談会を実施した。また、Web による個別相談は随時、受け付けた。 (1) 第 1 回個別相談：2025 年 6 月 7 日（土）11 名 (2) 第 2 回個別相談：2026 年 3 月 7 日（土）17 名 5) ホームページの更新 随時ホームページ更新を実施し、情報発信に努めた。また、看護学研究科・大学院生の外部研究資金獲得実績の周知を開始した。 6) 在学生への広報活動 3 年生を対象に、12 月 20 日（土）就職支援委員会主催のガイダンスの機会を活用して大学院についての紹介および在学中の大学院生による講演を行った。事後アンケートではほとんどのものが入試説明会の内容について「よく理解できた」、個別説明会について「大変良かった」と回答しており、自由記載からも、大学院進学という選択肢や大学院での学習内容を知る機会となっていた。 7) 外部関連団体での広報活動 2025 年 12 月 6 日（土）開催の第 13 回大阪府看護学会で出展し、参加者への個別相談活動や大学院のパンフレットを配布して広報活動を行った。 7 名（資料のみ配布者 20 名程度を除く）に、研究内容や入試およびコースや学費等の個別相談内容に対応した。今年度も参加校が 5 校あり、同時に複数の大学
------	---

活動概要	を比較する機会になっていると考えられた。参加者のうち 1 名は、後日開催した入試説明会に参加しており、前期課程受験対象者への広報活動として活用できた。 6. 入試運営、入学試験方式の違いによる入学後の学修成果の評価、AP の評価 1) 入学試験の準備、実施、感染対策 入学試験要項に関して、合否判定方法の明記、入学願書の修正、研究計画書のタイトルの追記などを行なった。また、文部科学省より通知のあった大学院入学者選抜実施要項に基づき、試験問題・解答・解答例・出題の意図の公表に向けて試験問題の作成を行った。COVID-19 感染予防については見直しを行い、対策を緩和した。試験は 2025 年 9 月 13 日に実施した。 2) 2025 年度大学院入試 出願資格審査の実施 出願資格審査基準に沿って、申請者 1 名の審査を実施した。 3) 入試成績の分析 前期課程の出願数は 10 名で前年より 5 名増、選考の結果 9 名を合格とし、9 名が入学手続きを行った（定員数の 1.13 倍）。本学部卒業生の受験は 2 名であった。後期課程の出願者数は 9 名で前年より 2 名増、合格者は 4 名で全員が入学手続きを行った（定員数の 1.33 倍）。本学部卒業生の受験は 2 名であった。前期課程の今年の総得点の平均は昨年と同程度であった。A 方式を 1 名、B 方式を 8 名が選択した。後期課程は英語の平均点が前年度－52 点と大きく下がった。昨年の突出して良かったためでもあるが、過去 5 年間で最低点であった。英語の影響もあり、総得点は昨年より－55 点と大幅に低下した。後期課程の出願者数は安定しており、定員超の入学が続いている。在籍定員管理（2.0 倍未満とする）のため、在学生を毎年適切に修了させていくことが必要である。また、今後専門共通問題を廃止することを検討していくにあたり、英語試験の意味合いや点数配分を再度検討する必要がある。 7. 学生生活支援(学習環境、学生サービスの充実、災害・感染症対策、健康管理等) 1) 大学院生の交流会 4 月 12 日（土）に大学院生の交流会を開催した。前年度同様に土曜の研究計画発表会・中間発表会後に 1 時間で実施した。院生 28 名、教員 22 名の参加があった。院生の参加者が前年度より増加した。6 グループに分かれて二つの講義室で意見交換や院生へのアドバイスをを行った。参加者アンケートではほとんど肯定的な回答が得られ、「モチベーションの継続のさせ方」、「研究に行き詰まった時の対処方法について」、「研究で困っていること」などが意見交換のテーマとして希望があった。 2) 学生生活ガイドの作成 学生生活ガイドを更新し配布した。 3) 学生調査の実施 2 月に学生調査を行い、前期課程 12 名（回答率 66.6%）後期課程 9 名（56.2%）の回答を得た。前期・後期課程ともに経済的不安がある学生が多い（57.1%）が、
------	--

活動概要	専門的・学問的知識や教養を身につけるために本学大学院に入学している学生が多かった。登校日数は、前期課程では週に2～3回以上の学生が大半を占めたが、後期課程の学生は全員が週に1回未満であった。 4) 健康管理 保健管理室と連携し、健康診断実施等の健康管理を行った。 5) 災害対策 看護学学生生活支援センターと連携し、大規模災害に備えるためのマニュアルの整備等を行った。 8. FD の推進 8月19日（火）に「大学院 DNP コースでの学びと修了後の活動の実際」をテーマに、尾形由貴子先生（社会医療法人雪の聖母会 聖マリア病院 外来化学療法室看護師長、がん看護専門看護師、DNP）の講演を行った。対象は、教員と大学院生（プレFD）で、教員27名、院生5名の参加であった。アンケートでは、内容について満足したが最も多く、本学での導入の必要性や導入する場合の疑問点や懸念点について具体的に検討する機会となり、今後の将来構想やカリキュラムの検討に活かしていける内容であった。 9. 大学院運営力の強化 大学院委員会、委員会開催前の打ち合わせのほか、適時、連絡調整を密に行い情報共有を行いながら運営に努めた。その結果、滞りなく大学院運営を進めることができた。 10. 大学院教育における国際性の涵養 看護学部国際交流委員会と連携し、大学院生に対し各種国際交流プログラムの案内を行い、国際交流を図った。 11. 大学院設置基準改正に伴う TA 業務の検討 本大学院に入学した学生の教育背景や業務の重責を考慮し、TAとしての担当業務について事前に Moodle で配信されるオンライン動画を視聴し、業務に臨むことを実施した。 12. CNS・NP 認定資格審査合格に向けたフォローアップ体制の確立 CNS および NP の受験者は、2名全員が合格した。内訳は、がん1名、NP1名であった。いずれも大学院修了後に各分野の教員がフォローアップを行っていた。 13. 新型コロナウイルス感染症への対応（必要時） 特に講義・実習等に関して対応したことはなかった。 14. その他 1) 収容定員比率の適正化 大学評価（認証評価）改善課題：収容定員比率の超過について、入学試験における適正管理、また計画的な修了生の輩出により、収容定員比率は適正化している。 2) 研究助成金の獲得
------	--

活動概要	一般社団法人日本がん看護学会「2025 年度がん看護に関わる高度実践看護師海外研修事業」について、博士前期課程 第 2 学年の学生（がん）が決定した。 3) 学士・修士一貫（5 年・6 年一貫）保健師教育の検討 保健師教育の質向上に向けて WG を設置し、学士で免許取得後、継続して博士前期課程にてより今後必要とされる能力を身につけ修士号を取得する一貫教育の検討を開始した。構想について学部間協議会、法人運営会議にて説明をおこなった。また計 6 回の WG での検討により、大学院へのコース設置や学部との連動性、選抜方法、文部科学省への申請内容の確認等を行った。
評 価	1. 効果が上がっている事項 1) 標準修業年限内での修了等により収容定員の適正管理ができています。 2) FD を充実させ、院生を対象にしたプレ FD を併せて実施できた。 3) 年 2 回の入試説明会・個別相談会を継続的に実施しており、院生の安定的確保ができています。 4) 入学金半額免除や広報などの結果、本学部卒業生が継続的に受験している。 5) 社会のニーズに応える新たな教育構想（DNP コース設置および博士後期課程のカリキュラムの見直し、学士・修士一貫教育）の検討を進めることができた。 2. 改善すべき事項 1) 学生調査、カリキュラム評価、授業評価アンケートの回収率を上げるために、一体的に調査票を再構成し、回答は 1 回となるよう工夫する必要性。ベストティーチャー賞の投票率向上に向けた投票方法の見直しの検討 2) 博士前期課程の受験生確保 3) アセスメントポリシーの見直し（就職先調査等） 4) 博士後期課程院生の投稿先（主に国際誌）選択の際の留意点の周知（粗悪ジャーナルなどへの投稿回避） 5) 新たな教育構想の推進
将来に向けた発展方策・課題	1. 博士後期課程の定員管理 2. DNP コースの文部科学省への申請と開始に向けたカリキュラム運営（科目担当者・シラバス作成等）および広報 3. 学士・修士一貫保健師教育の検討の推進 4. 高度実践コースの更新申請に向けた準備と審査基準の変更を見通した共通科目・実習科目等の全体的見直し 5. 社会のニーズにこたえるための博士前期課程全体の見直し（専門分野の見直し、高度実践コースの更新申請や学士・修士一貫保健師教育と関連した検討） 6. 学位論文の質向上に向けた研究力向上および投稿先（主に国際誌）に関する継続教育の必要性

3) 教育活動

(1) 博士前期課程

① 授業科目一覧

博士前期課程 カリキュラム表

(1) 教育研究コース

2025 年度入学生用

区分	授業科目	配当年次	実践支援看護学領域						療養生活支援看護学領域						
			看護教育学		看護技術開発看護学		人文社会学		移植・再生医療看護学		がん看護学				
			単位数		単位数		単位数		単位数		単位数				
			必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択			
共通科目	看護倫理	1後	2		2		2		2		2				
	看護学研究方法論	1前	2		2		2		2		2				
	看護現任教育論	1後		2		2		2		2		2			
	看護理論	1前	2		2		2		2		2				
	看護管理学	1後		2		2		2		2		2			
	コンサルティング論	1後		2		2		2		2		2			
	看護政策論	1前		1		1		1		1		1			
	フィジカルアセスメント論	1前		2		2		2		2		2			
	臨床薬理学	1後		2		2		2		2		2			
	病態生理学	1前		2		2		2		2		2			
	看護哲学	1後		2		2		2		2		2			
	英語論文講読	1通		1		1		1		1		1			
看護学領域 実践支援	看護教育学特論Ⅰ	1前	2			2		2		2		2			
	看護教育学特論Ⅱ	1後	2			2		2		2		2			
	看護教育学演習	1後	2			2		2		2		2			
	看護技術開発学特論Ⅰ	1前		2	2			2		2		2			
	看護技術開発学特論Ⅱ	1前		2	2			2		2		2			
	看護技術開発学演習Ⅰ	1通		2	2			2		2		2			
	看護技術開発学演習Ⅱ	1後～2前		2	2			2		2		2			
	移植・再生医療看護学特論Ⅰ	1前		2		2		2	2			2			
移植・再生医療看護学特論Ⅱ	1後		2		2		2	2			2				
移植・再生医療看護学演習	1後～2前		2		2		2	2			2				
療養生活支援看護学領域	がん看護学特論Ⅰ	1前		2		2		2		2		2			
	がん看護学特論Ⅱ	1後		2		2		2		2		2			
	がん看護学援助論Ⅰ	1前		2		2		2		2		2			
	がん看護学援助論Ⅱ	1後		2		2		2		2		2			
	がん看護学演習Ⅰ	1通		2		2		2		2		2			
	がん看護学演習Ⅱ	1後～2前		2		2		2		2		2			
	慢性看護学特論Ⅰ	1前		2		2		2		2		2			
	慢性看護学特論Ⅱ	1前		2		2		2		2		2			
	慢性看護援助論Ⅰ	1前		2		2		2		2		2			
	慢性看護援助論Ⅱ	1後		2		2		2		2		2			
	慢性看護学演習Ⅰ	1後		2		2		2		2		2			
	慢性看護学演習Ⅱ	2前		2		2		2		2		2			
	精神看護学特論Ⅰ	1前		2		2		2		2		2			
	精神看護学特論Ⅱ	1前		2		2		2		2		2			
	精神看護学特論Ⅲ	1後		2		2		2		2		2			
	精神看護学アセスメント論	1前		2		2		2		2		2			
	精神看護学援助論Ⅰ	1後		2		2		2		2		2			
	精神看護学援助論Ⅱ	1後		2		2		2		2		2			
	精神看護学治療論	1後		2		2		2		2		2			
	精神看護学演習	2前		2		2		2		2		2			
	老年看護学特論	1前		2		2		2		2		2			
	老年看護学アセスメント論	1前		2		2		2		2		2			
	老年期病態治療論	1前		2		2		2		2		2			
	老年看護援助論	1後		2		2		2		2		2			
	老年看護サポートシステム論	1後		2		2		2		2		2			
	老年看護学演習Ⅰ	1通		2		2		2		2		2			
	老年看護学演習Ⅱ	1通		2		2		2		2		2			
	地域家族支援看護学領域	家族看護学特論	1前		2		2		2		2		2		
		周産期看護論	1前		2		2		2		2		2		
母性看護学特論		1前		2		2		2		2		2			
ウィメンズヘルス看護論		1前		2		2		2		2		2			
周産期看護援助論Ⅰ		1前		2		2		2		2		2			
周産期看護援助論Ⅱ		1後		2		2		2		2		2			
周産期看護演習Ⅰ		1後～2前		2		2		2		2		2			
周産期看護演習Ⅱ		1後～2前		2		2		2		2		2			
小児看護学特論		1前		2		2		2		2		2			
小児と病氣		1前		2		2		2		2		2			
発達障害看護論		前(隔・偶数年度)		2		2		2		2		2			
小児看護学アセスメント論		1後		2		2		2		2		2			
小児看護学演習		1後～2前		2		2		2		2		2			
地域看護学特論		1前		2		2		2		2		2			
地域ケアシステム特論		1後		2		2		2		2		2			
地域母子保健論		前(隔・奇数年度)		2		2		2		2		2			
地域看護学演習		1後～2前		2		2		2		2		2			
在宅看護学特論Ⅰ		1前		2		2		2		2		2			
在宅看護学特論Ⅱ		1後		2		2		2		2		2			
在宅看護学演習		1後～2前		2		2		2		2		2			
特別研究	特別研究	1～2通	8	124	8	122	8	124	8	124	8	124			
	合計数		20	124	22	122	20	124	20	124	20	124			

〈修了要件〉2年以上在学して所定の単位（32単位以上）を修得するとともに必要な研究指導を受け、学位論文を提出し、かつ最終試験に合格すること。
 〈履修方法〉指導教員の指導のもと履修科目を選択し履修すること。必修科目をすべて履修し、専攻分野専門科目（人文社会学、臨床医学、社会医学は共通科目）から3科目6単位以上（必修科目を含む）を履修する。ただし実践支援看護学領域科目の「看護教育学特論Ⅰ」を受講することを推奨する。

区分	授業科目	配当年次	療養生活支援看護学領域							
			慢性看護学		精神看護学		老年看護学		臨床医学	
			単位数		単位数		単位数		単位数	
			必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択
共通科目	看護倫理	1後	2		2		2		2	
	看護学研究方法論	1前	2		2		2		2	
	看護現任教育論	1後		2		2		2		2
	看護理論	1前	2		2		2		2	
	看護管理学	1後		2		2		2		2
	コンサルテーション論	1後		2		2		2		2
	看護政策論	1前		1		1		1		1
	フィジカルアセスメント論	1前		2		2		2	2	
	臨床薬理学	1後		2		2		2	2	
	病態生理学	1前		2		2		2	2	
	看護哲学	1後		2		2		2		2
	英語論文講読	1通		1		1		1		1
看護学領域 実践支援	看護教育学特論Ⅰ	1前		2		2		2		2
	看護教育学特論Ⅱ	1後		2		2		2		2
	看護教育学演習	1後		2		2		2		2
	看護技術開発学特論Ⅰ	1前		2		2		2		2
	看護技術開発学特論Ⅱ	1前		2		2		2		2
	看護技術開発学演習Ⅰ	1通		2		2		2		2
	看護技術開発学演習Ⅱ	1後～2前		2		2		2		2
療養生活支援看護学領域	移植・再生医療看護学特論Ⅰ	1前		2		2		2		2
	移植・再生医療看護学特論Ⅱ	1後		2		2		2		2
	移植・再生医療看護学演習	1後～2前		2		2		2		2
	がん看護学特論Ⅰ	1前		2		2		2		2
	がん看護学特論Ⅱ	1後		2		2		2		2
	がん看護学援助論Ⅰ	1前		2		2		2		2
	がん看護学援助論Ⅱ	1後		2		2		2		2
	がん看護学演習Ⅰ	1通		2		2		2		2
	がん看護学演習Ⅱ	1後～2前		2		2		2		2
	慢性看護学特論Ⅰ	1前	2			2		2		2
	慢性看護学特論Ⅱ	1前	2			2		2		2
	慢性看護学援助論Ⅰ	1前		2		2		2		2
	慢性看護学援助論Ⅱ	1後		2		2		2		2
	慢性看護学演習Ⅰ	1後		2		2		2		2
	慢性看護学演習Ⅱ	2前		2		2		2		2
	精神看護学特論Ⅰ	1前		2	2			2		2
	精神看護学特論Ⅱ	1前		2		2		2		2
	精神看護学特論Ⅲ	1後		2		2		2		2
	精神看護学アセスメント論	1前		2	2			2		2
	精神看護学援助論Ⅰ	1後		2		2		2		2
	精神看護学援助論Ⅱ	1後		2		2		2		2
	精神看護学治療論	1後		2	2			2		2
	精神看護学演習	2前		2		2		2		2
	老年看護学特論	1前		2		2	2			2
	老年看護学アセスメント論	1前		2		2		2		2
	老年期病態治療論	1前		2		2		2		2
	老年看護学援助論	1後		2		2		2		2
	老年看護学サポートシステム論	1後		2		2		2		2
	老年看護学演習Ⅰ	1通		2		2		2		2
	老年看護学演習Ⅱ	1通		2		2	2			2
地域家族支援看護学領域	家族看護学特論	1前		2		2		2		2
	周産期看護論	1前		2		2		2		2
	母性看護学特論	1前		2		2		2		2
	ウイメンズヘルス看護論	1前		2		2		2		2
	周産期看護援助論Ⅰ	1前		2		2		2		2
	周産期看護援助論Ⅱ	1後		2		2		2		2
	周産期看護演習Ⅰ	1後～2前		2		2		2		2
	周産期看護演習Ⅱ	1後～2前		2		2		2		2
	小児看護学特論	1前		2		2		2		2
	小児と病気	1前		2		2		2		2
	発達障害看護論	前(隔・偶数年度)		2		2		2		2
	小児看護学アセスメント論	1後		2		2		2		2
	小児看護学演習	1後～2前		2		2		2		2
	地域看護学特論	1前		2		2		2		2
	地域ケアシステム特論	1後		2		2		2		2
	地域母子保健論	前(隔・奇数年度)		2		2		2		2
	地域看護学演習	1後～2前		2		2		2		2
	在宅看護学特論Ⅰ	1前		2		2		2		2
	在宅看護学特論Ⅱ	1後		2		2		2		2
	在宅看護学演習	1後～2前		2		2		2		2
特別研究	特別研究	1～2通	8		8		8		8	
合計数			18	126	20	124	18	126	20	124

〈修了要件〉2年以上在学して所定の単位（32単位以上）を修得するとともに必要な研究指導を受け、学位論文を提出し、かつ最終試験に合格すること。
 〈履修方法〉指導教員の指導のもと履修科目を選択し履修すること。必修科目をすべて履修し、専攻分野専門科目（人文社会学、臨床医学、社会医学は共通科目）から3科目6単位以上（必修科目を含む）を履修する。ただし実践支援看護学領域科目の「看護教育学特論Ⅰ」を受講することを推奨する。

区分	授業科目	配当年次	地域家族支援看護学領域									
			母性看護学		小児看護学		地域看護学		在宅看護学		社会医学	
			単位数		単位数		単位数		単位数		単位数	
			必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択
共通科目	看護倫理	1後	2		2		2		2		2	
	看護学研究方法論	1前	2		2		2		2		2	
	看護現任教育論	1後		2		2		2		2		2
	看護理論	1前	2		2		2		2		2	
	看護管理学	1後		2		2		2		2		2
	コンサルテーション論	1後		2		2		2		2		2
	看護政策論	1前		1		1		1		1		1
	フィジカルアセスメント論	1前		2		2		2		2		2
	臨床薬理学	1後		2		2		2		2		2
	病態生理学	1前		2		2		2		2		2
	看護哲学	1後		2		2		2		2		2
	英語論文講読	1通		1		1		1		1		1
看護学領域 実践支援	看護教育学特論Ⅰ	1前		2		2		2		2		2
	看護教育学特論Ⅱ	1後		2		2		2		2		2
	看護教育学演習	1後		2		2		2		2		2
	看護技術開発学特論Ⅰ	1前		2		2		2		2		2
	看護技術開発学特論Ⅱ	1前		2		2		2		2		2
	看護技術開発学演習Ⅰ	1通		2		2		2		2		2
	看護技術開発学演習Ⅱ	1後～2前		2		2		2		2		2
療養生活支援看護学領域	移植・再生医療看護学特論Ⅰ	1前		2		2		2		2		2
	移植・再生医療看護学特論Ⅱ	1後		2		2		2		2		2
	移植・再生医療看護学演習	1後～2前		2		2		2		2		2
	がん看護学特論Ⅰ	1前		2		2		2		2		2
	がん看護学特論Ⅱ	1後		2		2		2		2		2
	がん看護学援助論Ⅰ	1前		2		2		2		2		2
	がん看護学援助論Ⅱ	1後		2		2		2		2		2
	がん看護学演習Ⅰ	1通		2		2		2		2		2
	がん看護学演習Ⅱ	1後～2前		2		2		2		2		2
	慢性看護学特論Ⅰ	1前		2		2		2		2		2
	慢性看護学特論Ⅱ	1前		2		2		2		2		2
	慢性看護学援助論Ⅰ	1前		2		2		2		2		2
	慢性看護学援助論Ⅱ	1後		2		2		2		2		2
	慢性看護学演習Ⅰ	1後		2		2		2		2		2
	慢性看護学演習Ⅱ	2前		2		2		2		2		2
	精神看護学特論Ⅰ	1前		2		2		2		2		2
	精神看護学特論Ⅱ	1前		2		2		2		2		2
	精神看護学特論Ⅲ	1後		2		2		2		2		2
	精神看護学アセスメント論	1前		2		2		2		2		2
	精神看護学援助論Ⅰ	1後		2		2		2		2		2
	精神看護学援助論Ⅱ	1後		2		2		2		2		2
	精神看護学治療論	1後		2		2		2		2		2
	精神看護学演習	2前		2		2		2		2		2
	老年看護学特論	1前		2		2		2		2		2
	老年看護学アセスメント論	1前		2		2		2		2		2
	老年期病態治療論	1前		2		2		2		2		2
	老年看護学援助論	1後		2		2		2		2		2
	老年看護サポートシステム論	1後		2		2		2		2		2
	老年看護学演習Ⅰ	1通		2		2		2		2		2
	老年看護学演習Ⅱ	1通		2		2		2		2		2
地域家族支援看護学領域	家族看護学特論	1前		2		2		2		2		2
	周産期看護論	1前		2				2		2		2
	母性看護学特論	1前		2		2		2		2		2
	ウィメンズヘルス看護論	1前		2		2		2		2		2
	周産期看護援助論Ⅰ	1前		2		2		2		2		2
	周産期看護援助論Ⅱ	1後		2		2		2		2		2
	周産期看護演習Ⅰ	1後～2前		2		2		2		2		2
	周産期看護演習Ⅱ	1後～2前		2		2		2		2		2
	小児看護学特論	1前		2		2		2		2		2
	小児と病気	1前		2		2		2		2		2
	発達障害看護論	前(隔・偶数年度)		2		2		2		2		2
	小児看護学アセスメント論	1後		2		2		2		2		2
	小児看護学演習	1後～2前		2		2		2		2		2
	地域看護学特論	1前		2			2			2		2
	地域ケアシステム特論	1後		2		2		2		2		2
	地域母子保健論	前(隔・奇数年度)		2		2		2		2		2
	地域看護学演習	1後～2前		2		2		2		2		2
	在宅看護学特論Ⅰ	1前		2		2		2		2		2
	在宅看護学特論Ⅱ	1後		2		2		2		2		2
	在宅看護学演習	1後～2前		2		2		2		2		2
特別研究	特別研究	1～2通		8		8		8		8		8
合計数			26	118	22	122	22	122	22	122	20	124

〈修了要件〉2年以上在学して所定の単位（32単位以上）を修得するとともに必要な研究指導を受け、学位論文を提出し、かつ最終試験に合格すること。
 〈履修方法〉指導教員の指導のもと履修科目を選択し履修すること。必修科目をすべて履修し、専攻分野専門科目(人文社会学、臨床医学、社会医学は共通科目)から3科目6単位以上(必修科目を含む)を履修する。ただし実践支援看護学領域科目の「看護教育学特論Ⅰ」を受講することを推奨する。

(2) 高度実践コース

2025 年度入学生用

区分	授業科目	配当 年次	療養生活支援看護学領域												地域家族支援看護学領域					
			がん看護学			慢性看護学			精神看護学			老年看護学			小児看護学			プライマリケア看護学		
			単位数			単位数			単位数			単位数			単位数			単位数		
			必修	選択必修	選択	必修	選択必修	選択	必修	選択必修	選択	必修	選択必修	選択	必修	選択必修	選択	必修	選択必修	選択
共通科目	看護倫理	1後	2			2			2			2			2			2		
	看護学研究方法論	1前	2			2			2			2			2			2		
	看護現任教育論	1後		2			2			2			2			2			2	
	看護理論	1前	2			2			2			2			2			2		
	看護教育学特論Ⅰ	1前			2			2			2			2			2			2
	看護教育学特論Ⅱ	1後			2			2			2			2			2			2
	看護管理学	1後		2			2			2			2			2			2	
	コンサルテーション論	1後		2			2			2			2			2			2	
	看護政策論	1前		1			1			1			1			1			1	
	フィジカルアセスメント論	1前	2			2			2			2			2			2		
	臨床薬理学	1後	2			2			2			2			2			2		
	病態生理学	1前	2			2			2			2			2			2		
	看護哲学	1後			2			2			2			2			2			2
	英語論文講読	1通			1			1			1			1			1			1
療養生活支援看護学領域	がん看護学特論Ⅰ	1前	2				2		2		2		2		2			2		2
	がん看護学特論Ⅱ	1後	2				2		2		2		2		2			2		2
	がん病態治療論	1後	2				2		2		2		2		2			2		2
	がん看護学援助論Ⅰ	1前	2				2		2		2		2		2			2		2
	がん看護学援助論Ⅱ	1後	2				2		2		2		2		2			2		2
	がん看護学演習Ⅰ	1通	2				2		2		2		2		2			2		2
	がん看護学演習Ⅱ	1後～2前	2				2		2		2		2		2			2		2
	がん看護学実習Ⅰ	1後	2																	
	がん看護学実習Ⅱ	1後	2																	
	がん看護学実習Ⅲ	2前	3																	
	がん看護学実習Ⅳ	2前	3																	
	慢性看護学特論Ⅰ	1前			2	2				2			2		2			2		2
	慢性看護学特論Ⅱ	1前			2	2				2			2		2			2		2
	慢性看護学アセスメント論	1後			2	2				2			2		2			2		2
	慢性看護学援助論Ⅰ	1前			2	2				2			2		2			2		2
	慢性看護学援助論Ⅱ	1後			2	2				2			2		2			2		2
	慢性看護学演習Ⅰ	1後			2	2				2			2		2			2		2
	慢性看護学演習Ⅱ	2前			2	2				2			2		2			2		2
	慢性看護学実習Ⅰ	1後				2														
	慢性看護学実習Ⅱ	2通				4														
	慢性看護学実習Ⅲ	2通				4														
	精神看護学特論Ⅰ	1前			2			2	2				2		2			2		2
	精神看護学特論Ⅱ	1前			2			2	2				2		2			2		2
	精神看護学特論Ⅲ	1後			2			2		2			2		2			2		2
	精神看護学アセスメント論	1前			2			2	2				2		2			2		2
	精神看護学援助論Ⅰ	1後			2			2	2				2		2			2		2
	精神看護学援助論Ⅱ	1後			2			2	2				2		2			2		2
	精神看護学治療論	1後			2			2	2				2		2			2		2
	精神看護学演習	2前			2			2	2				2		2			2		2
	精神看護学実習Ⅰ	1後						2												
	精神看護学実習Ⅱ	1年後～2前						6												
	精神看護学実習Ⅲ	2通						2												
	老年看護学特論	1前			2			2		2	2				2			2		2
	老年看護学アセスメント論	1前			2			2		2	2				2			2		2
	老年期病態治療論	1前			2			2		2	2				2			2		2
	老年看護学援助論	1後			2			2		2	2				2			2		2
	老年看護学サポートシステム論	1後			2			2		2	2				2			2		2
	老年看護学演習Ⅰ	1通			2			2		2	2				2			2		2
	老年看護学演習Ⅱ	1通			2			2		2	2				2			2		2
	老年看護学実習Ⅰ	1後										4								
	老年看護学実習Ⅱ	2前										4								
	老年看護学実習Ⅲ	2前										2								

区分	授業科目	配当年次	療養生活支援看護学領域												地域家族支援看護学領域					
			がん看護学			慢性看護学			精神看護学			老年看護学			小児看護学			プライマリケア看護学		
			単位数			単位数			単位数			単位数			単位数			単位数		
			必修	選択必修	選択	必修	選択必修	選択	必修	選択必修	選択	必修	選択必修	選択	必修	選択必修	選択	必修	選択必修	選択
地域家族支援看護学領域	家族看護学特論	1前		2		2		2		2		2		2	2				2	
	周産期看護論	1前		2		2		2		2		2		2		2			2	
	小児看護学特論	1前		2		2		2		2		2		2	2				2	
	小児と病気	1前		2		2		2		2		2		2	2				2	
	発達障害看護論	前(隔・偶数年度)		2		2		2		2		2		2	2				2	
	小児看護アセスメント論	1後		2		2		2		2		2		2	2				2	
	小児看護学演習	1後～2前		2		2		2		2		2		2	2				2	
	小児看護学実習Ⅰ	1後												2						
	小児看護学実習Ⅱ	1後～2前												6						
	小児看護学実習Ⅲ	2通												2						
	地域母子保健論	前(隔・奇数年度)		2		2		2		2		2		2	2				2	
	ヘルスプロモーション論	1前		2		2		2		2		2		2		2	2			
	医療の質保証と安全管理	1通		2		2		2		2		2		2		2	2			
	プライマリケア看護学特論Ⅰ	1前		2		2		2		2		2		2		2	2			
	プライマリケア看護学特論Ⅱ	1前		2		2		2		2		2		2		2	2			
	プライマリケア看護学特論Ⅲ	1後		2		2		2		2		2		2		2	2			
	プライマリケア看護学特論Ⅳ(小児)	1通		2		2		2		2		2		2		2	2			
	プライマリケア看護学特論Ⅴ(成人)	1前		2		2		2		2		2		2		2	2			
	プライマリケア看護学特論Ⅵ(老年)	1後		2		2		2		2		2		2		2	2			
	プライマリケア看護学特論Ⅶ(メンタルヘルス)	1通		2		2		2		2		2		2		2	2			
	プライマリケア看護学演習Ⅰ	1前		2		2		2		2		2		2		2	2			
	プライマリケア看護学演習Ⅱ	1後		2		2		2		2		2		2		2	2			
	プライマリケア看護学実習Ⅰ	1後															2			
	プライマリケア看護学実習Ⅱ	1後															2			
	プライマリケア看護学実習Ⅲ	2前															4			
	プライマリケア看護学実習Ⅳ	2前															2			
特別研究	課題研究	1後～2後	4			4			4			4			4			4		
合計			40	7	89	40	7	89	40	7	89	40	7	89	40	7	89	49	6	81

■がん看護学、慢性看護学、精神看護学、老年看護学、小児看護学専攻

〈修了要件〉2年以上在学して所定の単位（42単位以上）を修得するとともに必要な研究指導を受け、学位論文を提出し、かつ最終試験に合格すること。

〈履修方法〉指導教員の指導のもと履修科目を選択し履修すること。

専攻分野の必修科目をすべて履修し、かつ選択必修科目から1科目2単位以上を履修する。

■プライマリケア看護学専攻

〈修了要件〉2年以上在学して所定の単位（50単位以上）を修得するとともに必要な研究指導を受け、学位論文を提出し、かつ最終試験に合格すること。

〈履修方法〉指導教員の指導のもと履修科目を選択し履修すること。

専攻分野の必修科目をすべて履修し、かつ選択必修科目から1科目2単位以上を履修する。

② 修了者学位論文タイトル一覧

氏 名	コース 専門分野	学位論文タイトル
渡邊 めぐみ	教育研究 看護教育	初回配置転換を経験した看護師の職場適応における関連要因の検討
山中 妙恵子	教育研究 小児	熟練看護師が行なう急性呼吸器疾患で入院した重症心身障害児に対するフィジカルアセスメントの実践
宮崎 さよ	高度実践 プライマリケア	リンパ管細静脈吻合術を繰り返し受ける続発性下肢リンパ浮腫患者のセルフケアの困難さに関する研究
野口 美穂	教育研究 看護教育	新人看護師の職場適応を支えるプロアクティブ行動の関連要因
菅野 楓	教育研究 がん	外来薬物療法を受けている大腸がん患者における症状クラスターの同定と QoL の関連についての研究
秋田 奈々	高度実践 がん	地域で暮らしている進行がん高齢患者の抗がん薬治療中止に関わる困難と対処
佐野 照恵	高度実践 がん	免疫チェックポイント阻害薬を含む化学療法を受けているがん患者の不確かさと Quality of Life との関係および Quality of Life の関連要因についての研究
久家 朱里	高度実践 慢性	レスパイトケアを利用する医療的ケア児の家族介護者から見たケアの質評価の実態と課題
(氏名非公開希望)	高度実践 精神	リエゾン精神看護専門看護師が行うグループを対象にしたコンサルテーションの実践
酒向 なつみ	教育研究 母性	4 か月児を育てる母親と父親の産後ケア事業に対する認識についての実態調査
有吉 真里菜	教育研究 在宅	熟練訪問看護師による在宅脳卒中高齢者の生きがいを支える看護実践

(学位記番号順)

(2) 博士後期課程

① 授業科目一覧

博士後期課程 カリキュラム表

区分		授業科目	配当年次	実践支援 看護学領域			療養生活支援 看護学領域			地域家族支援 看護学領域		
				単位数			単位数			単位数		
				必修	選択 必修	選択	必修	選択 必修	選択	必修	選択 必修	選択
基盤科目		看護科学研究論	1 前	2			2			2		
		看護学研究法応用論 (保健統計)	1 後		1			1			1	
		看護学研究法応用論 (実験法)	1 後		1			1			1	
		看護学教育開発論	1 前		2			2			2	
		英語論文演習	1 前		1			1			1	
		異文化看護論	前(隔・偶数年度)		1			1			1	
専門科目	実践支援 看護学	実践支援看護学特論	1 後	2					2			2
		実践支援看護学演習	2 通	1					1			1
	療養生活 支援看護学	療養生活支援看護学特論	1 後			2	2					2
		療養生活支援看護学演習	2 通			1	1					1
	地域家族 支援看護学	地域家族支援看護学特論	1 後			2			2	2		
		地域家族支援看護学演習	2 通			1			1	1		
特別研究		特別研究	1 ～ 3 通	8			8			8		
合計				13	6	6	13	6	6	13	6	6

〈修了要件〉

3年以上在学して所定の単位（14単位以上）を修得するとともに必要な研究指導を受け、学位論文を提出し、かつ最終試験に合格すること。

〈履修方法〉

指導教員の指導のもと履修科目を選択し履修すること。

専攻領域の必修科目をすべて履修し、かつ選択必修科目から1科目1単位以上を履修する。

② 修了者学位論文タイトル一覧

氏 名	領 域	学位論文タイトル
福田 正道	療養生活	骨転移を有する乳がん患者の疼痛緩和および骨折予防のためのセルフマネジメントを促進する看護介入モデルの開発
波多野 佳栄子	地域家族	中山間地域の限界集落において健康生活を送る高齢者のストレングス尺度の開発

(学位記番号順)

IV. 研究活動

1. 研究実績

1) 外部資金・競争的研究資金等の申請採択状況

2025 年度 科学研究費助成事業交付一覧

(研究代表者)

新規・継続	研究種目	氏名	研究課題名	交付額(円)
新規	基盤研究(C)	真継 和子	世代間交流による地域まるごと共学共創アドバンス・ケア・プランニング推進モデル開発	2,470,000
新規	基盤研究(C)	樋上 容子	センシングデバイスによるせん妄の早期発見・効果的看護介入の実装研究	2,600,000
新規	基盤研究(C)	草野 恵美子	災害による健康危機に地域で備えるシニア世代参画型発達障害児家族支援モデルの検討	1,170,000
新規	基盤研究(C)	川北 敬美	ダイバーシティ&インクルージョンを促進する看護管理者の能力支援プログラムの構築	1,430,000
新規	基盤研究(C)	池西 悦子	新人看護師のリフレクションを促す対話型バーチャル教材によるファシリテーター育成	1,300,000
新規	基盤研究(C)	日高 朋美	新人看護師教育における実地指導者のメタ認知を育む評価尺度の開発と関連要因の検討	2,470,000
新規	基盤研究(B) (基金)	二宮 早苗	女性の骨盤底筋強化を目指した電気刺激(EMS)による臀筋へのアプローチ法の確立	4,160,000
新規	基盤研究(B) (基金)	鈴木 久美	ホウ素中性子捕捉療法を受ける再発頭頸部がん患者のQOLを保つ包括的援助モデル構築	2,210,000
新規	基盤研究(C)	勝山 あづさ	ICU多職種の情報収集プロセスをビジュアル化した次世代リハビリテーション教材の開発	2,860,000
継続	若手研究	大橋 尚弘	腎移植レシピエントへのテラーメイド型セルフマネジメント支援プログラムの開発	1,170,000
継続	基盤研究(C)	中原 洋子	「体罰」や「暴言」等がある親への乳幼児健診からの保健師の継続支援ガイドの考案	520,000
継続	基盤研究(C)	谷水 名美	臓器提供に関わる看護師の倫理的苦悩の実態と倫理教育プログラムの開発	910,000
継続	基盤研究(C)	寺口 佐與子	難治性リンパ浮腫患者の排液路に応じた用手的リンパドレナージ法と圧迫療法の開発	1,560,000
継続	基盤研究(C)	津田 泰宏	訪問看護師を対象にしたPOCUSに特化した超音波トレーニングプログラムの開発	1,170,000
継続	基盤研究(C)	安田 稔人	多血小板血漿を併用したスポーツ選手のアキレス腱断裂術後のスポーツ復帰と腱長の変化	0
継続	基盤研究(C)	山岡 由実	気分障害による長期休職者のための当事者参画・オンラインプログラムの有効性検証	650,000

新規・継続	研究種目	氏名	研究課題名	交付額(円)
継続	基盤研究(C)	小林 道太郎	ケアリングに関する看護理論の哲学的・現象学的検討	650,000
継続	研究活動スタート支援	笹野 奈菜	非医療系学生向けプレコンセプションケアに基づく避妊の動画視聴型性教育アプリ開発	0
継続	基盤研究(C)	山埜 ふみ恵	退職移行期高齢男性の能力を地域に活かす地域職域・連携役割移行支援プログラムの開発	390,000
継続	基盤研究(C)	泊 祐子	高度実践看護師の能力の基盤「理論と実践の融合」を図る思考の発達モデルの生成	390,000
継続	若手研究	南口 陽子	進行がん高齢患者の最期を迎える場に対する意思決定支援モデルの導入による効果の検証	0
継続	基盤研究(C)	倉橋 理香	幼児期の子どもが緊急入院した際の家族を支援するためのアセスメントツールの開発	0
継続	基盤研究(C)	鈴木 美佐	食物アレルギー児の社会的集団生活スキルの獲得過程の解明と支援プログラム構築	0

(研究分担者)

新規・継続	研究種目	氏名	研究課題名	交付額(円)
新規	基盤研究(C)	二宮 早苗	卵巣がん早期発見プログラムの開発ー婦人科系サイレントキラー特性の撲滅に向けてー	39,000
新規	基盤研究(C)	泊 祐子	医療的ケア児と家族を支える多職種協働チームが調整力を発揮できるガイドラインの開発	130,000
新規	基盤研究(C)	伊藤 真理	専門看護師の役割遂行のためのコンピテンシーモデルの構築	104,000
新規	基盤研究(C)	谷水 名美	専門看護師の役割遂行のためのコンピテンシーモデルの構築	39,000
新規	基盤研究(C)	寺口 佐與子	続発性下肢リンパ浮腫初期段階の継続的なセルフケアを支援するプログラムの実装化	65,000
新規	基盤研究(C)	林 優子	集中治療室における患者の家族のレジリエンスを高める援助方法の開発と有用性の検討	130,000
新規	基盤研究(C)	有田 弥棋子	学習する組織の法則を用いた身体拘束回避の標準化院内システムの開発と検証	65,000
継続	基盤研究(C)	草野 恵美子	保健師らのコミュニティケアリング力を高める教育教材と教育プログラムの開発と検証	91,000
継続	基盤研究(C)	中原 洋子	虐待死を予防するエビデンスに基づいた標準化研修プログラムの開発と評価	130,000
継続	基盤研究(C)	鈴木 美佐	ICTを活用した多職種協働プレパレーション研修プログラムの開発	65,000
継続	基盤研究(C)	土手 友太郎	アフターコロナ時代の父親役割移行を促す夫立ち合い分娩支援デジタルツールの効果検証	13,000

新規・継続	研究種目	氏名	研究課題名	交付額(円)
継続	基盤研究(C)	間中 麻衣子	アフターコロナ時代の父親役割移行を促す夫立ち合い分娩支援デジタルツールの効果検証	65,000
継続	基盤研究(C)	近澤 幸	アフターコロナ時代の父親役割移行を促す夫立ち合い分娩支援デジタルツールの効果検証	65,000
継続	基盤研究(C)	笹野 奈菜	アフターコロナ時代の父親役割移行を促す夫立ち合い分娩支援デジタルツールの効果検証	65,000
継続	基盤研究(C)	泊 祐子	在宅移行初期に医療的ケア児の体調管理をする家族のアセスメント支援シートの実用化	195,000
継続	基盤研究(C)	鈴木 久美	患者のがん疼痛セルフマネジメントを高めるための看護師教育プログラムの開発	260,000
継続	基盤研究(C)	鈴木 久美	前立腺がん術後患者の下部尿路症状に対する自己管理支援プログラムの効果検証	39,000
継続	基盤研究(C)	鈴木 久美	骨転移を有するがん患者のセルフマネジメントを促進する看護介入モデルの開発	39,000
継続	基盤研究(C)	鈴木 久美	外来化学療法を受けるがん患者の生きる力を支えるための看護介入モデルの開発	65,000
継続	基盤研究(C)	谷水 名美	RRSを要請する看護師の急変認知力向上にむけた教育的介入の効果について	39,000
継続	基盤研究(C)	小林 道太郎	親・医療者それぞれが考える13・18トリソミー児におけるQOLの解明	65,000
継続	基盤研究(B) (基金)	樋上 容子	説明可能な人工知能(XAI)によるがん患者の精神的・身体的状態予測モデルの開発	325,000
継続	基盤研究(B) (基金)	樋上 容子	軽度認知機能障害者に対する睡眠データを活用したハイブリッド型看護外来の構築	130,000
継続	基盤研究(C)	二宮 早苗	産後女性の骨盤内を可視化したPFMTのデジタルヘルスケアシステムの開発と検証	19,500
継続	基盤研究(C)	中原 洋子	子ども虐待予防における保健師の援助関係づくり尺度の開発とガイドの作成	65,000
継続	基盤研究(C)	中原 洋子	社会経済格差をふまえた保険者別向老期における孤立予防の地域デビュー促進の実装研究	26,000
継続	基盤研究(C)	鈴木 美佐	発育が追いつかない子どもを養育する家族の主体性を育むケアプログラム(FPCS)の開発	39,000
継続	基盤研究(C)	鈴木 美佐	予防接種を受ける子どもの「親のためのプレパレーションガイド」の開発	260,000
継続	基盤研究(C)	小林 道太郎	慢性病者の生を支える現象学的ケアモデル構築の試論	195,000
継続	基盤研究(C)	林 優子	SDMでの重症心不全患者と看護師の相互作用を基盤とした状況特定理論の構築	39,000
継続	基盤研究(C)	川北 敬美	看護学士課程における臨床判断能力を高める統合実習モデルの開発	26,000

新規・継続	研究種目	氏名	研究課題名	交付額(円)
継続	基盤研究(C)	森 瞳子	発達障害児におけるこども観察シート(COS)の臨床での活用に向けた簡略版の開発	130,000
継続	学術変革領域研究(A)	小林 道太郎	「態度適合理論/分析」に基づいて「尊厳」を「絶対的価値」として分析すること	390,000
継続	基盤研究(C)	草野 恵美子	乳幼児をもつがんサバイバーである母親のコミュニティ・エンパワメントモデルの開発	50,000
継続	基盤研究(C)	久保田 正和	【2024/07転出】女性の生涯発達に関連した脳機能基盤の解明	0
継続	挑戦的研究(開拓)	鈴木 久美	がん薬物療法を受ける患者の包括的がん悪液質アセスメントツールの開発と実装	195,000

AMED・厚労科研費・各省庁・民間助成金

代表・分担	事業名	研究分担者	研究課題名	交付額(円)
分担	こども家庭科学研究費補助金 成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業	草野 恵美子	こども家庭センター（母子保健機能）における効果的な母子保健事業を推進するための研究	500,000
代表	2024年度（後期）一般公募「在宅医療推進のための研究」	秋田 奈々	地域で暮らしている進行がん高齢患者の抗がん薬治療中止における体験	346,000
代表	令和7年度（第36回）研究助成・事業助成・ボランティア活動助成	山本 裕子	地域で暮らす慢性心不全患者の個別性に応じたIoT活用セルフケア支援の有効性検証	350,000
代表	2025年度がん看護に関わる高度実践看護師海外研修事業公募	佐野 照恵	研修：University of California, San FranciscoのCancer Center（がん専門外来センター）	600,000
代表	2025年度 国際学会発表助成	谷水 名美	日本における肝移植を受けたレシピエントへの退院後の生活に向けた看護支援の実態	200,000
代表	第23回（2025年度）SGH看護特別賞	鈴木 久美	女性のためのがん啓発教育プログラムの開発とその有効性と有効性に関する研究	1,000,000
代表	2025年度がん研究助成奨励金	福井 みなみ	化学放射線療法を受けた頭頸部がん患者の診断期から治療後に至る経験の探求	300,000

2) 各自の業績（外部資金獲得除く）

- 1 **Amano K, Suzuki K.**
Factors associated with quality of life in post-prostatectomy patients with cancer who experience lower urinary tract symptoms: A cross-sectional study
Urologia Journal, 2025; 92(4): 617-629. PMID: 40539561 doi: 10.1177/03915603251345029
- 2 **Doi T, Shimizu Y.**
Testing the reliability and validity of a newly graduated nurses' teaching experience scale
PLoS One, 2026; 21(2): e0343270. PMC: 12923036 doi: 10.1371/journal.pone.0343270
- 3 **Fukuda M, Suzuki K.**
Pain and Skeletal-Related Events and Their Management Strategies by Nurses in Cancer Patients with Bone Metastases: A Scoping Review
Bulletin of Osaka Medical and Pharmaceutical University, 2026; 72(1): 1-15
- 4 **Fukuda M, Suzuki K.**
The Self-management Process of Pain and Pathological Fracture Risk in Breast Cancer Patients with Bone Metastases: A Qualitative Study
Bulletin of Osaka Medical and Pharmaceutical University, 2026; 72(1): 16-30
- 5 **Hidaka T, Hosoda Y.**
Exploring Preceptors' Metacognition in Novice Nurse Instruction: A Qualitative Descriptive Study
Creat Nurs, 2026; 32(1): 85-94. PMID: 41417839 doi: 10.1177/10784535251406330
- 6 **Higuchi A, Tanaka H, Higami Y, Maeda I, Kinoshita A, Fukui S.**
Monitoring Activity-Rest Rhythms in Terminal Cancer Using Nonwearable Devices: A Preliminary Observational Study
European Journal of Cancer Care, 2025; Volume 2025(Article ID 5171946, 13 pages): n/a-n/a. <https://doi.org/10.1155/ecc/5171946>
- 7 **Hitoshi K, Ikeda N, Kutsuna T, Kugai H, Ohashi T, Kunitsu Y, Sofue T, Fujii N, Saitoh M, Narita I, Yamagata K, Hoshino J, Kosaka S.**
Effectiveness of comprehensive medical care support by healthcare professionals, including nurses, in patients with chronic kidney disease: A systematic review and meta-analysis
Renal Replacement Therapy, 2026; 12:5: 1-19. <https://doi.org/10.1186/s41100-026-00704-4>
- 8 **Iwase K, Yamakawa M, Higo M, Higami Y, Okumoto A, Koujiya E, Takeya Y, Ikeda M.**
Integrating Sleep Monitoring With Health Guidance: An Exploratory Study of Sleep Management in Older Adults
Psychogeriatrics, 2025; 25(6): e70098. PMID: 40983589 doi: 10.1111/psyg.70098
- 9 **Johnson E, Bunt H, van Daatselaar A, Van Daele A, Demedts D, Glösmann J, Jaipang C, Kovane P, Schulze J, Söholm C, Tscherne U, Tobita I, de Ruiter H-P.**
The CRIISIS COIL model: advancing equitable global allied health and nursing education
Frontiers in Education, 2026; 11. doi: 10.3389/educ.2026.1711755
- 10 **Katsuyama A, Akazawa C.**
Barriers to Multiprofessional Information Sharing for Early Mobilization in the Intensive Care Unit: A Qualitative Descriptive Study
Creative Nursing, 2026; 32(1): 141-152. PMID: 41032693 doi: 10.1177/10784535251379558

- 11 Kutsuna T, Kugai H, Ohashi T, Kunitsu Y, Hitoshi K, Ikeda N, Sofue T, Fujii N, Saitoh M, Narita I, Yamagata K, Hoshino J, Kosaka S.
Effectiveness of comprehensive medical care support by healthcare professionals, including nurses, in patients undergoing hemodialysis: a systematic review and meta-analysis
Renal Replacement Therapy, 2026; 12:6: 1-16. <https://doi.org/10.1186/s41100-026-00705-3>
- 12 Matsueda K.
Effect of a sleep-support intervention program designed for primiparous women and infants up to 2 months postpartum: A non-randomized controlled trial
Japan Journal of Nursing Science, 2026; 23(1): e70042. <https://doi.org/10.1111/jjns.70042>
- 13 Somaki S, Majima Y.
Effectiveness and Challenges of a Home-Visit Nursing Information Sharing System Using a 360-Degree Camera and Wearable Camera: A Pilot Study
Studies in Health Technology and Informatic, 2025; 329(1): 1604-1605. PMID: 40776140 <https://doi.org/10.3233/SHTI251123>
- 14 Takemura A, Ogata K, Kaji M, Arita M, Ikeda N, Kamii K, Nagai N, Yamauchi S, Katsuyama A, Tobita I.
Survey on Support for Foreign Patients at a University Hospital
Bulletin of Osaka Medical and Pharmaceutical University, 2025; 71(1): 24-32. https://doi.org/10.69188/bullompu.71.1_24
- 15 Tanaka K, Shima H, Toge K, Hirai Y, Yasuda T, Otsuki S.
Postural stability in patients with bilateral hallux valgus-Does the comorbid hammer toe affect stability?
Foot and Ankle Surgery, 2025; 31(8): 732-736. PMID: 40360353 doi: 10.1016/j.fas.2025.05.002
- 16 Tanimizu N, Hayashi Y, Kobayashi H, Miyakawa S.
Certified Nurse Specialists' Ethical Practices in Critical Care Nursing
Bulletin of Osaka Medical and Pharmaceutical University, 2025; 71(1): 7-15. https://doi.org/10.69188/bullompu.71.1_7
- 17 Terada S, Godai K, Kabayama M, Kido M, Akagi Y, Akasaka H, Takami Y, Nakagawa T, Yasumoto S, Gondo Y, Ikebe K, Arai Y, Masui Y, Hirata T, Yamamoto K, Kamide K.
Prevalence of high N-terminal prohormone of brain natriuretic peptide levels and associated factors among community-dwelling older adults aged over 75 years (The SONIC study): a cross-sectional study
BMC Research Notes, 2025; 18(224): 1-9. PMID: 40394678 <https://doi.org/10.1186/s13104-025-07280-6>
- 18 Terada S, Godai K, Kabayama M, Kido M, Akagi Y, Maus M, Akasaka H, Takami Y, Nakagawa T, Yasumoto S, Gondo Y, Ikebe K, Arai Y, Masui Y, Hirata T, Yamamoto K, Kamide K.
Association Between Serum N-Terminal Prohormone of Brain Natriuretic Peptide (NT-proBNP) Levels and Frailty in Community-Dwelling Old-Old Older Adults — SONIC Study —
Circulation Reports, 2025; 7: 965-972. PMID: 41081266 <https://doi.org/10.1253/circrep.cr-25-0110>
- 19 Yoshida S, Imazu Y, Kanno K, Nakayama Y, Miyashita M, Suzuki K.
Cancer nursing preparedness for natural disasters: A cross-sectional survey of the members of the Japanese Society of Cancer Nursing
Asia-Pacific Journal of Oncology Nursing, 2025; 12(1): 1-9. PMID: 41503177 doi: 10.1016/j.apjon.2025.100821
- 20 青山 芽久、赤澤 千春、寺口 佐與子.
二次救急医療機関における高齢患者への救急外来看護実践の構造
大阪医科薬科大学看護研究雑誌, 2026; 16(1): 221-228

- 21 **赤崎 美美、日高 朋美、野口 美穂、二宮 早苗。**
統合看護学実習に向けた客観的臨床能力試験（OSCE）導入の試み：教員の視点から捉えた OSCE の教育的意義と今後の課題
大阪医科薬科大学看護研究雑誌, 2026; 16(1): 82-88
- 22 **有田 弥棋子、加藤 真由美。**
臨地実習指導者と大学教員が認識する看護実習生の責任ある行動
日本看護学会誌, 2025; 45: 164-177. <https://doi.org/10.5630/jans.45.164>
- 23 **飯田 真実子、鈴木 久美、南口 陽子。**
子宮頸がんにより手術療法を受けた未婚若年患者のセクシュアリティに関する体験
大阪医科薬科大学看護研究雑誌, 2026; 16(1): 31-45
- 24 **大橋 尚弘、古川 亜衣美、古川 正紘。**
訪問看護における Digital Health 技術の活用：A Scoping Review
大阪医科薬科大学看護研究雑誌, 2026; 16: 3-19
- 25 **小笠 美春、林 直子、麻生 咲子、入澤 裕子、沖村 愛子、佐藤 まゆみ、高橋 奈津子、宮下 光令、鈴木 久美。**
日本がん看護学会の 45 歳未満の会員を対象とした研究活動支援ニーズの調査
日本がん看護学会誌, 2025; 39(1): 101-107. doi : 10.18906/jjscn.39_101_ogasa
- 26 **川北 敬美、日高 朋美、野口 美穂、赤崎 美美、二宮 早苗、池西 悦子、安田 稔人、津田 泰宏。**
看護学生における「フィジカルアセスメント」の教育評価：基礎看護学実習Ⅱ前後の経験と自信の比較から
大阪医科薬科大学看護研究雑誌, 2026; 16(1): 73-81
- 27 **菅野 楓、鈴木 久美、南口 陽子。**
がん薬物療法中の患者が体験する複数の症状と QoL の関連：文献レビュー
大阪医科薬科大学医学会雑誌, 2025; 84(1): 45-56. doi: 10.57371/0002000520
- 28 **小坂 志保、伊藤 美和子、岡 美智代、大橋 尚弘、久貝 波留菜、濱田 昌実、松村 直子、吉田 恵美。**
第 27 回日本腎不全看護学会・学術集会 研究相談コーナー 実施報告書
日本腎不全看護学会誌, 2025; 27(1): 7-8. <https://doi.org/10.11477/mf.134473270270010007>
- 29 **小坂 志保、濱田 昌実、松村 直子、大橋 尚弘、久貝 波留菜、吉田 恵美、伊藤 美和子、岡 美智代。**
保存期 CKD 患者における看護実践及び成果評価に関する実態調査 第 1 報
日本腎不全看護学会誌, 2025; 27(1): 11-22. <https://doi.org/10.11477/mf.134473270270010011>
- 30 **小坂 志保、濱田 昌実、松村 直子、大橋 尚弘、久貝 波留菜、吉田 恵美、伊藤 美和子、岡 美智代。**
保存期 CKD 患者における看護実践及び成果評価に関する実態調査 第 2 報
日本腎不全看護学会誌, 2025; 27(2): 35-47. <https://doi.org/10.11477/mf.134473270270020035>
- 31 **里 彩香、大橋 尚弘。**
神経・筋難病をかかえる療養者への意思伝達支援の実際と課題：国内文献レビュー
大阪医科薬科大学看護研究雑誌, 2026; 16: 182-194
- 32 **千田 美紀子、池西 悦子、川北 敬美。**
国内外における発達障害特性のある看護系大学生の教育的支援に関する文献検討
大阪医科薬科大学看護研究雑誌, 2026; 16(1): 159-172
- 33 **津田 泰宏。**
我が国の訪問診療での看護師の超音波診断装置の利用状況とその教育に関する文献検討
大阪医科薬科大学看護研究雑誌, 2026; 16: 211-220

- 34 **土肥 美子、細田 泰子、日高 朋美.**
看護系大学に所属する若手教員の能力形成・向上に資する教育支援—若手教員と上位職教員へのフ
ォーカス・グループインタビュー調査から—
大阪医科薬科大学看護研究雑誌, 2026; 16: 62-72
- 35 **飛田 伊都子、岸村 厚志.**
応用行動分析を基盤とした ABC 分析：医療現場における行動変容への実践的介入
日本保健医療行動科学会雑誌, 2025; 40(1): 34-38
- 36 **中原 洋子、上野 昌江.**
妊娠届出時アセスメント指標と出産後の母親の精神的健康、児への思い、育児との関連
小児保健研究, 2026; 85(2): 1-20
- 37 **中原 洋子、濱浦 弘美、山埜 ふみ恵、草野 恵美子、奥村 智人、島川 修一.**
学習に関する発達特性のある児童を育てる家族の困りごとと支援ニーズ
大阪医科薬科大学看護研究雑誌, 2026; 16(1): 139-148
- 38 **野瀬 珠美、飛田 伊都子、戸田 満秋.**
手術室における器械出し看護師の行動特性 —新人看護師とエキスパート看護師の比較を通して—
日本看護医療学会誌, 2025; 27(2): 54-62
- 39 **長谷川 菜々子、草野 恵美子、山埜 ふみ恵.**
AI とヘルスリテラシーとの関連に関する文献検討
大阪医科薬科大学看護研究雑誌, 2026; 16(1): 173-181
- 40 **福井 みなみ、鈴木 久美、南口 陽子.**
治療過程において頭頸部がん患者が体験している困難について：文献レビュー
大阪医科薬科大学看護研究雑誌, 2026; 16(1): 195-210
- 41 **松枝 加奈子.**
産後 2 ヶ月までの初産婦の睡眠覚醒リズムを整える支援プログラムによる母親役割獲得への効果
日本母性看護学会誌, 2025; 26(1): 63-69. https://doi.org/10.32305/jjsmn.26.1_63
- 42 **松枝 加奈子.**
母親と乳児の睡眠覚醒リズムを整える支援プログラム
乳幼児医学・心理学研究, 2025; 34(1): 12-17. https://doi.org/10.82622/jjmpsi.34.1_12
- 43 **松枝 加奈子、笹野 奈菜、酒向 なつみ、間中 麻衣子.**
産後 3 か月までの父親のコペアレネティングと関連要因に関する文献レビュー
大阪医科薬科大学看護研究雑誌, 2026; 16(1): 149-158
- 44 **間中 麻衣子、池西 悦子.**
看護大学における学生支援体制の研究動向と本学のチューター制度の課題
大阪医科薬科大学看護研究雑誌, 2026; 16: 98-109
- 45 **村上 佳栄子、草野 恵美子.**
中山間地域の限界集落で健康生活を送る高齢者のストレングスに関する文献レビュー
日本農村医学会雑誌, 2025; 74(4): 360-371. <https://doi.org/10.2185/jjrm.74.360>
- 46 **村上 佳栄子、草野 恵美子.**
中山間地域の限界集落において健康生活を送る高齢者のストレングス尺度の開発
日本看護科学会誌, 2025; 45: 1033-1044. <https://doi.org/10.5630/jans.45.1033>

- 47 森 つばさ、飛田 伊都子.
日本人プリセプターが在日中国人看護師の支援において経験した文化差による困難とその対処
大阪医科薬科大学看護研究雑誌, 2026; 16: 110-121
- 48 安田 稔人、嶋 洋明、東迎 高聖、平井 佳宏、田中 憲、高島 雅俊、大槻 周平.
スポーツ選手のアキレス腱断裂に対する多血小板血漿を用いた腱縫合術と術後早期運動療法併用の
治療成績
日本足の外科学会雑誌, 2025; 46(1): 166-168
- 49 山中 政子、飯田 幸恵、中村 直美、阿部 修子、佐藤 明美、中村 巳保子、鈴木 久美.
通院患者のがん疼痛セルフマネジメントを促進する看護介入プログラムの有効性非ランダム化比較
試験
Palliative Care Research, 2025; 20(4): 209-215. doi: 10.2512/jspm.20.209
- 50 山本 里香、鈴木 久美.
専門的緩和ケアに携わる看護師による終末期がん患者のスピリチュアルペインに対する看護実践
大阪医科薬科大学看護研究雑誌, 2026; 16(1): 46-61
- 51 和田山 智子、飛田 伊都子、山田 利恵、高野 佳子、志摩 久美子、久保 大安.
人工呼吸器の確認を記録する機器の開発：臨床現場における病棟看護師の使用可能性の検証
医療の質・安全学会誌, 2025; 20(2): 125-127
- 52 和田山 智子、飛田 伊都子、山田 利恵、高野 佳子、志摩 久美子、松村 由美、平松 八重子、荒木
尚美、久保 大安.
病棟看護師を対象にした人口呼吸器の確認行動促進を目指した応用行動分析学的プログラムの効
果：確認時刻の測定機器を用いて
医療の質・安全学会誌, 2025; 20(4): 389-398

V. 社会活動

赤崎芙美	看護キャリアサポートセンター，講師・補助 日本看護学教育学会第 36 回学術集会，事務局 カムカムサロン，運営 たかつき NPO 協働フェスタ（大阪医科薬科大学看護学部ブース），運営 赤崎芙美. (2026). 集まる つながる 広がる 若手研究者のバトン（第 44 回）現場で働く看護師の力になりたい！エビデンスと実践を繋ぐナレッジブローカーの挑戦. 看護研究, 59(1), 1-5.
有田弥棋子	大阪医科薬科大学看護研究雑誌，査読 カムカムサロン，講師 第 6 回 研究カフェ，講師 大阪医科薬科大学薬学部市民講座 薬用植物園見学会，運営補助 金沢大学大学院医薬保健学総合研究科，講師 日本リハビリテーション看護学会，運営補助・査読・座長 日本協同教育学会 認定コースワークショップ（ベーシック），運営補助 清恵会医療専門学院看護学科，講師
有吉真里菜	大阪医科薬科大学家族看護研究会，企画・運営 在宅看護研究会，企画・運営
近澤 幸	日本母性看護学会，査読委員 日本母性看護学会誌，査読 大阪医科薬科大学看護研究雑誌，査読 第 27 回日本母性看護学会学術集会，査読 日本看護学教育学会第 36 回学術集会，企画運営委員 高槻地区周産期地域連携の会，事務局 大阪医科大学大学院看護学研究科母性看護学領域修了生の会「サクラの会」，運営 大阪医科薬科大学看護学部 助産師同窓会「花ももの会」，運営 大阪医科薬科大学リプロダクティブヘルス研究会，運営 大阪医科薬科大学看護学部同窓会，副会長 関森みゆき，定方美恵子，関島香代子，小澤淳子，井村真澄，柳生田紀子，西方真弓，佐々木綾子，竹明美，近澤幸，中込さと子，小林康江，高岡智子，横尾京子，村上真理，藤本紗央里 (2025). ナーシンググラフィカ母性看護学③母性看護技術，荒木奈緒，中込さと子，小林康江（編），2 章 17 節帝王切開時のケア，131-137，メディカ出版，大阪 池西静江，大江真吾，近澤幸他 (2025). メディカコンクール 2025 第 115 回看護師国家試験対策テスト第 1 回，メディカコンクール委員会，メディカ出版，大阪

	池西静江, 塩崎直子, 近澤幸他 (2025). メディカコンクール 2025 第 115 回看護師国家試験対策テスト第 2 回, メディカコンクール委員会, メディカ出版, 大阪
土井智生	大阪医科薬科大学看護キャリアサポートセンター, センター員, 講師 カムカムサロン, 講師 日本看護学教育学会第 36 回学術集会, 企画運営委員
土手友太郎	高槻市役所, 産業医 健康たかつき 21 推進ネットワーク会議, 委員 高槻市ぱちんこ遊技場建築審議会, 委員 高槻市ホテル等建築審議会, 委員 高槻市都市開発審議会, 委員 厚生労働省 (大阪検疫所), 医員 日本職業災害医学会, 評議員 日本衛生学会, 評議員 カムカムサロン, 運営・講師 たかつき NPO 協働フェスタ (大阪医科薬科大学看護学部ブース), 企画・運営
濱浦弘美	特記なし
日高朋美	大阪医科薬科大学看護キャリアサポートセンター, 講師・補助者 日本看護学教育学会第 36 回学術集会, 企画運営委員 Creative Nursing, 査読 日高朋美 (2025). 看護教育, メタ認知を育む実地指導者研修の提案, 706-711, 医学書院, 東京. 日高朋美 (2025). オン・ナーシング, 指導改善に役立つ実地指導者のメタ認知, 89-93, メディカ出版, 大阪.
樋上容子	高槻市地域包括ケア推進会議, 委員 日本看護科学学会, 看護ケア開発・標準化委員会, 委員 日本老年看護学会国際交流委員会, 委員 日本老年医学会, Geriatrics & Gerontology International, Associate editor 日本看護科学学会雑誌和文誌編集委員会, 編集委員(2026, 3 終了) 日本老年看護学会日本老年看護学雑誌, 査読委員 日本老年看護学会第 31 回学術集会, 査読委員 日本看護学教育学会第 35 回学術集会, 企画運営委員 The Japan Centre for Evidence Based Practice, 委員 大阪大学大学院医学系研究科, 招聘教授 大阪大学 一般教養科目, 非常勤講師 樋上容子 (分担執筆) (2025). 社会実装を目指すヘルスケアサービスの研究デザイン&ガイド, 日本医療研究開発機構, 池田学, 岩瀬

	敬佑, 梅村和弘ら, 1-39. https://healthcare-service.amed.go.jp/assets24/pdf/guidelines_251015.pdf
池西悦子	日本看護科学学会, 代議員 日本看護科学学会, 会則等委員会委員 日本看護管理学会, 評議員 日本看護管理学会, 専任査読委員 日本看護研究学会, 専任査読委員 日本看護研究学会 近畿・北陸地方会, 世話人 日本看護学教育学会, 評議員 日本看護学教育学会, 専任査読委員 日本看護学教育学会第 35 回学術集会, 企画委員 日本看護学教育学会第 35 回学術集会, 会長講演座長 日本看護学教育学会第 36 回学術集会, 会長 日本看護学会誌, 専任査読委員 日本看護学教育評価機構, 評価員 日本臨床整形外科学会倫理審査委員会, 委員 岐阜県立看護大学大学院看護学研究科, 非常勤講師 兵庫県立大学大学院看護学研究科, 非常勤講師 愛知県看護研修研究センター実習指導者講習会, 講師 愛知県看護研修研究センター実習指導者講習会フォローアップ研修, 講師 京都私立病院協会看護中間管理者研修 I, 講師 大阪医科薬科大学病院 看護師長対象「リフレクション研修」, 講師 神戸常盤大学保健科学部看護学科 臨地実習指導者研修会, 講師 大阪医科薬科大学看護キャリアサポートセンター, 講師 池西悦子 (2025)「看護人材育成」特集 2「つまづいている学生, ドロップアウトしそうな学生をどう支援する? チューター制度を活用した学生支援のあり方」, 22(3), 56 - 62, 日総研.
伊藤真理	日本エンドオブライフケア学会, 専任査読委員 大阪医科薬科大学看護研究雑誌, 査読者 第 2 回日本高度実践看護学会学術集会, 企画委員 日本エンドオブライフケア学会第 8 回学術集会, 講師 第 21 回日本クリティカルケア看護学会学術集会, 座長 第 1 回日本高度実践看護学会学術集会, 一般演題, 座長 大阪医科薬科大学看護キャリアサポートセンター, 講師 カムカムサロン, 企画・運営
勝山あづさ	日本看護学教育学会第 36 回学術集会, 企画運営委員 医療の質・安全学会第 20 回学術集会, 企画運営委員

	第 11 回医療行動分析学研究会，実行委員 人材育成教育セミナー，企画/運営 第 11 回市民看護講座，企画/運営 第 9 回大阪医科薬科大学看護研究会，企画/運営 カムカムサロン，講師/運営 2025 年度 International Day，企画/運営 国際関連学生 OB・OG 会（NEXT），運営
川北敬美	日本看護管理学会誌，編集委員 日本看護科学学会和文誌，専任査読委員 大阪医科薬科大学看護研究雑誌，査読者 第 36 回日本看護教育学会学術集会，企画委員 大阪医科薬科大学看護キャリアサポートセンター，講師 第 29 回日本看護管理学会学術集会編集委員会企画，企画・運営 第 29 回日本看護管理学会学術集会，一般演題，座長
小林道太郎	臨床実践の現象学会，事務局・編集委員長 中部哲学会，常任委員・編集委員 日本看護学教育学会第 36 回学術集会，企画運営委員 神戸市看護大学大学院，非常勤講師 岡崎市立看護専門学校，非常勤講師 愛仁会看護助産専門学校，非常勤講師
倉橋理香	大阪医科薬科大学家族看護研究会，企画・運営 日本家族看護学会 第 32 回学術集会交流集会，企画・運営 つながろう難病キャンプ in 関西，ボランティア 日本看護学教育学会第 36 回学術集会，企画運営委員
草野恵美子	日本小児保健協会若手による小児保健検討委員会，委員 日本地域看護学会教育委員会，委員 全国保健師教育機関協議会教育課程委員会，委員長 一般社団法人日本看護系大学協議会データベース委員会，委員 日本地域看護学会「日本地域看護学会誌」，査読委員 日本公衆衛生看護学会「日本公衆衛生看護学会誌」，査読委員 日本在宅ケア学会「日本在宅ケア学会誌」，査読委員 日本看護科学学会和文誌，選任査読委員 日本地域看護学会第 30 回学術集会，企画委員 協和キリン WEB セミナー，座長 河内長野市母子研修会，講師 高槻市子ども未来部子ども保健課・河内長野市健康推進課，研究協力
間中麻衣子	日本母性看護学会誌，査読委員 大阪医科薬科大学看護研究雑誌，査読 大阪医科薬科大学看護学部同窓会役員，会計監査

	大阪医科薬科大学リプロダクティブヘルス研究会，運営 大阪医科薬科大学大学院看護学研究科母性看護学領域修了生の会「はなもも・サクラの会」，運営 高槻地区周産期地域連携の会，事務局補佐
松枝加奈子	日本母性看護学会誌，査読委員 継続セミナー，企画/運営 たかつき NPO 協働フェスタ（大阪医科薬科大学看護学部ブース），企画/運営 第 11 回市民看護講座，運営 カムカムサロン，企画/運営 日本看護学教育学会第 36 回学術集会，企画運営委員 大阪医科薬科大学看護研究雑誌，査読 Environmental Research，査読 大阪医科薬科大学大学院看護学研究科母性看護学領域修了生の会「はなもも・サクラの会」，運営
真継和子	日本看護研究学会，評議員 日本看護系大学協議 JUNPU ナースプラクティショナー資格認定委員会，委員 日本看護系大学協議 APN グランドデザイン委員会，委員 日本看護研究学会近畿・北陸地方会，幹事 日本家族看護学会編集委員会，編集委員 日本看護学教育学会，専任査読者 ヒューマンケア研究学会誌，専任査読委員 大阪医科大学看護研究雑誌，査読者 第 35 回日本看護学教育学会学術集会，企画委員 第 36 回日本看護学教育学会学術集会，事務局長 日本看護研究学会第 51 回学術集会，企画委員 日本看護研究学会第 51 回学術集会，一般口演，座長 日本看護研究学会近畿・北陸地方会，世話人 四條畷学園大学，非常勤講師 和歌山県立医科大学大学院保健看護学研究科，非常勤講師 京都私立病院協会看護中間管理職研修，講師 社会医療法人愛仁会高槻病院看護研究，講師 大阪医科薬科大学看護キャリアサポートセンター，講師 大阪医科薬科大学在宅看護研究会，企画・運営，オブザーバー 倫理事例検討会，アドバイザー
南口陽子	大阪大学大学院医学系研究科，招へい教員 日本がん看護学会誌，査読委員 第 40 回日本がん看護学会学術集会，企画委員

	第 40 回日本がん看護学会学術集会，パネルディスカッション座長 大阪医科薬科大学看護キャリアサポートセンター，講師 Journal of Pharmaceutical Health Care and Sciences, Reviewer 大阪医科薬科大学看護研究雑誌，査読 鈴木久美，南口陽子（2026）．第 4 章 がん患者および家族を包括的に 理解し，がんと共生における多様なニーズに応じて支援する能力 に関するキーワード，32 QOL，藤田佐和（編），ケアの基盤をつく るがん看護実践を支えるキーワード 70－事例でひもとく看護実践 への活用，107-111，南江堂，東京．
森瞳子	大阪医科薬科大学看護研究雑誌，査読 大阪医科薬科大学家族看護研究会，企画・運営 日本家族看護学会 第 32 回学術集会交流集会，企画・運営 糖尿病キャンプ（大阪くるみの会），ボランティア 小児看護研究会（大学院博士前期・後期課程，修了生合同ゼミ），運営 大阪公立大学現代システム科学域教育福祉学類，非常勤講師
中原洋子	日本公衆衛生看護学会誌，編集委員 大阪市こども・子育て支援会議教育・保育・子育て支援部会，委員 保健師による親子ヘルス&サポート推進協会研修委員会，委員長 大阪医科薬科大学看護研究雑誌，査読 こども家庭ソーシャルワーカー研修（早稲田大学），講師 大阪府内保健師児童虐待予防研修，企画・運営・司会 公衆衛生看護学分野保健師卒業生同窓会，運営
二宮早苗	看護理工学会，理事・評議員 看護理工学会，学術委員会委員長 看護理工学会，倫理委員会副委員長 日本老年泌尿器科学会，評議員 看護理工学会，第 13 回学術集会運営委員 日本看護技術学会，第 23 回学術集会運営委員 日本看護学教育学会，第 36 回学術集会事務局・会計 日本看護研究学会近畿・北陸地方会，世話人 日本看護研究学会近畿・北陸地方会，セミナー委員 日本看護研究学会近畿・北陸地方会第 38 回看護研究セミナー，企画・ 運営・ファシリテーター 看護理工学会第 13 回学術集会，講師 日本看護技術学会第 23 回学術集会 シンポジウム，座長 看護理工学会誌，査読 日本女性骨盤底医学会誌，査読 NHK 総合（全国放送），あしたが変わるトリセツショー「尿もれ」， 初回放送日 2025 年 6 月 12 日），出演（研究・開発した骨盤底筋ト

	レーニング法の解説) NHK ラジオ第一放送, マイあさ! 「健康ライフ」にて紹介, 放送日 2025 年 7 月 22 日午前 5 時 36 分~44 分, 研究・開発した骨盤底筋 トレーニング法の紹介 株式会社花王, 公式ウェブサイト「尿もれお悩み解決ナビ」 たった これだけ! 骨盤底筋トレーニング Neo で始める「尿もれ」対策, 監 修 二宮早苗, 他 (2025). NiCE 母性看護学 I 概論・ライフサイクル 改訂第 4 版, 齋藤いずみ, 他 (編), 第 VII 章 3. 骨盤臓器脱・排尿 障害 (下部尿路症状), 258-261, 南江堂, 東京
野口美穂	特記なし
野瀬珠美	日本手術看護学会, 理事 日本手術看護学会 認定看護師委員会, 委員 日本手術看護学会 教育統括委員会, 委員 日本手術看護学会 CN ワーキンググループ, リーダー 日本手術看護学会 実践指導看護師認定審査委員会, 委員 日本麻酔科学会 周術期管理チーム認定試験問題対策ワーキンググル ープ, メンバー 日本手術看護学会 認定看護師企画 第 3 回情報交換会継続看護, 企画 運営 第 39 回日本手術看護学会年次大会 手術看護認定看護師実践報告会, 司会 日本慢性期医療協会 研究プロジェクト「慢性期医療の質の評価・向 上に関する調査研究」, 分担研究者 医療の質・安全学会第 20 回学術集会, 企画運営委員
大橋尚弘	医笑寿株式会社いえすりハビリ訪問看護ステーション, 顧問 日本腎臓リハビリテーション学会, 診療ガイドライン作成 WG 委員 日本腎臓リハビリテーション学会, SR チーム(看護), サブリーダー 日本腎不全看護学会, 研究委員会委員 日本腎不全看護学会, 専任査読委員 日本移植・再生医療看護学会, 広報委員会委員 日本移植・再生医療看護学会, 専任査読者 日本腎臓リハビリテーション学会, 講師 日本腎不全看護学会, 第 5 回研究倫理セミナー, 企画・運営 日本腎不全看護学会, 第 6 回研究倫理セミナー, 企画・運営責任者 日本腎不全看護学会第 28 回学術集会, 研究委員会・編集委員会合同 交流セミナー, 企画・運営, 司会, アドバイザー 日本腎不全看護学会第 28 回学術集会, 腎臓リハビリテーション学会 交流セミナー, 運営

	日本腎不全看護学会第 28 回学術集会，研究委員会主催研究相談コーナー，企画・運営・アドバイザー 看護キャリアサポートセンター，講師 カムカムサロン，運営，講師 オープンキャンパス模擬講義，講師 日本腎不全看護学会，研究委員会，保存期CKD実態調査メンバー 公益財団法人医療科学研究所，第 33 回助成研究分担者 大阪大学情報科学研究科スタートアッププログラム「対話型生成 AI を活用した対話能力を可視化する看護教育システムの開発」，研究分担者 小坂志保，大橋尚弘(2025).【透析患者における急性イベント発生後の予後悪化因子】イベント発生後に予後悪化防止するための全般的健康度を上げるために重要なチーム医療の確立について，35(3)，11－14，透析フロンティア，扶桑薬品工業株式会社，大阪. 大橋尚弘 (2026).【推奨文・解説文】『CQ9 血液透析患者の生活習慣に対して，看護職を含む医療専門職による包括的療養支援は推奨されるか?』，日本腎臓リハビリテーション学会(編)，169-171，腎臓リハビリテーションガイドライン(改訂第 2 版)，南江堂，東京. 大橋尚弘，日本腎臓リハビリテーション学会(編)(2026).【推奨作成の経過】『CQ9 血液透析患者の生活習慣に対して，看護職を含む医療専門職による包括的療養支援は推奨されるか?』，171-175，腎臓リハビリテーションガイドライン改訂第 2 版，南江堂，東京.
酒向なつみ	高槻地区周産期連携の会，委員 大阪医科薬科大学大学院看護学研究科母性看護学領域修了生の会「はなもも・サクラの会」，運営
笹野奈菜	高槻地区周産期地域連携の会，委員 大阪医科薬科大学大学院看護学研究科母性看護学領域修了生の会「はなもも・サクラの会」，運営
柚木佐知子	大阪公立大学看護システム先端技術研究所，客員研究員 教育システム情報学会，社員 教育システム情報学会，重点研究推進委員会看護医療情報学研究部長 教育システム情報学会，関西支部運営委員 教育システム情報学会，研究会委員 教育システム情報学会，第 1 回研究会，企画セッション座長 第 50 回教育システム情報学会全国大会，企画セッション座長 第 50 回教育システム情報学会全国大会，奨励賞選定委員 関西大学・大阪医科薬科大学医工薬連環科学教育機構自由研究コンテスト第二次審査会，審査員

	第 20 回関西大学・大阪医科薬科大学医工薬連環科学教育機構シンポジウム, パネリスト 第 20 回社会福祉法人成光苑研究発表会, 審査員 医療系 e ラーニング全国交流会, 世話人 医療系 e ラーニング全国交流会, 副会長 第 20 回医療系 e ラーニング全国交流会, 企画運営 第 20 回医療系 e ラーニング全国交流会, 座長 日本看護学教育学会第 36 回学術集会, 企画運営委員 大阪医科薬科大学研究雑誌, 査読
城山敏江	特記なし
鈴木久美	一般社団法人日本看護系大学協議会, 理事 一般社団法人日本看護系大学協議会, データベース委員会, 委員長 一般社団法人日本看護系大学協議会, 高度実践看護師教育課程認定委員会, がん看護専門分科会, 委員 一般社団法人日本看護学教育評価機構, 評価委員会, 委員 日本慢性看護学会, 評議員 日本看護研究学会, 評議員 聖路加看護学会, 評議員 日本骨転移研究会, 理事 乳房健康研究会, 理事 日本がん看護学会誌, 専任査読委員 日本看護科学学会誌和文誌, 専任査読委員 日本慢性看護学会誌, 専任査読委員 日本看護研究学会誌, 専任査読委員 聖路加看護学会誌, 専任査読員 日本看護学会学術集会, 抄録選考委員 BMC Cancer, Reviewer Supportive Care in Cancer, Reviewer 愛知県立大学大学院, 非常勤講師 岐阜県立看護大学大学院, 非常勤講師 京都橘大学大学院, 非常勤講師 乳がん看護認定看護師教育課程, 非常勤講師 がん薬物療法看護認定看護師教育課程, 非常勤講師 公益社団法人日本看護協会 神戸研修センター認定看護師教育課程教員会, 委員 公益財団法人大阪対がん協会 2025 年度がん研究助成奨励金選考委員会, 委員 日本放射線腫瘍学会第 38 回学術大会日本骨転移研究会合同企画, 座長 第 21 回日本中性子補足療法学会学術大会, BNCT 臨床研究の現状と

	将来展望, シンポジスト 第 13 回骨転移フォーラム, 第 5 回日本骨転移研究会学術集会, 多職種からのアプローチ, シンポジスト 第 40 回日本がん看護学会学術集会, 企画委員 第 40 回日本がん看護学会学術集会, シンポジウム座長 第 40 回日本がん看護学会学術集会, 40 周年記念企画座長 大阪 QOL の会 (患者会) 世話人 南江堂月刊誌「がん看護」アドバイザー 第 23 回 SGH 看護特別賞受賞 鈴木久美 (2025). 婦人科がん患者の性・生殖機能障害に関わる心の問題, 臨床婦人科産科, 79(9), 786-791. 鈴木久美 (2026). Chapter 5 乳がん患者ケアと患者サポート 02 診断時のケア, 阿部恭子, 鈴木正人 (編), 乳がん患者ケアパーフェクトブック改訂第 2 版, 227-231, Gakken, 東京. 鈴木久美 (2026). Chapter 5 乳がん患者ケアと患者サポート 09 慢性期のケア 転移・再発不安への心理的サポート, 阿部恭子, 鈴木正人 (編), 乳がん患者ケアパーフェクトブック改訂第 2 版, 278-281, Gakken, 東京. 鈴木久美, 南口陽子 (2026). 第 4 章 がん患者および家族を包括的に理解し, がんとの共生における多様なニーズに応じて支援する能力に関するキーワード, 32 QOL, 藤田佐和 (編), ケアの基盤をつくるがん看護実践を支えるキーワード 70—事例でひもとく看護実践への活用, 107-111, 南江堂, 東京.
鈴木美佐	日本看護研究学会近畿北陸地方会, 世話人 大阪医科薬科大学 家族看護研究会, 企画・運営 大阪医科薬科大学 家族看護研究会 家族看護セミナー企画・運営 小児看護研究会 (大学院博士前期・後期課程, 修了生合同ゼミ) 企画, 運営 PMEC 子どもの採血・血管確保時の苦痛緩和のためのプログラム スタッフ研修会, 企画・運営 子どもの採血・血管確保時の苦痛緩和のためのプログラム スタッフ研修会, ファシリテーター 社会医療法人愛仁会リハビリテーション病院, 看護研究 講師 大阪医科薬科大学看護キャリアサポートセンター, 講師 大阪医科大学看護研究雑誌, 査読 池西静江, 鈴木美佐他 (2025). メディカコンクール 2025 第 115 回 看護師国家試験対策テスト第 1 回, メディカコンクール委員会, メディカ出版, 大阪. 池西静江, 鈴木美佐他 (2025). メディカコンクール 2025 第 115 回

	看護師国家試験対策テスト第2回，メディカコンクール委員会，メディカ出版，大阪。 池西静江，鈴木美佐他（2025）．メディカコンクール 2025 第 115 回看護師国家試験対策テスト第3回，メディカコンクール委員会，メディカ出版，大阪。 池西静江，鈴木美佐他（2026）．メディカコンクール 2025 第 116 回看護師国家試験対策テスト第1回，メディカコンクール委員会，メディカ出版，大阪。
谷水名美	日本クリティカルケア看護学会，庶務担当理事 日本移植・再生医療看護学会，理事・評議員 日本クリティカルケア看護学会，編集委員会委員 日本クリティカルケア看護学会，専任査読委員 日本移植・再生医療看護学会，将来構想委員会委員長 日本移植・再生医療看護学会，看護倫理委員会委員 日本移植・再生医療看護学会，セミナー委員会委員 看護質的統合法（KJ 法）研究会，世話人 Japan-USA Nursing Dosokai (Alumni)，Secretary 日本クリティカルケア看護学会，第 21 回学術集会 特別講演座長 日本移植・再生医療看護学会，第 20 回学術集会 倫理委員会企画交流集会座長 関西医科大学大学院看護学研究科，看護特別研究，講師 看護質的統合法（KJ 法）研究会，初心者研修 運営 谷水名美（2025）．クリティカルケア看護スタンダード，一般社団法人日本クリティカルケア看護学会（編），第 5 章 倫理的課題と多職種アプローチ，413-416，照林社，東京
寺田沙耶	公益社団法人つくし奨学・研究基金 研究発表会（演者） 口頭のせ健康長寿フェスタ～のせけん報告会～，企画・運営 大阪大学 香りの処方箋チャレンジ～香りが拓く「共感」のイノベーション～，主催
寺口佐與子	一般社団法人 日本看護系大学協議会会員校 関西・近畿ブロック，災害連携教員 日本移植・再生医療看護学会，第 7 期 理事・評議員 日本移植・再生医療看護学会 セミナー委員会，副委員長 日本移植・再生医療看護学会 広報委員会委員長 日本移植・再生医療看護学会 教育委員会副委員長 日本リンパ浮腫治療学会，評議員 日本リンパ浮腫治療学会 総務委員会 SNS 小委員会，委員 第 11 回 関西リンパ浮腫治療研究会，主催 リンパ浮腫 Net，副代表

	リンパ浮腫 Net 大阪地区会，世話役 第 36 回日本看護教育学会学術集会，学内企画実行委員 第 26 回 リンパ浮腫 Net 定例会，世話役 2025 年度 リンパ浮腫 Net 圧迫療法研修会，世話役 2025 年度 第 1 回日本移植・再生医療看護学会セミナー，主催 2025 年度 第 2 回日本移植・再生医療看護学会セミナー，講師 大阪医科薬科大学病院，リンパ浮腫看護外来
飛田伊都子	日本看護系大学協議会，看護学教育質向上委員会，委員 日本看護科学学会，看護倫理検討委員会，委員 医療の質・安全学会，代議員 日本腎臓リハビリテーション学会，幹事 医療行動分析学研究会，代表世話人 日本行動分析学会，監事・代議員 医療の質・安全学会，学術委員会，委員 医療の質・安全学会，医療の質・安全学会誌編集委員会，委員 日本腎臓リハビリテーション学会，編集委員会，委員 日本腎臓リハビリテーション学会，指導士認定制度委員会，担当幹事 日本腎臓リハビリテーション学会，学術委員会，多職種連携部会，部会員 日本腎不全看護学会誌，専任査読者 第 20 回医療の質・安全学会学術集会，運営委員会委員長・査読委員 第 20 回医療の質・安全学会学術集会，座長 第 16 回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会シンポジウム 1，シンポジスト 令和 7 年度 京都府看護協会 認定看護管理者教育課程ファーストレベル，講師 看護サービスの質管理，講師 第 84 回全国産業安全衛生大会，講師 鉄鋼業・窯業部会合同労働災害防止研究会，講演 神戸看護学会第 3 回講演会，講師 国際腎臓学会（World Congress of Nephrology）26 サテライトシンポジウム，プログラム・実行委員会委員 国際腎臓学会（World Congress of Nephrology）26 サテライトシンポジウム，イブニングセミナー，座長 Glen Taylor Nursing Institute for Family and Society at Minnesota State University, Mankato, Affiliate Faculty Member Creative Nursing, Reviewer Journal of Renal Care, Reviewer 京都大学大学院，非常勤講師 奈良県立医科大学，非常勤講師

	愛知県立大学，非常勤講師 飛田伊都子，学校法人大阪滋慶学園滋慶医療科学大学大学院（編）（2026）．安全な現場・職場をつくる，患者も一緒に考える，181-188，医療安全管理学 FIRST STEP：医療から介護・福祉まで，株式会社滋慶出版，東京． 飛田伊都子，日本腎臓リハビリテーション学会（編）（2026）．Ⅱ．腎臓リハビリテーションに要する評価：疾病管理・行動変容，47-51，腎臓リハビリテーションガイドライン改訂第2版，南江堂，東京．
津田泰宏	日本内科学会認定内科医，総合内科専門医，指導医 日本消化器病学会専門医，近畿支部評議員，指導医 日本肝臓学会認定専門医，西部会評議委員，指導医 京都橘大学 健康科学部，非常勤講師 大阪保健医療大学，客員教授 関西福祉科学大学，非常勤講師 大阪信愛学院大学，非常勤講師 看護学系漢方教育研究会，世話人
山埜ふみ恵	高槻市社会福祉協議会，学生ボランティア派遣調整 公衆衛生看護学分野保健師卒業生同窓会，運営 日本看護学教育学会第36回学術集会，企画運営委員
山岡由実	PAS セルフケアセラピー看護学会，代表理事 日本精神保健看護学会，評議員 日本精神保健看護学会，災害対策委員会，委員 日本看護学教育評価機構，評価員 日本看護学教育学会，第36回学術集会，企画委員 日本統合失調症学会，第19回日本統合失調症学会，企画委員 大阪医科薬科大学医学会雑誌，編集委員 日本精神保健看護学会，査読委員 神戸看護学会誌，専任査読委員 大阪医科薬科大学医学会雑誌，査読者 大阪医科薬科大学看護研究雑誌，査読者 大阪医科薬科大学薬学部雑誌，査読者 日本精神保健看護学会，第35回学術集会，災害対策委員会企画ワークショップ，企画・運営 日本精神保健看護学会，第35回学術集会，シンポジウム，座長 日本統合失調症学会，第19回日本統合失調症学会，一般演題（口演），座長 Viatris Expert Seminar，座長 対話実践プロジェクト - 現場で生かすオープンダイアログ基礎編，企画・運営

	精神看護・CNS 研究会，企画・運営 リエゾンの会，世話人 日本精神保健看護学会災害対策委員会：サイコロジカルゼロエイド（動画・手引き），日本精神保健看護学会ホームページ，https://japmhn.jp/a/3210，(2026 年 3 月 9 日公開) 東京医科大学，科目担当講師 夢ナビ講義，講師 夢ナビ講義 Video，講師
山内彩香	日本看護研究学会 近畿・北陸地方会，事務職（庶務担当） 2025 年度 International Day，企画・運営 国際関連学生 OB・OG 会（NEXT），企画・運営 日本精神保健看護学会，第 35 回学術集会，虐待防止ワークショップ，企画・運営 対話実践プロジェクト - 現場で生かすオープンダイアログ基礎編，企画・運営
安田稔人	日本足の外科学会，理事 日本足の外科学会認定医委員会担当，理事 日本スポーツ整形外科学会，代議員 日本整形外科学会専門医資格委員会，委員長 日本靴医学会，評議員 中部日本整形外科災害外科学会，評議員 関西臨床スポーツ医・科学研究会，幹事 近畿足の外科研究会，世話人 アキレス腱断裂診療ガイドライン，策定委員 American Orthopaedic Foot and Ankle Society (AOFAS) international member Editorial Board of the Journal of Orthopaedic Science 日本整形外科学会，専門医・スポーツ医・リウマチ医・運動器リハビリテーション医 日本スポーツ協会，公認スポーツドクター 日本リウマチ学会，リウマチ専門医 日本足の外科学会，認定足の外科認定医 ロコモアドバイザー 第 144 回中部日本整形外科災害外科学会学術集会 一般演題（口演），座長 第 145 回中部日本整形外科災害外科学会学術集会 シンポジウム，座長 第 145 回中部日本整形外科災害外科学会学術集会 一般演題（口演），座長

	第 39 回日本靴医学会学術集会 一般演題（口演），座長 第 50 回日本足の外科学会学術集会白樺セミナー，講演（演者） 第 50 回日本足の外科学会学術集会教育研修講演，座長 第 50 回日本足の外科学会学術集会シンポジウム，座長 第 12 回大阪医科薬科大学市民看護講座，講演（演者） 看護学実践研究センター継続セミナー講演，座長 第 9 回大阪医科薬科大学看護研究会基調講演，座長 カムカムサロン，講師 大阪医科薬科大学病院 整形外科，外来診療・手術 安田稔人(2025). 運動器疾患 最新ガイドライン，竹下克志（編），ア キレス腱断裂の診断・治療指針，705-707，総合医学者，東京
安富依子	特記なし

編集後記

本年度は、大学統合 5 年目という一つの節目を迎えた年でした。大阪医科薬科大学看護学部・看護学研究科として、地域や社会に発信する多角的な活動の成果が、本年報に数多く記録されました。年報編集委員会では、昨年度に引き続き、予算や業務の省力化・効率化に注力しながら編集体制の維持に努め、このたび「大阪医科薬科大学看護学部年報 2025 年度」を無事に発刊することができました。

本報告書が、皆様の今後の活動や自己点検に役立てていただけたら幸いです。最後に、年報作成にご協力いただいた教職員、関係者各位に深くお礼申し上げます。

2026 年 7 月 大阪医科薬科大学看護学部 年報編集委員会

大阪医科薬科大学看護学部 大阪医科薬科大学大学院看護学研究科
2025 年度 年報

発行日	令和 8 年 7 月 31 日
発 行	大阪医科薬科大学看護学部 大阪医科薬科大学大学院看護学研究科 〒569-0095 大阪府高槻市八丁西町7-6
編 集	看護学部 年報編集委員会 寺口佐與子 森瞳子 倉橋理香 城山敏江
制 作	株式会社 遊文舎

